

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (209)

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書 (4)

う え か せ だ
上加世田遺跡 1

1～3次調査

(南さつま市加世田川畑)



鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター
1発掘調査報告書
(209)

上加世田遺跡 1

二〇二一年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2021年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



序 文

この報告書は、文化庁の補助金を受け実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、本県で「よみがえる『河口コレクション』の世界事業」と呼称する事業に伴い、令和2年度に実施した上加世田遺跡の整理作業の記録です。

故河口貞徳氏は、昭和20年代から半世紀以上の永きにわたり、鹿児島県本土はもとより薩南諸島までの各地で考古学的調査を行いました。また、鹿児島県考古学会長や鹿児島県文化財保護審議会委員として、本県文化財の保護に尽力されました。氏が発掘・収集された多くの資料は、平成24年12月に遺族の方々の御厚意により鹿児島県立埋蔵文化財センターへ一括寄贈されました。本事業は、寄贈資料の中から学史的に重要で全国に知られている遺跡に関する資料を選び、あらためて調査内容の整理を行ない、その評価について全国へ情報発信し、活用を図ることを目的としています。

今回報告する上加世田遺跡は、縄文時代晩期を主体とする遺跡で、これまで12回にわたって発掘調査が実施されています。氏は1次から6次の調査統括として発掘調査に直接参加し、その後も調査指導者としての立場で関わってこられました。とりわけ、遺跡発見のきっかけとなった昭和43年10月に開始した1次調査では、宅地造成で消滅していく遺跡を座視できなかった氏の文化財保護に対する高い意識と情熱を強く感じます。

本書では、これまで資料化されていなかった遺構・遺物を中心に掲載しました。本書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助になることを願っております。

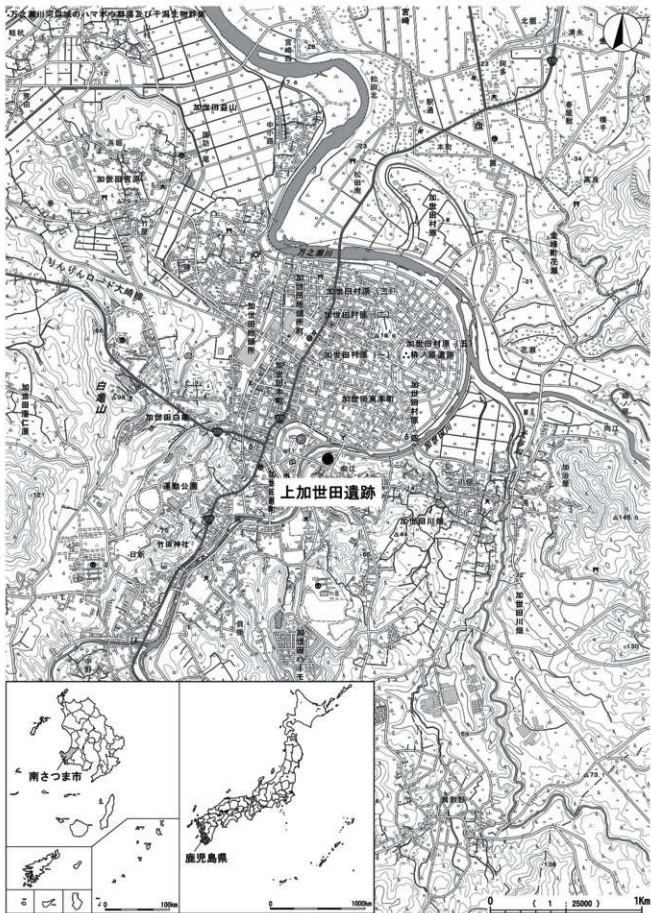
最後になりますが、本書の刊行にあたりご協力をいただきました南さつま市教育委員会及び各関係機関に厚くお礼を申し上げます。

令和3年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 前 迫 亮 一

報 告 書 抄 録

ふりがな	うえかいせだいせき							
書名	上加世田遺跡							
副書名	県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書(4)							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第209集							
編集者名	松山初音・横手浩二郎							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL. 0995-48-5811							
発行年月	西暦2021年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
うえかいせだいでいせき 上加世田遺跡	鹿児島県 南さつま市 加世田 川畑	46220	220-11	31° 24' 40"	130° 19' 30"	1次 1968.10.10 ～ 1968.11.10 2次 1968.12.25 ～ 1969.1.5 3次 1969.8.11 ～ 1969.8.18	31 177.5 24	記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上加世田遺跡	集落跡	縄文時代後期～ 晩期初頭 弥生～古墳時代 古代～中世	住居跡 ピット 集石 配石状の石組み	御領式土器 上加世田式土器 入佐式土器 土製品 石斧 石織 岩偶 石棒 軽石製加工品 垂飾品 成川式土器 須恵器 土師器 青磁 白磁 染付		上加世田式 土器の 標式遺跡		
遺跡の概要	<p>上加世田遺跡は、鹿児島県南さつま市の標高約20mの河岸段丘上に位置する遺跡である。県内の縄文時代晩期を代表し、上加世田式土器の標式遺跡でもある。</p> <p>本遺跡は、1968(昭和43)年10月から11月に実施された1次調査を皮切りにこれまで12次の調査が行われている。1～6次調査において、河口貞徳氏が調査主体者もしくは調査責任者として深く関わった。その成果に関する資料や遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターと南さつま市教育委員会が保管している。そのうち、1～3次調査の成果を今日の視点で再整理したものが、本報告書である。</p> <p>1～3次調査では住居跡・集石・ピット等が検出された。また、上加世田式土器を中心とした多量の土器、石斧や石織等の石器、岩偶、土製品、軽石製品、玉製品等が出土した。</p>							



上加世田遺跡位置図 (1 : 25,000)

例 言

- 1 本書は鹿児島県が文化庁の補助を受け、本県で「よみがえる『河コレクション』の世界事業」と呼称する事業に伴う発掘調査報告書である。
- 2 上加世田遺跡は南さつま市上加世田川畑に所在する。
- 3 報告書作成（整理作業）は鹿児島県教育委員会が調査主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、全章にわたって「埋文センター」）が担当し実施した。
- 4 本書での敬称は、河口貞徳氏も含め省略する。
- 5 これまで12次にわたって実施された上加世田遺跡の発掘調査のうち、河口は1次から6次の発掘調査に大きく関わってきた。
- 6 整理作業において、必要に応じて遺物注記を行った。
- 7 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 8 遺物の観察表の法量において括弧内に記載してある数値は、残存長である。
- 9 挿図の縮尺は、挿図毎に示した。
- 10 出土遺物の実測・トレースは、各章の担当が埋文センターの会計年度任用職員の協力を得て行った。
- 11 自然科学分析は、埋文センター南の縄文調査室の永濱功治が担当した。
- 12 出土遺物の写真撮影は、横手・松山が行った。
- 13 掲載遺物のうち、土器の実測については埋文センターの黒木梨絵、石器の実測については横手浩二郎、第II章の執筆には倉元良文の支援を得た。
- 14 土層断面実測図の注記に「黝（ユウ）」が使われている。最近使われることはほとんどないが、「青黒い、黒い、黒みを帯びる、うす暗い」という意味をもつ漢字である。
- 15 本書の編集は、松山が行った。
- 16 本書の執筆分担は、次のとおりである。
 第I章 ……………松山・倉元
 第II章 ……………松山
 第III章 ……………松山・横手
 第IV章 ……………永濱
 第V章 ……………松山・横手
- 17 本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し、展示活用を図る予定である。
- 18 本書掲載の遺物の縮尺は、以下のとおりである。ただし、縮尺が異なる場合もあるので、各図に提示してある縮尺を参照していただきたい。

土 器 …………… 1 / 4

石 器（剥片、石核等） …… 4 / 5
 石 器（石斧、磨・敲石等） …… 1 / 3
 垂飾品 …………… 4 / 5

- 19 土器の色調は、日本標準土色帖に拠る。
- 20 抄録は、河口の調査成果に基づいて作成した。
- 21 本報告書作成に関して南さつま市教育委員会の作成した図面等を提供していただいた。
- 22 遺物の実測図で用いた表現は以下のとおりである。

【土器等】

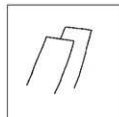
ナデ



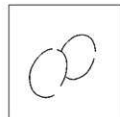
強い指ナデ



工具ナデ



指オサエ



貝殻条痕



ミガキ



ケズリ



本文目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言

目次

第Ⅰ章 事業の経緯と経過	1
第1節 事業の経緯と内容	1
第2節 整理・報告書作成業務	1
第3節 再整理の方法及び報告書の構成	2
第Ⅱ章 調査の経緯及び成果の概要	3
第1節 遺跡の位置と環境	3
第2節 調査の概要	3
第3節 1次調査の概要	6
第4節 2次調査の概要	13
第5節 3次調査の概要	21

第Ⅲ章 1～3次調査の遺物	25
第1節 土器	25
第2節 石器	54
第Ⅳ章 自然化学分析	74
第1節 試料	74
第2節 観察・分析方法	74
第3節 結果	74
第4節 考察	74
第Ⅴ章 1～3次調査の総括	76
第1節 遺構について	76
第2節 土器について	76
第3節 石器について	80
写真図版	81

挿図目次

第1図 1～3次調査トレンチ配置図	5
第2図 1次調査の層序把握の推移	6
第3図 1次調査aトレンチV区土層断面略図	7
第4図 1次調査aトレンチ遺構配置図	8
第5図 1次調査aトレンチ住居跡	10
第6図 1次調査住居跡遺物出土状況図	11
第7図 1次調査住居跡上層遺物出土状況図及び 河口メモ	12
第8図 2次調査の基本層序	13
第9図 2次調査トレンチ土層断面図1	14
第10図 2次調査トレンチ土層断面図2	15
第11図 2次調査検出遺構略図	18
第12図 Cトレンチ2層遺物出土状況図(上)、 3層遺物出土状況図1(下)	19
第13図 Cトレンチ3層遺物出土状況図2	20
第14図 3次調査の層序	21
第15図 3次調査土層断面図	22
第16図 3次調査Fトレンチ検出遺構	23
第17図 3次調査遺物出土状況図	24

第18図 遺構内出土土器①(縄文深鉢)	27
第19図 遺構内出土土器②(縄文深鉢)	28
第20図 包含層出土土器①(縄文深鉢)	29
第21図 包含層出土土器②(縄文深鉢)	30
第22図 包含層出土土器③(縄文深鉢)	33
第23図 包含層出土土器④(縄文深鉢)	34
第24図 包含層出土土器⑤(縄文深鉢)	35
第25図 包含層出土土器⑥(縄文深鉢)	36
第26図 包含層出土土器⑦(縄文深鉢)	37
第27図 包含層出土土器⑧(縄文深鉢)	38
第28図 包含層出土土器⑨(縄文深鉢)	39
第29図 包含層出土土器⑩(縄文深鉢)	40
第30図 包含層出土土器⑪(縄文深鉢)	41
第31図 包含層出土土器⑫(縄文深鉢)	42
第32図 包含層出土土器⑬(縄文小型深鉢)	44
第33図 包含層出土土器⑭(縄文中鉢)	45
第34図 包含層出土土器⑮(縄文浅鉢)	47
第35図 包含層出土土器⑯(縄文浅鉢・マリ形・ 皿形土器)	49
第36図 包含層出土土器⑰(縄文その他の土	

	器)・表採土器……………	50	第43図	包含層出土石器③……………	58
第37図	包含層出土石器⑯(縄文調査次不明)		第44図	包含層出土石器④……………	59
	……………	52	第45図	包含層出土石器⑤……………	60
第38図	包含層出土石器⑰(弥生～古墳) ……	53	第46図	包含層出土石器⑥……………	61
第39図	包含層出土須恵器・土師器・陶磁器(古 代以降) ……	54	第47図	包含層出土石器⑦……………	63
第40図	遺構内出土石器……………	55	第48図	包含層出土石器⑧……………	64
第41図	包含層出土石器①……………	56	第49図	表採玉製品・調査次不明石器……………	65
第42図	包含層出土石器②……………	57	第50図	上加世田遺跡縄文後期後半土器分類図 ……………	78

表 目 次

第1表	上加世田遺跡調査歴……………	4	第9表	縄文土器観察表③……………	68
第2表	上加世田遺跡関連の文献一覧表(刊行年 度順) ……	4	第10表	縄文土器観察表④……………	69
第3表	1次調査野帳における遺構・遺物に關す る記述……………	7	第11表	縄文土器観察表⑤……………	70
第4表	1次調査aトレンチ遺構等一覧表 ……	9	第12表	縄文土器観察表⑥……………	70
第5表	2次調査日誌の記述一覧……………	17	第13表	古代以降須恵器・土師器観察表……………	70
第6表	3次調査日誌の記述一覧……………	22	第14表	古代以降陶磁器観察表……………	70
第7表	縄文土器観察表①……………	66	第15表	縄文時代石器観察表①……………	71
第8表	縄文土器観察表②……………	67	第16表	縄文時代石器観察表②……………	72
			第17表	縄文時代石器観察表③……………	73

図 版 目 次

巻頭図版	上加世田遺跡軽石製品・玉類・石製品		図版16	上加世田遺跡出土石器⑬……………	96
図版1	1次調査調査風景……………	81	図版17	上加世田遺跡出土石器⑭……………	97
図版2	2次調査調査風景……………	82	図版18	上加世田遺跡表採土器……………	98
図版3	3次調査調査風景……………	83	図版19	上加世田遺跡出土石器⑮(調査次不明) ……………	99
図版4	上加世田遺跡出土石器①(1次調査住居 跡内) ……	84	図版20	上加世田遺跡出土石器⑯(弥生～古墳・ 古代以降) ……	100
図版5	上加世田遺跡出土石器②……………	85	図版21	上加世田遺跡出土石器⑰……………	101
図版6	上加世田遺跡出土石器③……………	86	図版22	上加世田遺跡出土石器⑱……………	102
図版7	上加世田遺跡出土石器④……………	87	図版23	上加世田遺跡出土石器製品・玉類……………	103
図版8	上加世田遺跡出土石器⑤……………	88	図版24	上加世田遺跡出土軽石製品・獣形勾玉 ……………	104
図版9	上加世田遺跡出土石器⑥……………	89			
図版10	上加世田遺跡出土石器⑦……………	90			
図版11	上加世田遺跡出土石器⑧……………	91			
図版12	上加世田遺跡出土石器⑨……………	92			
図版13	上加世田遺跡出土石器⑩……………	93			
図版14	上加世田遺跡出土石器⑪……………	94			
図版15	上加世田遺跡出土石器⑫……………	95			

第 I 章 事業の経緯と経過

第 1 節 事業の経緯と内容

故河口貞徳は、昭和 46（1971）年から平成 23（2011）年まで長年にわたり鹿児島県考古学会の会長として本県考古学の発展に寄与、さらに、昭和 28（1953）年から平成 7（1995）年まで本県文化財保護審議会委員として本県文化財の保護に尽力された人物で、平成 23（2011）年 1 月に 101 歳で逝去された。

河口は本県の埋蔵文化財保護行政が整備される以前の昭和 20 年代から、県内に所在する遺跡の学術的調査や開発に伴う緊急調査を精力的に行ってきた。その資料は、本県の歴史を語る上で欠かせない貴重なものである。その一部は河口が保管・収蔵していた（以下、「河口コレクション」という。）が、逝去後の平成 24（2012）年 12 月、御遺族から埋文センターへ寄贈されることとなった。

河口コレクションが埋文センターに寄贈された後、平成 24 年度は「緊急雇用創出事業臨時特例基金事業」を活用した「埋蔵文化財活用整理事業」を実施し、梱包を解き、資料毎の分類や遺物の洗浄などの基礎的な整理作業を行った。平成 25 年度も同基金事業を活用した「重要遺物等選択・公開事業」を実施し、山ノ口遺跡の土器・石器の図化や上加世田遺跡の軽石製岩偶のレプリカ制作、記録写真の整理、公開用のデータベース化、さらに平成 25 年度末から平成 26 年度には「起業支援型緊急雇用事業」を導入した「重要遺跡調査整理事業」を実施し、上加世田遺跡から出土した遺物の接合等の基礎整理作業を民間業者に委託して行った。

平成 27 年度から令和元年度の 5 年間は、文化庁の国庫補助事業「県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を活用し、『「河口コレクション」整理活用事業』を実施した。平成 27 年度は、河口コレクションの台帳整理や関連文献の収集のほか、「かごしま遺跡フォーラム 2015」を実施し、河口コレクションの一部成果を展示した。平成 28 年度から『「河口コレクション」整理活用事業』は、国庫補助事業「県内遺跡事前調査等事業」の中で実施することとなった。台帳等の基礎整理作業に加え、総合的な整理・報告がなされていない重要遺跡について将来的にわたって保存・活用を図るために、順次今日の視点で整理作業を行った。平成 29 年度は、昭和 30 年代に発掘調査が行われた「山ノ口遺跡」の報告書を刊行した。平成 30 年度は河口が関わった離島に所在する遺跡の中から 8 遺跡を選択し整理作業を行い、「吐噶喇・奄美の遺跡」という名称で報告書を刊行した。令和元年度は昭和 28（1953）年と昭和 29（1954）年に河口が調査に関わった「出水貝塚」の報告書を刊行した。

そして令和 2 年度からは、文化庁の国庫補助事業を活用した『よみがえる「河口コレクション」の世界事業』を 5 年計画で開始した。本年度は、河口が調査主体者として 3 回、調査統括として 3 回調査に関わった「上加世田遺跡 1 1～3 次調査」の報告書を刊行し、また、必要に応じて河口コレクションで上加世田遺跡以外の遺跡から出土した遺物や写真・図面等の資料について整理作業を行うこととなった。

第 2 節 整理・報告書作成業務

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、主に令和 2 年 4 月から令和 3 年 3 月にかけて埋文センターで行った。令和元年度は「出水貝塚」の報告書作成作業と共に、本報告書に関する基礎整理作業として、寄贈された資料と既報告分の資料との照合作業等を行った。令和 2 年度は遺物の再実測・トレース、未報告の現場図面のトレースや図版のレイアウト等の編集作業と同時に、令和 3 年度刊行予定の「上加世田遺跡 2 4～6 次調査」の基礎整理作業を実施した。

整理・報告書作成業務に関する調査体制は、以下のとおりである。

令和元年度調査体制（整理作業）

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 前迫 亮一
調査企画	次長兼総務課長 野間川 誠
	調査課長 中村 和美
	主任文化財主事兼第一調査係長
	宗岡 克英
調査担当	文化財主事 大保 秀樹
	文化財研究員 松山 初音
事務担当	主 査 新徳 秀貴
調査指導	鹿児島県考古学会
	会 長 本田 道輝
	同志社大学
	教 授 水ノ江和同
	文化庁文化財部文化財第二課
	文化財調査官 藤井 幸司

令和 2 年度調査体制（整理作業）

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会

調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所 長	前迫 亮一	
調査企画	次 長 兼 総 務 課 長	野間口 誠	
	調 査 課 長	中村 和美	
	調査課第二調査係長	横手浩二郎	
調査担当	文化財研究員	松山 初音	
事務担当	主 査	新徳 秀貴	
調査指導	鹿児島県考古学会		
	会 長	本田 道輝	
	熊本大学埋蔵文化財調査センター		
	准 教 授	大坪 志子	
	文化庁文化財部文化財第二課		
	文化財調査官	斉藤 慶史	

なお、本報告書の刊行に当たり、掲載内容の妥当性等について下の委員会を開催し、検討を行った。

報告書作成指導委員会	令和2年11月24日ほか4回
	中村調査課長他6名
報告書作成検討委員会	令和2年11月26日
	前迫所長他6名

第3節 再整理の方法及び報告書の構成

本報告書では上加世田遺跡の再報告を行うが、その包括的な再整理の方法及び報告書の構成に関して説明する。

上加世田遺跡については、昭和43(1968)年の1次調査から平成8(1996)年の12次調査まで行われている。上加世田遺跡に関する資料のうち、河口コレクションとして埋文センターが保管している資料は1～3次調査に係る全ての調査記録と遺物、4～6次調査に係る全ての調査記録と2割程度の遺物である。4～6次調査に係る遺物の約8割の遺物は南さつま市教育委員会が保管している。これまで、1～6次調査の成果についてそれぞれに報告はされてきたが、未報告の成果も多々残されていた。そこで埋文センターでは、未報告の成果をより多く資料化するために、令和2年度から翌3年度の2年にかけて報告書を刊行することとした。埋文センターが保管している調査記録や資料を基に、「上加世田遺跡1」(本報告書)では1～3次調査の成果を、令和3年度刊行予定の「上加世田遺跡2」では4～6次の調査成果を中心に掲載する。

まずは、上加世田遺跡に係る調査次毎の現場図面等の発掘調査記録や、発掘調査日誌等の所在確認と関係する報告書との内容確認、出土遺物の内容と報告書等で資料化されているか否かの確認を行った。その後、年度ごとの報告書に掲載する内容や資料を検討した。また、必要に応じて既報告の遺物も含めて掲載することも検討した。

調査次ごとの出土遺物の抽出にあたっては、注記や遺物カード(荷札)の確認をしながら既報告の遺物実測図や掲載写真との照合、現場図面・写真との照合等を行った。その後、遺物の実測を行い掲載したが、必要に応じて南さつま市教育委員会発行の報告書から転載したのものもある。

本報告書で1～3次調査の成果概要をまとめるにあたって、調査期間・調査範囲・層序そして遺構・遺物を中心とした調査成果の順で記述する。当時作成された調査現場での様々な実測図や残された記録が少ないこと、遺物を取り上げる場合に番号を付していないことから、遺物そのものの特定や出土位置や現場写真との照合も困難な部分もあった。そのため調査全体を包括する概要等を示すことが難しい状況であった。そこで、調査成果をイメージしやすいように、各調査次に河口の記した野帳や調査者が日々残した調査日誌の略図や記述、現場写真等を頼りに遺構・遺物の検出・出土状況の復元を可能な範囲で試みた。この作業に際しては、略図であっても位置的な情報が残されているものだけに限定して取り扱った。

土器については、これまでいくつか写真で紹介されているが、出土量と比べるとその点数は僅かである。そこで、今回は、なるべく多くの土器を資料化することを大きな目標としたが、出土量の多さと報告書の誌面数に制限がある関係で全体的な形状がわかるものを優先的に抽出し、実測(再実測を含む)・掲載した。その際、より多く掲載するために、実測図は1/4の縮尺で掲載した。(遺構内出土の土器に関する出土状況図においては、この限りではない。)そして、上加世田式土器を中心に大まかな分類を行った。

石器についても土器と同様に資料化してあるものは少ない。紙面数の都合で全てを資料化できないが、抽出・掲載した。その他の遺物については、特徴的な遺物を抽出・掲載した。

その上で、1～3次調査で得られた成果を基に遺跡や遺物の特徴や性格について述べる。図版は、当時の発掘調査の状況や雰囲気伝える未報告の現場写真等を抽出し掲載した。掲載分の遺物写真については、今回再撮影を行った。

なお、河口の業績や調査歴等については、平成29年度に刊行した『山ノ口遺跡』2018 埋文センター』に詳しいので参照頂きたい。さらに、河口コレクションが埋文センターに寄贈されると決定された以降の作業内容等については、これまで刊行された『山ノ口遺跡』2018 埋文センター』、『吐噺喇・奄美の遺跡』2019 埋文センター』、『出水貝塚』2020 埋文センター』に詳細を掲載してあることから、これらを参照いただきたい。

第二章 調査の経緯及び成果の概要

第1節 遺跡の位置と環境

上加世田遺跡の所在する南さつま市は薩摩半島の南西端に位置する。南及び西側は東シナ海に面し、北側は鹿児島市・日置市、東側は枕崎市・南九州市に隣接し、総面積は283.59 km²を測る。海岸線の北西部は日本三大砂丘の1つに数えられる砂丘地帯を形成し、南西部は変化に富んだりアス式海岸が続く。南さつま市の中心部である上加世田市街地付近は万之瀬川とその支流である上加世田川の下流域にあたり、沖積平野や比較的緩やかな丘陵地が続く地形となっている。上加世田遺跡はこの沖積平野の南側に広がるシラス台地の北端に位置する。かつて遺跡の西側には上加世田川が大きく蛇行し、周辺は急崖となっていたが、現在では河川改修や道路拡幅等が行われ、調査が始まった半世紀前の雰囲気は乏しくなっている。

上加世田遺跡が所在する南さつま市では、合併前の旧上加世田市及び旧金峰町で多くの遺跡が知られている。旧石器時代の遺跡としては湯間原遺跡・平渡瀬遺跡・楯ノ原遺跡等がある。楯ノ原遺跡は縄文時代草創期の煙道付炉穴や集石、配石坪などの遺構と隆帯文土器、丸ノミ状の磨製石斧、石皿等が発見され、全国的にも著名な遺跡となっている。縄文時代草創期における南九州の先進性を示す縄文遺跡として平成9（1997）年に国指定史跡となった。また、志風原遺跡も同時期の遺跡として知られている。縄文時代前中期頃の遺跡としては阿多貝塚、上焼田遺跡、堀川貝塚等がある。阿多貝塚は南九州における代表的な貝塚で、令和2（2020）年に国指定史跡となった。

縄文時代晩期の遺跡としては、上加世田式土器の標式遺跡である上加世田遺跡が著名である。

弥生時代の遺跡としては、昭和37（1962）・38（1963）年に発掘調査が行われた前期から中期初頭の高橋貝塚が広く知られている。稜痕のある土器や石包丁・柱状石斧など、稲作農耕の存在を示すものや、南海産の貝輪末製品が出土するなど、当時の交易を窺い知ることのできる遺跡として古くから研究の対象となってきた。また、同じ沖積平野を挟んで位置する尾下台地には、V字状大溝が検出された松木遺跡がある。さらに南側にある中津野台地には、中津野式土器の標式遺跡である中津野遺跡が所在する。

古墳時代では、かつて六堂会古墳と呼ばれた奥山古墳がある。戦前に調査が行われ、箱式石棺と人骨や副葬品を確認している。平成17（2005）年に再度調査が行われ、周溝を伴う古墳であることが明らかにされた。

古代においては、最近も調査が行われている須恵器窯

の中岳山麓古窯跡群や古代阿多郡の郡衙跡と推定される小中原遺跡がある。中世では、多種多様な輸入陶磁器と、東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国産陶器等が出土している持林松遺跡が万之瀬川右岸に位置する。さらに、本遺跡においても、7次調査の第II地点で製鉄址関係の遺構や遺物が発見されている。

第2節 調査の概要

上加世田遺跡の発掘調査は、県道の開削工事に端を発した調査である。昭和43（1968）年11月に実施した1次調査を皮切りとして、平成8（1996）年の12次調査まで行われている。河口は1次調査から6次調査まで調査者として、それ以降も調査指導者として発掘調査に関わってきた。これまでの当遺跡の発掘調査歴については第1表に、発掘調査成果を記した報告書もしくは河口が執筆した文献については刊行年順に第2表に示した。

各次の調査を実施するまでの経緯等については、河口が執筆した様々な報告書や文献、南さつま市教育委員会等の刊行した報告書に掲載されていることから、ここでは調査成果を中心に掲載する。掲載にあたっては河口の記録した調査時の実測図・野帳・写真を手掛かりに当時の調査成果を可能な範囲で復元した。従って、その中には推定部分も含むが、その場合には明記してある。

なお、9次・10次調査に関して鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課という。）が保管している文書をもとに調査概要を補足する。南さつま市教育委員会刊行の文献14・15によれば、9次調査は平成6（1994）年5月となっている。同年6月に加世田市が文化財課へ提出した埋蔵文化財保管証の発見年月日の欄には「自平成6年5月1日 至 平成6年6月2日」とあることから同期間に調査が実施されたと考えられる。その際の遺物は「縄文時代晩期土器・石織その他パンケース2箱分」の記載がある。また、同じく文献14・15によれば、10次調査は平成6（1994）年6月に実施し、調査起因は個人住宅建築（試掘）とある。同年7月に文化財課へ提出した埋蔵文化財保管証では発見年月日は「平成6年5月23日 至 平成6年6月3日」とある。9次調査と10次調査が重なっている期間があり、どのような日程で調査を行ったかは不明である。

上加世田遺跡の調査成果物のうち、埋文センターが管理している河口コレクションには、1次調査から3次調査に係る全ての調査記録及び遺物と、4次調査から6次調査に係るすべての調査記録と遺物の約2割程度が含まれている。南さつま市教育委員会は4次調査から6次調

第1表 上加世田遺跡調査歴

調査次数	調査期間	調査起因等	調査主体	備考
1次	昭和43(1968)年10月10日～11月10日	宅地造成	河口貞徳	
2次	昭和43(1968)年12月25日～昭和44年1月5日	宅地造成	鹿児島県史跡調査会	
3次	昭和44(1969)年8月11日～8月18日	宅地造成	河口貞徳	
4次	昭和45(1970)年12月25日～昭和46年1月7日	宅地造成	加世田市教育委員会 (4～6次調査の調査 経括として河口貞 徳は調査に参加)	発掘未了箇所があったため、9日以降に3日間の追加調査を実施 2～3月に第1地点、6～9月に第2地点の調査を実施 7次調査第1地点隣接地の調査を実施 樹木の移植により、一時中断 調査成果は12次調査報告書(第2表文獻12)に掲載 調査結果は12次調査報告書(第2表文獻12)に掲載 遺跡範囲の確認を目的として実施 最終的な発掘調査で記録保存を図る。
5次	昭和46(1971)年12月25日～昭和47年1月6日	宅地造成		
6次	昭和48(1973)年3月2日～3月14日	宅地造成		
7次	昭和59(1984)年2月13日～昭和59(1984)年6月4日	加世田川遺跡及び特別緊急事業		
8次	昭和60(1985)年4月22日～昭和61(1986)年2月24日	加世田川遺跡及び特別緊急事業		
9次	平成6(1994)年5月	急傾斜崩壊対策		
10次	平成6(1994)年6月	個人住宅建築(既調査)		
11次	平成6(1994)年10月13日～12月19日	重要遺跡確認緊急調査		
12次	平成8(1996)年9月2日～平成9年3月28日	個人住宅建築等		

第2表 上加世田遺跡関連の文献一覧表(刊行年度順)

文献番号	刊行年	文献名	掲載調査回数	備考
1	昭和44(1969)年	鹿児島県上加世田遺跡『考古学ジャーナル』第30号	1・2次調査	1次調査a・トレレンチと2次調査c・トレレンチを中心に報告 遺物は写真で紹介
2	同上	「上加世田遺跡」『加世田』3号 加世田高等学校	2次調査	遺物は写真で紹介 1・2次調査のトレレンチ配置図を掲載
3	昭和46(1971)年	「上加世田遺跡発掘調査概報」加世田市教育委員会	4次調査	トレレンチ配置図及び遺物出土状況図、現場写真、遺物写真を掲載
4	昭和47(1972)年	「上加世田遺跡発掘調査概報」加世田市教育委員会	5次調査	発掘区域図(含地図)、4年度発掘区域図(含遺物出土状況図)、発掘写真、遺物写真を掲載
5	昭和48(1973)年	「上加世田遺跡」『鹿児島考古』第7号	6次調査	年度別発掘区分図(含遺物出土状況図)、遺跡実測図、実測図(土器9点・石器17点・岩類他9点)現場写真、遺物写真を掲載
6	昭和48(1973)年	「上加世田遺跡」『日本考古学年報』24 日本考古学協会	5次調査	5次調査の概要
7	昭和56(1981)年	「上加世田遺跡」『日本考古学年報』21・22・23 日本考古学協会	1～4次調査	1～4次調査の概要をそれぞれ10行程度で報告
8	昭和60(1985)年	「上加世田遺跡-1」加世田市教育委員会	7次調査	第1地点 第2地点の調査成果を合本して報告
9	昭和62(1987)年	「上加世田遺跡-2」加世田市教育委員会	8次調査	7次調査第1地点隣接地の調査成果を報告
10	昭和63(1988)年	「上加世田遺跡」『日本の古代遺跡』38 鹿児島県 保育社		上加世田遺跡の紹介
11	平成2(1990)年	「縄文晩期の土器」『鹿児島考古』第24号	3次調査	3次調査出土の土器を中心に晩期土器の分類を行っている。6次調査分の土器もある。
12	平成8(1996)年	「上加世田遺跡」加世田市教育委員会	11次調査	
13	平成17(2005)年	「上加世田遺跡」『先史古代の鹿児島 資料編』鹿児島県教育委員会		上加世田遺跡の紹介
14	平成27(2015)年	「上加世田遺跡 12次調査」南さつま市教育委員会	12次調査	「発掘調査の経緯」に「9次調査の成果については本報告書に掲載している」とある。
15	令和2(2020)年	「上加世田遺跡 4～6次調査」南さつま市教育委員会	4～6次調査	4～6次調査の本報告書

査に係る遺物の約8割を管理しているが、その遺物を中心に国庫補助事業及び県補助事業を活用して「上加世田遺跡 4～6次調査」を令和2(2020)年3月に刊行した。

河口は1・2次調査の成果を文獻1で、2次調査の成果を文獻2で報告している。3次調査については、土器の一部を文獻11で報告している。文獻1では1次調査における土器の出土状況1点、遺物41点を写真で報告しているが、遺物の実測図は掲載されていない。41点の内、40点は埋文センターが保管している遺物である

ことが確認できたが、石錐1点は確認できなかった。遺物の保管が確認できた40点の中で1次調査分が11点、2次調査分が26点、調査次が不明なもの3点であった。文獻2では遺物の出土状況1点と遺物6点を写真で紹介しているが、遺物の実測図の掲載はない。6点の内、2点の土器は1次調査で出土したものである。文獻11では晩期土器の断面が多く掲載されているが、断面だけでは土器を特定することは困難であった。2次調査で出土した把手をもつ土器と3・5・6次調査で出土し、かつ接合した土器のみが特定できた。

以下、1次調査から3次調査の概要を記述する。一部、上記報告書から転載・修正したものもある。

第3節 1次調査の概要

1 調査期間と調査体制

1次調査は昭和43(1968)年10月10日から同年11月10日まで土・日曜日関係なく実施された。全期間調査を行ったのは河口のみで、調査期間中に同好者及び吹上高校生、加世田高校生の何らかの支援を受けた日が14日間ある。ひとりで調査を行った日の野帳には「10月18日 冷える 自ら一人」、「10月25日 自分のみ 時雨 アラレふる さむし」とあり、ひとりで調査を行った際の哀愁が行間に漂う。河口の記した野帳(以下、野帳という。)には「10月13日 史跡調査会例会のため休む」とあり、この日は調査を実施しなかったと考えられる。また、10月16日の日付の記録がないが、写真の写し込みに10月16日の日付があることから、この日は調査を行ったと考えられる。これらのことから調査は、実働は31日間であった。

2 調査範囲

調査は宅地造成のための削平予定地で、その時点で削平が及んでいない部分にa・b2本のトレンチを設定して進められた。aトレンチは東西に幅2m、長さ10mで設定し、2m毎に区画し、東からI～V区とした。bトレンチは南北に幅約1m、長さ9mで設定し、2m毎に区画し、北からI～IV区としたが、IV区の区画は3mとなった。トレンチの設定位置については、第1図に示した。1次調査時の地形図がないため、2次調査時に作成したトレンチ配置図に1次調査のトレンチも示した。a・b2本のトレンチは磁北に対するトレンチの長軸の

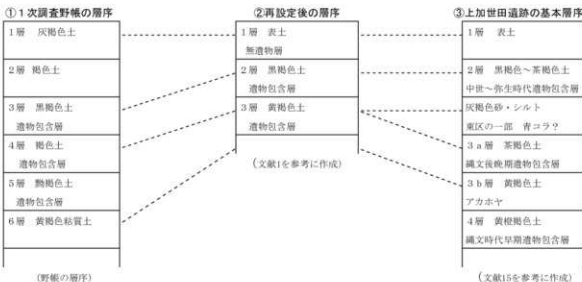
角度とトレンチ間の距離が野帳に記してあった。さらに、2次調査時に作成したトレンチ配置図に1次調査のaトレンチ北側の2つの角があったことから、これらを参考に今回作成した。ただ、bトレンチは掘削により斜面となった際に設定したことから、トレンチの幅は一定しなかったと考えられる。調査面積は31㎡であったと文献7で報告している。

3 層序

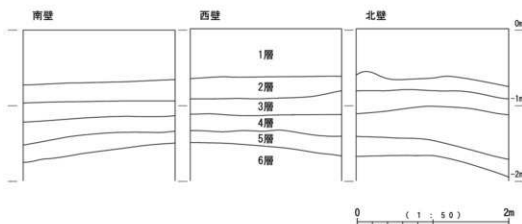
層序については、第2図に示した。①は1次調査の層序である。野帳の記述を拾い上げると3～5層が遺物包含層とあり、その中でも4層からの遺物出土が多い。②は2次調査後に1次調査と併せて成果を報告した文献1で層序を整理し、河口が再設定したものである。その中で「第2層の黒褐色土、第3層の黄褐色土」「第1層は無遺物層、第2層、第3層が遺物包含層」としている。ただ、1次調査の包含層である3～5層が2次調査後に整理した層序とどのように対応するかは記述は確認できなかったが、野帳の記録等から第2図の様に想定した。③は文献15に掲載されている上加世田遺跡の基本層序を修正し、参考までに掲載したものである。

第3図はaトレンチV区の土層断面図である。野帳に地表からの深さを記した略図があったことから参考資料として今回作成した。当時、トレンチの周辺は畑地で地表面はほぼ水平であるが、aトレンチの4層以下は西から東に向かって下る。また、北壁の土層断面では4層が東に向かって厚く堆積するのが特徴的である。各区とも5層までは調査を行っていることは野帳から確認できるが、トレンチの下面までの深さは不明である。

なお、bトレンチについては、土層断面に関する記録は残っていなかった。



第2図 1次調査の層序把握の推移



第3図 1次調査aトレンチV区土層断面略図

4 調査成果

埋文センターが保管する1次調査の資料には、野帳1冊と遺構実測図5枚がある。野帳は日付毎に調査の経過、支援者・来訪者等の氏名、検出した遺構や出土した遺物

第3表 1次調査野帳における遺構・遺物に関する記述

トレンチ	区	遺構・遺物に関する記述 (検出・出土層)
a	I	<ul style="list-style-type: none"> ・2ヶ所土器群 (4層) ・縦型石匙 (4層) ・中央に柱穴 (4層下部) ・中央にビット (5層)
	II	<ul style="list-style-type: none"> ・3層を略5～10cm掘る 見るべきものなし 小片のみ ・石礫半穴1 (3層) ・磨製・打製石斧 (4層) ・ビット (5層?) ・I・II区5層石匙 石斧 (完全) 磨製
	III	<ul style="list-style-type: none"> ・完形土器3個体 (4層) ・中央部に土器群 (4層?) ・中央南よりに浅鉢形完形らしきもの (4層) ・東南角にビット及び完全土器 (5層?) ・小竈集積地 (5層?) ・住居址 (5層下) ・直口の完全らしきもの床面よりやや浮いて出土 ・軽石ビット内 (6層)
	IV	<ul style="list-style-type: none"> ・径20cmの大石2個 (4層) ・南角に全形燵 (4層) ・北西にまとまった土器 (4層)
	V	<ul style="list-style-type: none"> ・ビット1基 (4層?) ・伊らしきもの (4層?)
b	IV	<ul style="list-style-type: none"> ・ビット2基 (層位不明)

* (検出・出土層?) は、野帳の記録から推定

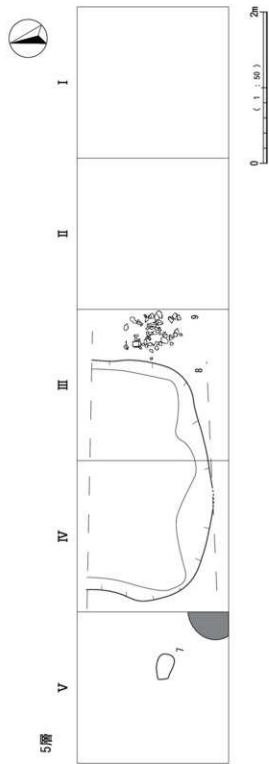
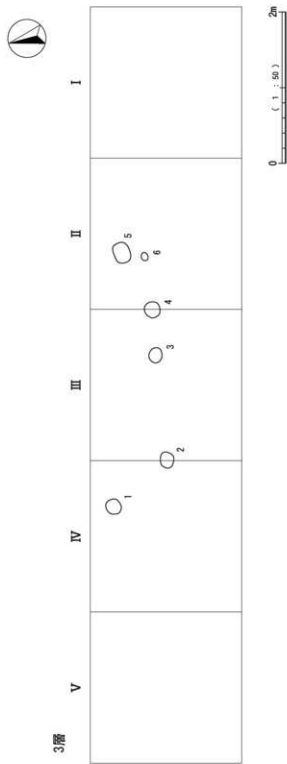
が覚え書き程度に記されている。遺構実測図の内訳は、ビット実測図3枚、集石実測図1枚、住居跡実測図1枚である。1次調査の成果は文献1及び2で報告されている。しかし、これは2次調査の成果と合わせたものであることから、1次調査の概要を掴むことは難しい。そこで、残された資料から可能な範囲で1次調査のみの成果をまとめた。

まずは、野帳から遺構・遺物に関する記述をまとめたものが、第3表である。原則として野帳に記されたとおりの表現で転記してある。aトレンチは各区の4・5層で遺構・遺物が確認され、特にIII区の記録量が多い。記されている遺構は、「住居址・小竈集積地・伊らしきもの・ビット」がある。また、「土器群・完形土器・完全土器・まとまった土器」などの表記が見られ、III区からはかなりの土器が出土したことが窺える。

一方bトレンチは調査初日にIV区の状況が記されたのみで、その後の記録は一切確認できない。遺構・遺物の確認がなかったと考えられる。ただ、野帳には未記入や記入漏れ、重複して記入された遺構・遺物もある可能性も考えられる。

保管するビット実測図3枚のうち、1枚は3層検出のビットが6基実測されている。これはトレースを行い、掲載した。同実測図中には、遺物の出土状況と考えられるものもあったが、出土状況写真との照合や遺物そのものが特定できなかったことから除外した。残りの2枚のビットの実測図は、ビットの検出位置を特定できず、推定できる様な資料もなかったことから掲載できなかった。住居跡と集石の実測図はトレースを行い、掲載した。

次にトレンチ毎の調査成果をまとめる。ただ、1次調査の成果を報告した文献1や残された資料には、遺構に関する断片的な記述はあるが、遺構の種類や基数をまとめたものはない。そこで、当時作成された図面に加え、



第4図 1次調査aトレンチ遺構配置図

野帳に残された略図や数値的な記述を基に可能な範囲で新たに作成した図も示すこととした。

a トレンチでは、3層からビット6基、5層から住居址（以下、住居跡）、集石、ビットを各1基、「炉らしきもの」を検出した。これらは、第4図に検出層毎に示した。

II区からIV区の3層で検出されたビット6基は、調査時に作成された実測図を基に作成した。ビットはII区からIV区にかけて弧状に検出されている。実測図中に「3層下部」と小さく注記があったことから判断した。ビットの断面に関する記録や資料は確認できなかった。

III・IV区から住居跡1基が検出され、第5図に示した。これについては実測図が残されており、位置も特定できた。住居跡は略東西方向に約300cm、略南北方向は検出できた部分が165cm、検出面からの深さ19cmを測る。この住居跡の北側部分は未掘で、全容は不明である。ただ、1次調査終了後、1か月半後に実施した2次調査のCトレンチは、1次調査aトレンチの北側に設定されている。住居跡が検出されたaトレンチIII・IV区付近は、2次調査Cトレンチと200cmも離れていない。2次調査Cトレンチの記録には住居跡の記述がないことから、この住居跡は2次調査Cトレンチまでは及ばないと考えると、住居跡の略南北方向は、ほぼ300cm程度、平面形状はほぼ隅丸方形と推察される。床面は西から東へ約20cm、南から北へ10cm程度下がる。やや東寄りの床面で、50×40cmの楕円形の範囲で灰と炭化物が集中する部分が検出された。隣接して数個の礫と灰の塊も確認されている。住居跡の埋土は、野帳の記録によると「紫褐色かたかく砂質」で、「黄褐色土層（やや粘質）」を掘り込んで構築されている。埋土の土層断面図等は確認できなかった。検出面は、野帳の記録から5層下面もしくは6層上面と考えられるが、5層として取り扱った。この住居跡の南西側に隣接してビットが1基検出されている。18×19cmのほぼ方形で、実測図に-12cmの注記があることから深さを示す数値であろうと考えられる。

住居跡内から出土した遺物については、その状況を第6図に示した。遺物は取り上げる際に番号を付していないことから、実測図と遺物出土状況を撮影した写真と比較して、土器の割れ口等を手掛かりに照合作業を行った。このことから、第6図も推測の域を出ないことは断っておく。住居跡内から出土した遺物のレベルについては、確認できなかった。

さらに、住居跡が検出される前の4層で完形土器3点が出土していることから、河口の記録をもとに出土状況の想定を第7図に示した。河口の記録やメモスケッチから作成したため、第7図上段の出土状況図は正確な実測図ではない。河口は、住居跡が検出されたaトレンチIII区・IV区の4層掘り下げ時に、1つの区をさらに4つに

分け、東側からそれぞれの区画にIII（IV）、4、I～III（IV）、4、IVの番号をつけている。この区画は5層の住居跡検出後も使用しているが、住居跡の実測図や記録写真などから上段の出土状況図の区画名が正しく、下段の河口の記録では区名及び4つの区画名が誤っている可能性が高いと判断した。河口のメモによると、a・b・c3つの完形土器が出土しており、「完形土器はビットの縁より内部へ向けて位置していたことになる」と記述している（第7図下段）。b、cの可能性が高い土器は注記とメモスケッチの形から特定できたが、aの土器は確認できなかった。正確な遺物のレベルが不明なため推測の域を出ないが、住居跡の本래の掘り込み面が5層より上層にあり、3点の完形土器が住居跡埋土内の遺物であった可能性が考えられる。

また、III区から「小礫集積地1基」が検出されているが、写真等からいわずに集石遺構と考えられる。80×65cmの範囲で検出された。ただ、実測図は第一面のみの実測で、下部の実測は行わなかった可能性が写真の記録から窺える。検出位置は不明確であったが、住居跡に隣接していることから、写真記録をもとに検出位置を推察して図を作成した。検出面は、住居跡と同じく5層下面もしくは6層上面と考えられる。

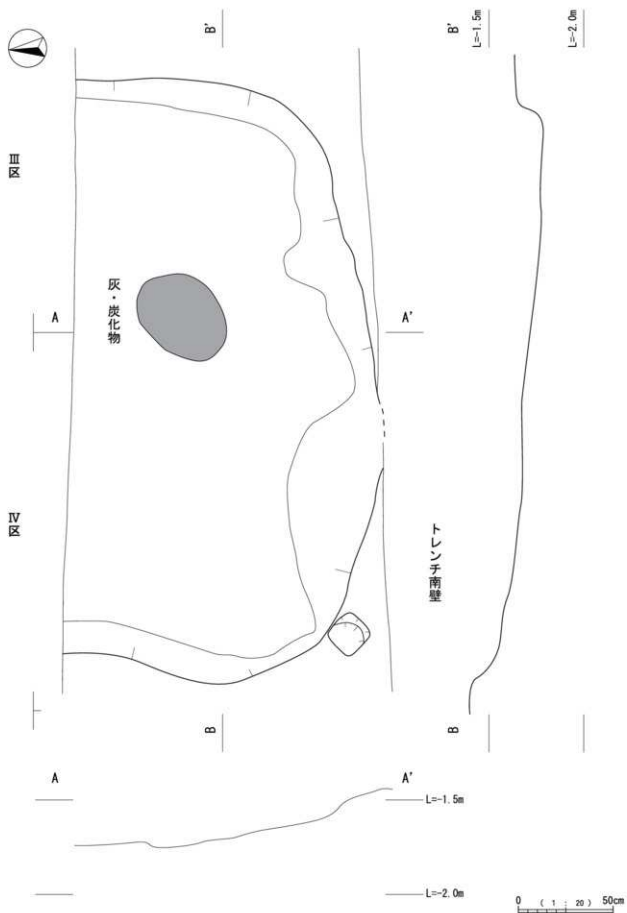
V区からビット1基を確認した。実測図はなかったが、野帳に検出区内の位置を示す数値と略図等があったことから、それらを基に第4図に図示した。また、検出層について、ビットを検出した前日は4層の掘り下げをほぼ終了しているという野帳の記述から、5層検出とした。

V区の南東隅に網掛けで示してある箇所は、野帳に「炉らしきもの」の中で灰の広がりを示している。ただ、この遺構はIV区まで広がるかと考えられるが、これに関する記述や記録はなかった。

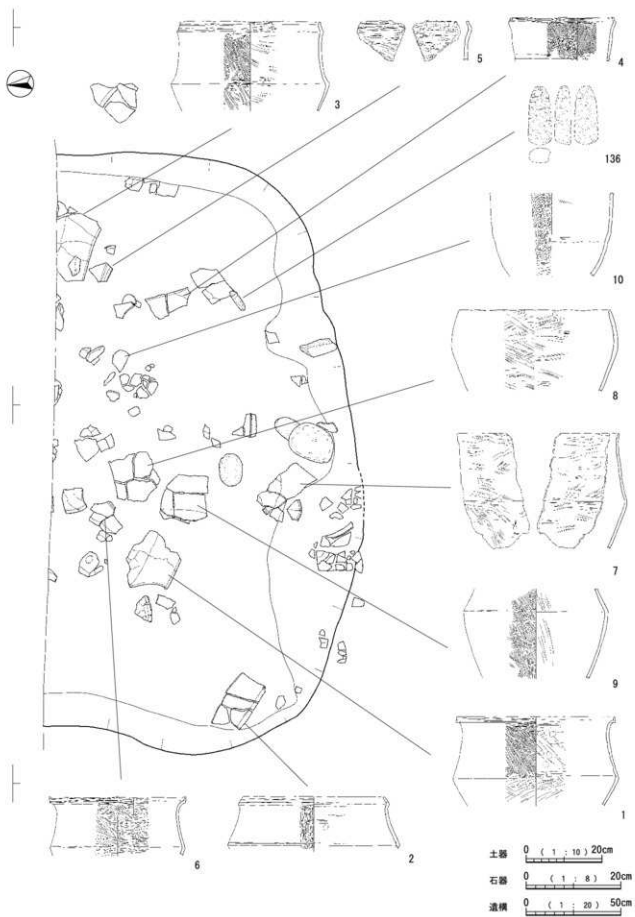
次にbトレンチについて述べるが、前述のとおりbトレンチに関する資料はほとんど残されていない。bトレンチのIV区からもビットが検出され実測されているが、検出位置や層位の情報がなく、掲載できなかった。文献5には1次調査のbトレンチについて「包含層が浅く、

第4表 1次調査aトレンチ遺構等一覧表

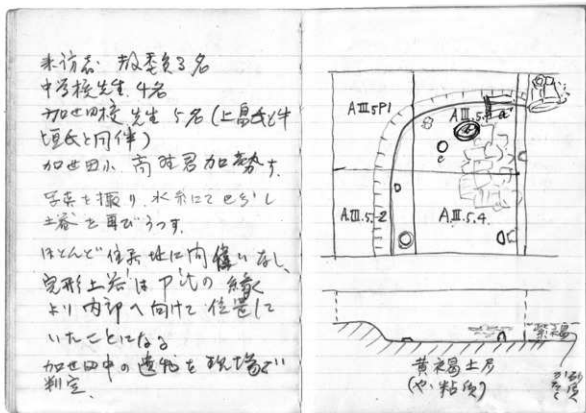
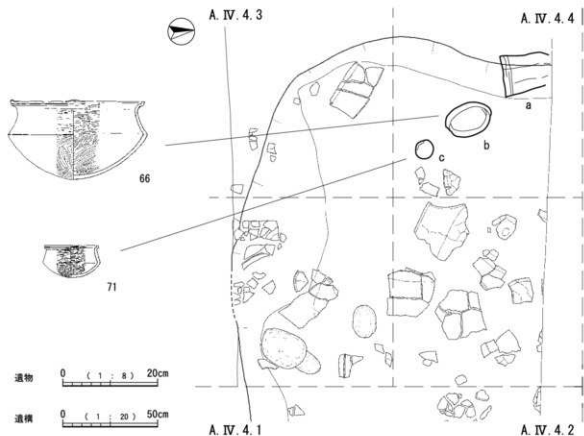
遺構番号	種類	検出層	検出層	大きさ (cm)	深さ (cm)	形状
1	ビット	IV	3層	20×18	10	円形
2	〃	III・IV	〃	22×20	23	円形
3	〃	III	〃	22×19	22	円形
4	〃	II・III	〃	23×22	25	円形
5	〃	II	〃	28×22	20	楕円形
6	〃	II	〃	12×10	20	円形
7	〃	V	5層	35×25	35	不定形
8	竈穴住居跡	III・IV	〃	300×(165)	19	方形
9	集石遺構	III	〃	80×65	—	—



第5図 1次調査a トレンチ住居跡

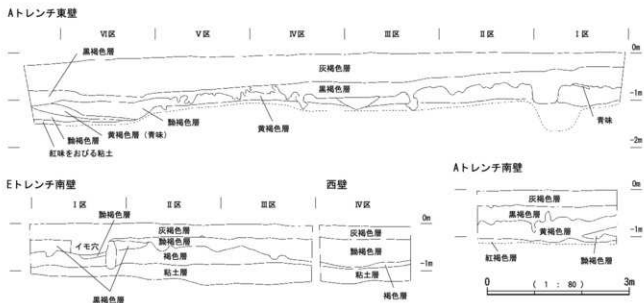


第6図 1次調査 住居跡遺物出土状況図



※ 区画名 (ローマ数字)・小区画名 (4番目の数字) は、他記録との照合から上段出土状況図が正しいと判断した。

第7図 1次調査 住居跡上層遺物出土状況図及び河ロメモ



第10図 2次調査トレンチ土層断面図2

で述べる予定である。また、Cトレンチの土層断面図には、土層断面で確認した遺物も記入してあったことから、種類毎に記号で示した。これを見ると基本層序の第2層と第3層が遺物包含層で、第3層に出土量が多いことが観察できる。さらに、土層断面図中や調査日誌の中にもCトレンチでは灰化物が多く出土しているという特徴もある。前述のとおり、遺物包含層は第2層と第3層となる。ただし、調査日誌の記録からは、調査開始当初、第2層からは青磁・弥生土器や一部調査晩期と考えられる土器が出土したことから、調査者の多くが攪乱層と考えていたことが調査日誌からうかがえる。その後、1次・2次調査をまとめて報告した文献1では、「第1層は無遺物層、第2層、第3層が遺物包含層となっている。」とした。

4 調査成果

埋文センターが保管する2次調査の資料は、遺物・写真の他に調査日誌・野帳・実測図がある。調査日誌は5人の調査員がそれぞれ担当した区域について調査内容を記したものである。5人の調査員の内、調査期間の全ての参加が3人、年末までの参加が2人であった。野帳は1冊あり、実測図は7枚で、内訳はトレンチの土層断面図5枚、トレンチ配置図1枚、1次調査aトレンチと2次調査Cトレンチの遺物出土状況図1枚である。5枚の土層断面図については前項で示したとおりである。トレンチ位置図は、周辺地形とトレンチ位置を調査時に実測したもので、第1図として示した。1次調査aトレンチと2次調査Cトレンチの遺物出土状況図は、1次調査と2次調査を比較するために後日作成されたものと考えら

れるが、示してある出土地点の遺物は特定できなかった。このほかに、遺構や遺物出土状況に関する図面等は確認できなかった。

まず、調査成果の概要を理解するために調査日誌の記述をまとめた。具体的には調査日誌に記録されている検出遺構や出土遺物に関して、トレンチ毎に転記したのは第5表である。表中の空欄は、調査日誌に該当する記録がなかったことを表す。当時、出土遺物については個々に番号を付して取り上げていないことから、調査日誌に記録してある遺物との照合は極めて困難である。さらに、土器については「晩期土器」「弥生土器」と表記するが、前後の時期を含む可能性もある。第5表を見ると、Cトレンチの遺構・遺物の多さが目を引く。反対にAトレンチ、Bトレンチ、Eトレンチでは、記載数が少ない。

また、前述のとおり、2次調査時に作成した遺構検出状況や遺物出土状況に関して示せる図面等はない。そこで、当時の調査成果をイメージしやすいように調査日誌や野帳等を参考に遺構の検出状況図や遺物の出土状況図を新たに作成した。作成する際、調査日誌・野帳に記された遺構・遺物に関する略図や記録で、その位置がほぼ特定できたり、形状に関する数値的な情報や層位的な記録が残されたりしたものに限定した。ただ、略図をもとに作成した図であることには変わりない。次に各トレンチ毎に調査概要をまとめる。

Aトレンチは12月25日に掘り下げを開始するが、出土する遺物量が少なく、調査は実質2日間で終了している。IV区3層からは、配石状の石組みと粘土・砂が流入した部分を確認した。これを第11図「Aトレンチ3層検出遺構」に示した。これは、調査日誌の略図を基に今

回作成したものである。配石状の石組はⅥ区北端、酸化鉄を多く包含するような圓い壁の上で検出されている。調査区の境のため一部分の検出ではあるが、4個の礫が並ぶ、略図の情報しかないため、礫の形状等は不明である。配石状の石組み内に青磁が出土していることから、調査者は時を平安時代末から鎌倉時代初めとしている。

次に、粘土・砂が流入した部分がⅤ～Ⅵ区にかけて、幅160～170cmで東西方向に検出された。土層断面図のⅥ区、3層目が溝状に落ち込んでいる箇所との関係が考えられる。埋土と考えられる層からは、弥生土器片、須恵器片、黒曜石片が出土している。また、BトレンチⅢ・Ⅳ区北側で検出された落ち込みとも連続する可能性を調査者は調査日誌に記している。2層は晩期土器・弥生土器・須恵器・青磁等や石斧・石鏃等の石器が出土している。各時期の遺物が出土していることから攪乱もしくは一部攪乱と調査者は見ていたようである。3層からの遺物出土は少ない。

Bトレンチの調査もAトレンチと同様に12月25日の着手である。調査日誌には翌日以降、調査に関する記載はなく、12月29日にトレンチを埋め戻している。調査は、短期間で終了した模様である。前述のとおり、Ⅲ・Ⅳ区の北側で落ち込みを確認している。検出層に関する記述は残されていないが、調査日誌の前後の記述から3層と考えられる。全体的に遺物の出土量も少なく、2層からは晩期土器、土師器、須恵器、磁器、葎石等が出土していることから、調査者は攪乱と見ていた。3層出土の遺物に関する記述は全くない。

Cトレンチは、2次調査の中で最も遺構・遺物量が多い。12月27日にトレンチを設定し、翌年1月5日まで調査を行っていることからわかる。2層から検出された遺構にピット5基と灰塊1か所があり、第11図「Cトレンチ2層(赤土層上)検出遺構」として掲載した。ピットはⅡ～Ⅴ区にかけて検出されているが、検出面について調査日誌では「2層下(赤土層上)」となっている。赤土層とは3層のことで、ピットは2層と3層の境目付近で検出したと考えられる。このことから遺構配置図では紙面の関係で3層検出の遺構と一緒に示してある。ピットの形状・断面については記録が残らない。

灰塊については、Ⅳ区南側壁の直下で検出された。調査日誌には「・・・南の壁の中に入りこんで一括の土器がある。この土器の中やまわりは灰塊が木炭をふくんで多数に附着している。一見炉跡の様に見えるが、炉跡のような遺構は見られない。幅広く広がっている。」とある。炉跡のような遺構は確認されなかったが、何らかの遺構である可能性は考えられる。この区も略図から作成したものである。

Cトレンチの2層からは弥生土器も出土するが、ほとんどは晩期土器である。3層は晩期土器が主体となるよ

うである。さらに、2・3層から石器も多く出土し、管玉や軽石加工品、岩偶等の遺物が目を引く。また、3層では炭化物(木炭・木炭粉・炭化物と記載)が多く、ほぼトレンチ全体に炭化物が広がっていた状況と考えられる。

Dトレンチの調査は12月27日に開始し、29日に終了している。遺構は、3層検出の柱3基だけである。1基は径16cm、深さ20cm位、もう1基は径18cm位、深さ20cm位との記録があった。調査日誌に残された略図を基に作成したものを、第11図「Dトレンチ3層検出遺構」として掲載した。2層からは弥生土器、晩期土器が主に出土しているが、調査日誌への記載は弥生土器が多い印象がある。3層からは一部弥生土器も含むが、晩期土器が出土している。Ⅵ～Ⅷ区にかけて遺物の出土はない。

Eトレンチは12月28日に調査を開始し、翌29日は埋め戻している。遺構としては、3層から6基のピットと「酸化鉄が集まった状態」が検出された。これらを第11図「Eトレンチ3層検出遺構」に示した。6基のピットのうち1基は形状等は不明である。残りの5基は調査日誌に平面・断面の形状と計測値が残っていたため復元した。「酸化鉄が集まった状態」については、調査日誌に略図があったが、これ以上の注記はなかった。

次に、遺物の出土状況の復元を試みた。遺物の出土地点を記した図はないことから、調査日誌の略図をもとに出土地点と遺物を照合する作業を進めた。その結果、第12図・第13図の遺物出土状況図を今回作成した。

第12図上段は、CトレンチⅠ・Ⅴ・Ⅵ区2層から出土した遺物の出土状況図である。遺物とその出土位置を確認できたのは4点であった。図中にあるⅠ区出土の管玉とⅤ区出土の石筴の出土状況を記録した写真は確認できなかった。3層中及び下面での遺構は検出されていない。出土した土器はほぼ晩期土器のみで、土偶・岩偶・管玉・猪首牙等も出土している。第12図下段は、CトレンチⅢ区の3層で出土した遺物の出土状況図である。文献2で「Ⅲ区に出土した石器類は特筆の要がある。この区を中心からやや西よりに軽石製岩偶がうつぶせの状態でも出土し、その周辺に円盤状の石器、岩版、土偶片、石斧などが1メートルの石筴の範囲に出土している。」と記述した出土状況と考えられる。出土地点については、調査日誌にあった略図を基に作成してある。

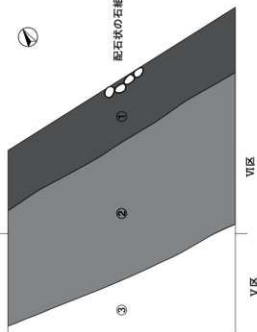
第13図はCトレンチⅡ～Ⅳ区の3層で出土した土器集中の出土状況図である。出土地点が調査日誌等からほぼ特定できるものだけ掲載した。出土状況略図は調査日誌から転記したが、縮尺は不同である。土器集中②・⑤・⑥については、大まかな出土地点と出土状況写真と出土土器が特定できた。

2次調査の成果を記した文献2の「3 調査の概要」で「Ⅱ区の南よりと、Ⅳ区中央よりやや北よりの地点に

第5表 2次調査日誌の記述一覧

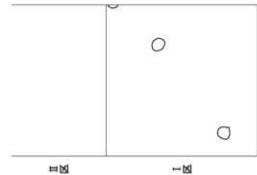
トレンチ	区	1層	2層	3層	4層
A	I		遺物：晩期土器 打製石斧 石鏃 (IもしくはII区)		
	II				
	III	遺物が混在 晩期土器	遺物：晩期土器 青磁 磨製石斧 黒曜石剥片	遺物：頁岩質の石刃破片 (2層との境)	
	IV	弥生土器 土師器 青磁	遺物：土師器 青磁 晩期土器	遺物：土師器 (2層からの落ち込み)	
	V	弥生土器 須恵器 青白磁が混在	遺物：須恵器	遺物ほとんどなし	
	VI		遺物：晩期土器 弥生土器 磁器	遺構：配石状の石組み 粘土・砂質の広がり	
B	I				
	II				
	III		遺物：青磁 白磁 瓦器等		
	IV			遺構：落ち込み	
	V				
	VI	縄文土器 剥片	遺物：蓋状の薄い石		
C	VI	加工した小剥片	遺物：晩期土器 土師器 須恵器 磁器 敲き石等		
	I		遺構：ビット1基 遺物：晩期土器 石斧 石鏃 石皿片 黒曜石剥片 有柄石鏃状の石器	遺物：晩期土器 完形土器 多量の石器 石斧 石鏃 石皿片 石鏃 管玉 木炭粉	
	II		遺構：ビット1基 (2層下) 遺物：多くの遺物 軽石製刻みのある岩 岩偶 黒曜石剥片 磨製石斧 ビック 状の石器	遺物：浅鉢と深鉢が重なり出土 (南壁下) 石鏃 散骨片 炭化物多い 深く掘っても土器出土 下では土器少なくなる	
	III		遺構：ビット2基 (2層下) 遺物：多くの遺物 晩期土器 石鏃 灸 痕の壁 使用痕のある黒曜石剥片 岩偶 軽石製刻みのある岩版 軽石 製線剣	遺物：III区域の南壁下に一括土器 完形土器 石斧 石鏃 石皿 円盤状石器 土偶 軽石製岩偶 黒曜石製刃器 猪歯牙 木炭 打製石器	遺物出土ほと んどなし
	IV		遺構：ビット1基 (2層下) 南西断面下。土器の盛りや中に木 炭を含んだ灰塊が付着、炉址等確 認できず 遺物：層厚く、遺物多い 弥生土器 晩期土器 下層部は土器の破片大きく、数多い 石斧 石鏃 軽石製岩偶	遺物：土器多い 南壁面に完形土器 木炭粉 中央部に伏せたような浅鉢の完全 土器が下に土器をおしつづいた様 に出土 (浅鉢の下から石鏃、木炭、 骨)	
	V		遺構：ビット1基 (2層下) 遺物：弥生土器 晩期土器 石斧片 局部打製の斧状石器	遺物：晩期土器 木炭粉	
D	VI		遺物：遺物多い 晩期土器 石斧 攪棒状の打製石斧状石器 頁岩製 石匙 軽石加工品 硬玉製管玉	遺物：晩期土器 完形に近い深鉢3箇所 口縁部に未塗りの浅鉢 木炭粉	
	VII		遺物：晩期土器 磨製石斧 打製石斧	遺物：少ない 磨製の刃物をもつもの	
	VIII		遺物：晩期土器	遺物：少ない	
	I		遺物：弥生土器 晩期土器	遺構：柱穴3基 (周辺に大きな土器片) 遺物：晩期土器	
	II		遺物：弥生土器片 晩期土器片	遺物：晩期土器 黒曜石	
	III		遺物：弥生土器片 敲き石片	遺物：弥生土器片 晩期土器	
E	IV		遺物：弥生土器片 晩期土器片 独のかかったもの		
	V		遺物：磁器片 弥生土器	遺物：上部に弥生土器、その下に黒色研 磨土器片	
	VI		遺物：弥生土器		
	VII		遺物：弥生土器		
	VIII		遺物：破片		
	I	磁器 弥生土器	遺物：弥生土器 晩期土器 鉄片	遺構：ビット1基 遺物：小片 遺構：ビット4基 遺物：小片 遺物：小片	

Aトレンチ3層検出遺構

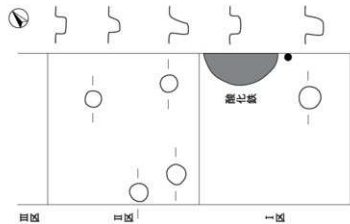


- ① 酸化鉄を多く含むような面い壁
- ② 粘土・砂が混入した部分
- ③ 粘土層

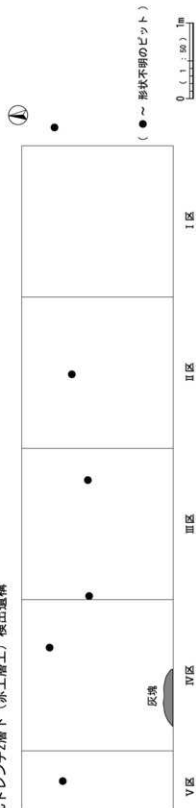
Dトレンチ3層検出遺構

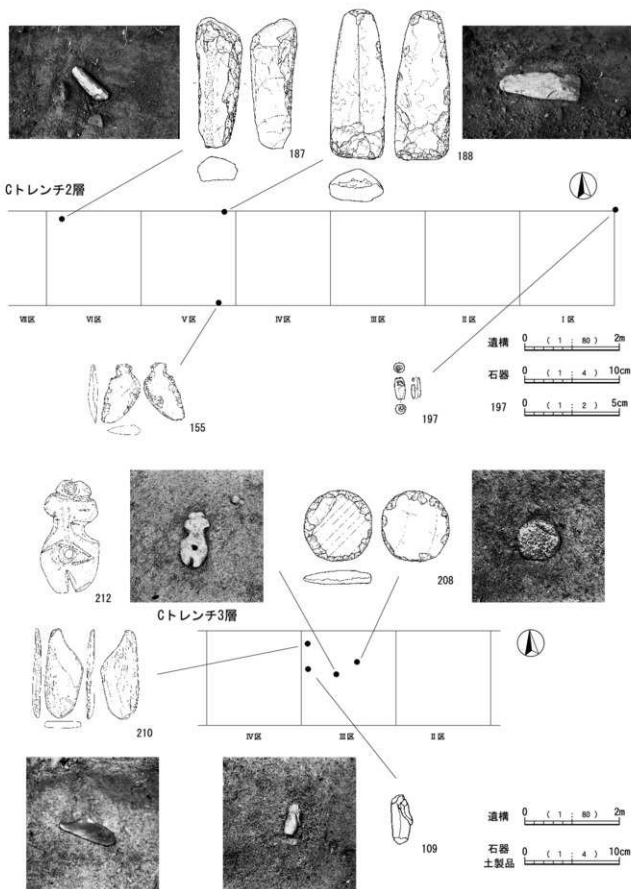


Eトレンチ3層検出遺構

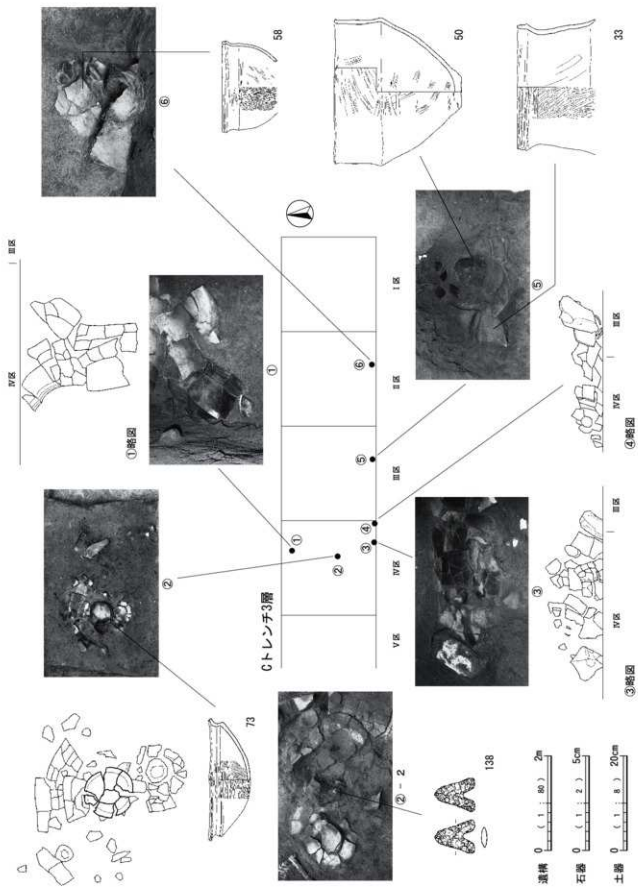


Cトレンチ2層下(赤土層上)検出遺構





第12図 Cトレンチ2層遺物出土状況図(上)、3層遺物出土状況図1(下)



第13図 Cトレンチ3層遺物出土状況図2

襷型土器に浅鉢をかぶせた状態で出土したのが特に注意をひいた。IV区の場合は蓋をのぞくと、その下から石鏝と骨片(獣骨?)が出土している。」とあるが、II区のものも土器集中⑥でIV区のものも土器集中②である。土器集中⑥については調査日誌に「土器は口縁部を南壁下に突込むようにして底部を上浅鉢型の土器があり、その下に深鉢型の様な土器が押しつぶされてあった。底部は附近に3個体分あり。上の浅鉢土器は口縁部には小さい山形突起があった。中の胴体をつき破って下の土器がそこから一部出ていた。3個体位にまとまりそうであるが、非常にもろい。深さ地上より凡そ2m 30cm位～2m 50cm位までの間である。」とある。

また、土器集中②-2の写真と実測図は、かぶせた状態の浅鉢を取り上げた後に確認した石鏝である。石鏝と同時に出土したと記録のある骨については確認できなかった。

2次調査で注目される遺物の中に双口土器と獣形勾玉がある。これについては1・2次調査をまとめた文献1で報告しているが、出土地点には言及していない。2次調査の概要をまとめた文献2では双口土器の写真が掲載されているが、説明等はない。文献11では3次調査出土の土器を中心に縄文晩期の土器文化について述べるが、その中で双口土器と獣形勾玉は「共伴」としている。また、河口は昭和44年1月15日付けの南日本新聞に「上加世田の縄文遺跡」を寄稿し、双口土器について「宅地造成中に遺跡の一部から出土した」としている。しかし、埋文センターが保管する2次調査の資料の中に双口土器と獣形勾玉の出土状況を示す記録・写真・図面等が一切ないことから、改めて調査日誌等を確認した。その結果は、次のとおりである。

まずは、河口の調査日誌を転記する。

12. 6	「河野先生はエイ町郷土史編集委員会之婦路枕崎より、上加世田遺跡にて牛山好治君が12月20日ブルドーザー掘削中の出土遺物を採集してきた土器片・石器を借用してきた。」
44. 1. 6	「枕崎に行き牛山好治君をたづね 借用の遺物のゆづりうける。」

12月20日に採集した遺物について12月6日に記録できないことから、日誌の「12. 6」は43年12月26日の誤りではないかと考えられる。

調査日誌からは、牛山好治氏が土器片・石器を採集し、それを借用後、譲り受けたことが記述してある。土器片・石器を採集した牛山氏も当時のことを記憶しており、

・近くの東側の台地を散策していると、少ししか残っ

ていない崖の土砂の掘り取り工事中で気になるものを発見。

・業者に重機で土砂を落としてもらおうと、遺物が転がってきた。すぐに河口先生に連絡し預けた。調査の結果、このヒスイ製勾玉・双口土器と知った。

と回顧している。以上のことから、双口土器と獣形勾玉は上加世田遺跡出土の遺物ではあるが、その出土地点や層位は不明であり、共伴関係も可能性はあっても、それを明確に示す資料はないという状況である。

第5節 3次調査の概要

1 調査期間と調査体制

3次調査は昭和44(1969)年8月11日から同年8月18日まで実施され、お盆を挟んでの実働8日であった。調査は河口の他に同好者2名、別府大学生4名、吹上高校社会研究部員その他の協力を得て行われた。調査期間中、36人が何らかの形で調査に参加し、延べ人数は150人を数える。河口はこの調査を「自主発掘」と位置づけている(文献11)が、調査を実施するまでにどのような経緯があったかについては、不明である。

この調査は真夏の発掘調査で、かなり暑かったようである。河口の調査日誌に「氷80円を10時 3時にとどけるよう依頼」、「かき氷100円」、「氷遅れて配達 ヤクルトをトレンチ内にもち込んでのませる」、「3時 氷80円、アイス150円」等の記述が残る。

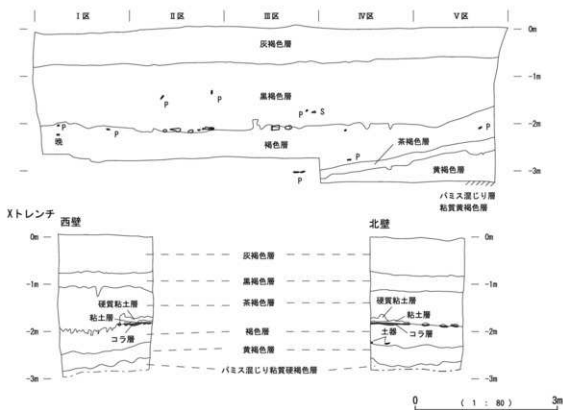
2 調査範囲

調査は、FトレンチとXトレンチの2本を設定して進められた。Fトレンチは2次調査のCトレンチの北側に

Fトレンチ	Xトレンチ
1層 灰褐色層	1層 灰褐色層
2層 遺物包含層 黒褐色層	2層 黒褐色層
コラ層	3層
3層 遺物包含層 褐色層	茶褐色層
4層	コラ層
茶褐色層	4層 褐色層
5層 黄褐色層	5層 黄褐色層
6層 粘質黄褐色層 (バミス混じり)	6層 粘質黄褐色層 (バミス混じり)

第14図 3次調査の層序(図面より作成)

Fトレンチ南壁



第15図 3次調査土層断面図

第6表 3次調査日誌の記述一覧

トレンチ	区	II層	III層	区不明
F	I	遺構：2層より3層へ入り込んだビット 遺物：晩期土器 石鏝3（ハート形） 打製石斧1 磨製石斧片1 硬玉原石1	遺構：3層面につくられたビット 遺物：土器群3 さじ状の特殊土器（南東角土器群の中） 打製石斧1	遺物：石刃 （層位不明、FトレンチI区とXトレンチで出土し接合） たたき石・獣骨 （トレンチ・区・層位不明）
	II	遺物：土師器 弥生土器（中期） 晩期土器 打製石斧4 石鏝7	遺物：軽石加工品	
	III	遺物：石鏝2 打製石斧2 垂飾品1 管玉1	遺物：石鏝1 打製石斧1 軽石製品1 白玉1	
	IV	遺物：弥生土器 晩期土器 黒曜石片数点 硬玉勾玉1 岩偶1 骨製品1	遺物：石鏝未製品1 磨製石斧1 石匙半欠1 軽石加工品1 石英加工品1 石鏝1	
	V	遺物：上部から須恵器片 弥生後期土器（成川）片 弥生土器片 晩期土器 石鏝4 磨製石斧1 打製石斧2 黒曜石片数点 硬玉勾玉1 骨1	遺物：土器群2 石鏝1 打製石斧4 石匙1 石鏝1	
X	I	遺物：上部に陶片 磨製石器（異形） 硬玉製管玉1	遺物：一括土器 石鏝2	

1 mの距離をおき、平行に設定した。東端を揃え、東から西に向かってI～V区とした。幅2 m、長さ10 mの大きさであった。Xトレンチは、FトレンチI区から5 mの位置に2 m×2 mの大きさに設定した。このトレンチは5・6次調査の範囲と重なることとなる。両トレンチとも後に行われた調査の際に作成した調査範囲図等に記載があったことから、これを基にトレンチ位置図を作成し、第1図を示した。調査面積は、文献7によると24 m²であった。

3 層序

保管している資料の中にFトレンチとXトレンチの土層断面図が残っていたことから、両トレンチを対比するために第14図を、そしてそれぞれの土層断面図を第15図に示す。

この調査において、初めてコラ層の存在を確認して、土層断面図に反映させている。ただ、FトレンチとXトレンチの分層に違いがあるが、コラ層と5層の黄褐色層を手掛かりに対応すると考えられる地層を破線で示した。出土遺物は両トレンチとも2層及び3層で取り上げた記録が残り、Xトレンチの分層と銜合が生じる。コラ層を手掛かりとすれば、Xトレンチの2層及び3層がFトレンチの2層で、Xトレンチの4層がFトレンチの3層と読み替えることも可能と考える。

また、文献11に3次調査の地層について、「1～5層の5層あり、2層～5層が遺物包含層である。2層・3層に遺物が多く…」との記述がある。ただ、河口の調査日誌の8月17日には「FV（FトレンチV区）第4層は遺物が出なくなったので、南壁面を深掘りする。（黄褐色層）遺物なし。」とある。さらに、河口及び調査員が記した調査日誌には4層・5層から遺物が出土した記録はない。「2層～5層が遺物包含層」は、「2層・3層が包含層」の誤りと考えられる。

4 調査成果

3次調査の資料として埋文センターが保管しているものは、調査日誌・実測図・現場写真、そして土器や石器等の遺物である。調査日誌は河口が記したノートが2冊、5人の調査員が方眼紙に日々記録したものが残る。実測図はトレンチの土層断面図が2枚、ピットの実測図1枚である。写真については、フィルム1本分が残る。調査日誌の記録でもっと撮影したと考えられるが、これ以上は確認できなかった。

河口は文献11で3次調査で出土した土器を整理して縄文時代晩期の文化について述べている。しかし、3次調査の成果については、前項の層位に関すること、遺物は上加世田式土器を主体とすること、土師器・須恵器・成川様式・弥生式土器が僅かに出土すること、石器・岩

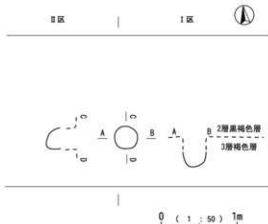
偶・ヒスイ玉等が出土すること等を数行程度述べているだけである。河口が調査責任者として執筆した4～6次調査の報告書でもほとんど触られていない。

そこで、3次調査の成果を垣間見るために、河口の記した調査日誌を中心に遺構・遺物に関する記述を拾い上げたものが第6表である。5人の調査員の内、1人は日々の調査の全体的な事項を記し、残りの4人は大学生で日々の調査を記録している。しかし、遺物の出土区・層位が記録されていないことも多く、表への記載数が少なくなっている。

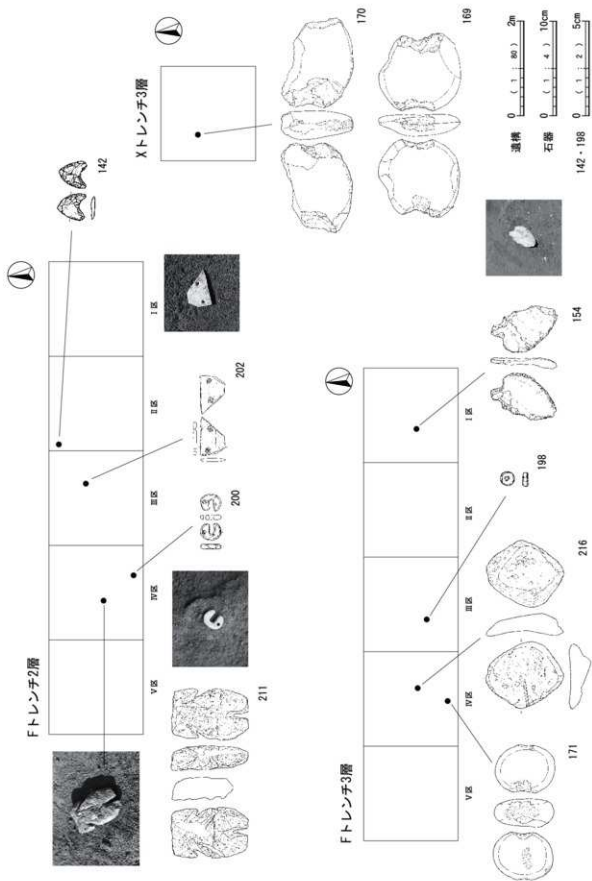
遺構は2層及び3層でピットが1基ずつ検出されている。遺物は2層・3層で出土している。全体的には石器の出土が多い印象を受ける。1人の調査員の日誌には出土区や層位は不明だが、日誌に記された石鏡の点数を合計すると30本程度となる。第6表からも石斧が15点ほど確認できる。さらに、管玉・勾玉、垂飾品も目を引く。

遺構については前述のとおり2基検出されているが、実測図が残るのは3層検出のピット1基のみである。これは第16図に示したが、写真は確認できなかった。径約30 cm、平面形はほぼ円形である。3層中で検出され、深さは20 cmであるが、断面図には破線で記された部分がある。推測であるが、本来の掘り込み面は3層上面で、深さは40 cmと考えられる。

遺物については取り番号を付していないこと、個々の遺物の出土点に関する記録が極めて少ないことから、出土状況を示す図を作成できなかった。Fトレンチ2層出土の特徴的な遺物4点は、調査日誌に位置を示す数値があったことから出土状況図を作成できた。同じくFトレンチ3層とXトレンチ3層出土遺物の出土状況図を作成し、第17図に示した。



第16図 3次調査Fトレンチ検出遺構



第17図 3次調査遺物出土状況図

第三章 1～3次調査の遺物

第1節 土器

1～3次調査の土器について、河口が過去に報告したものは『加世田』3号、『鹿兒島考古』24号、『上加世田遺跡発掘調査概報 1971年第4次』に掲載されている8点のみであった。この報告分の土器に加えて未報告の遺物を抽出し、実測して掲載する。

4～6次調査の遺物はその大半が南さつま市教育委員会で保管されている(第II章参照)。埋文センター保管の遺物の内訳は、1～3次調査出土のものがおおよそ9割を占める。資料選別段階で調査年次不明の土器が確認できたが、上記の理由から1～3次調査出土のものである可能性が高い。また、良好な土器資料をできるだけ多く報告するという目的で、残存状況が良好な調査年次不明の土器についても今回まとめて掲載する。加えて、1～3次調査で出土した土器片と4～6次調査で出土した土器片が接合している例も確認できたので、それらの土器についても今回掲載する。

1 縄文時代

上加世田遺跡出土の土器は、縄文時代後期末から晩期初頭にかけてのものが大半を占める。ここでは、器種毎に器形や文様等をもとに分類した。また、遺構内遺物の出土状況図が残っている遺構は1次調査の住居跡のみであった。以下、遺構内出土土器と包含層出土土器に分けて詳述していく。

(1) 遺構内出土土器

1次調査で検出された住居跡から出土した土器のうち、照合がとれた深鉢10点を実測して掲載する。出土状況は第6図の出土状況図を参照いただきたい。土器分類は次項の「包含層出土土器」で詳述する。

① 深鉢A1類

第18図1は「く」字状に張る胴部最大径から内傾しつつ立ち上がり、口縁部直下で屈曲して張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には2条の沈線が巡り、胴部最大径直上には浅い沈線が巡る。外面はミガキ及び粗いナデ、内面はナデにより器面調整される。2は「く」字状に張る胴部最大径から内湾して立ち上がり、口縁部直下で屈曲して張り出したのち強く内反して口縁部に至る。口縁部文様帯には2条の沈線、胴部最大径直上には1条の沈線を巡らす。外面はミガキ、内面はナデにより器面調整される。3は「く」字状に張る胴部最大径から直行して立ち上がり、口縁部直下でわずかに張り出したのち内湾して口縁部に至る。口縁部文様帯には2

条の沈線を巡らす。外面はミガキ、内面はナデにより器面調整される。4は胴部からわずかに外傾しつつ立ち上がったのち、強く内湾して口縁部に至る。口縁部には山形突起をもち、口縁部文様帯には突起に沿う沈線が1条、その下に1条の沈線を巡らす。胴部がわずかに張り、直上に細い沈線を巡らせるほかナデにより部分的に器壁を薄くしている。内外面ともにミガキ及びナデにより器面調整され、精緻な作りである。5は胴部から直行して立ち上がり、内湾して口縁部に至る。口縁部文様帯には凹線を2条巡らす。内外面ともにナデにより器面調整される。6は胴部最大径から内傾しつつ立ち上がり、口縁部直下で屈曲して張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部には山形突起をもつが、突起の数が2か所か4か所かは不明である。口縁部文様帯には2条の沈線を巡らせ、山形突起下には凹点がわずかに残存する。胴部最大径直上の一部には1条の沈線を施す。内外面ともにミガキにより器面調整され、外面の胴部最大径付近に煤痕が残存する。

② 深鉢B1類

第19図7は「く」字状に屈曲する胴部最大径から内傾しつつ立ち上がり、やや外反して口縁部へ至る。器壁が薄く、胴部から口縁部まで均一の厚さに仕上げている。外面上半はナデ、外面下半はケズリ及びナデ、内面はナデにより器面調整され、胴部最大径付近に煤痕が残存する。

③ 深鉢C類

第19図8は胴部が丸みを帯びつつ立ち上がり、口縁部が内湾する砲弾形を呈し、内外面ともに粗いナデ及びケズリにより器面調整される。

④ 詳細不明深鉢

口縁部が残存せず、分類が難しい土器片が2点出土した。9は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径へ至り、「く」字状に屈曲したのち胴部上半に向けて内傾して立ち上がる。外面はナデ後ミガキ、内面はナデにより器面調整される。10は丸みを帯びた胴部で、外面はミガキ及びナデ、内面はナデにより器面調整される。内面下部にコゲ痕が残存する。

(2) 包含層出土土器

1～3次調査では検出遺構及び記録類が少ないため、1次調査の住居跡を除けば遺構内出土と断定できる遺物はほぼない。ほとんどの土器が包含層出土であると考えられる。以下、器種毎に土器を分類し、詳述していく。

① 深鉢 (第20図～第31図)

器高が口径より大きいか同程度のもの、またはそれ相当と考えられる土器片を深鉢とした。有文のものをA類、無文のものをB類とし、以下のように分類した。A類は基本的に口縁部文様帯に沈線をも2～3条巡らせる。B類には口縁部に文様帯のような区画を持つものと持たないものがある。

A 1類

口縁部が強く内湾し、胴部が「く」字状に強く張る。口縁部文様帯は狭く、丁寧な沈線が施される。口径より胴部最大径が大きいものが多い。胴部最大径直上に段もしくは沈線を巡らせるものもある。胴部最大径から胴部上半にかけて屈曲しながら立ち上がる。

A 2類

口縁部の内湾がA 1類より弱まる、もしくは直行する。口縁部文様帯がやや広くなり、沈線は幅が広く粗雑になってくる。胴部の張りも弱まり、口径と胴部最大径はほぼ同じものが多い。胴部最大径から胴部上半にかけての立ち上がりがA 1類に比べ直線的である。

A 3類

口縁部が外反し、口縁部文様帯が更に広がる。胴の張りはA 2類と類似するがより弱まる。口径が胴部最大径より大きい。

B 1類

胴が「く」字状に強く張り、口径より胴部最大径が大きいものが多い。口縁部に区画を持たないものは、口縁部が外反する。

B 2類

口縁部が直行気味になり、胴の張りが弱まる。口径と胴部最大径はほぼ同じか、口径のほうが大きい。

B 3類

口縁部が外反し、胴が丸みを帯びる。口径が胴部最大径より大きい。

C類

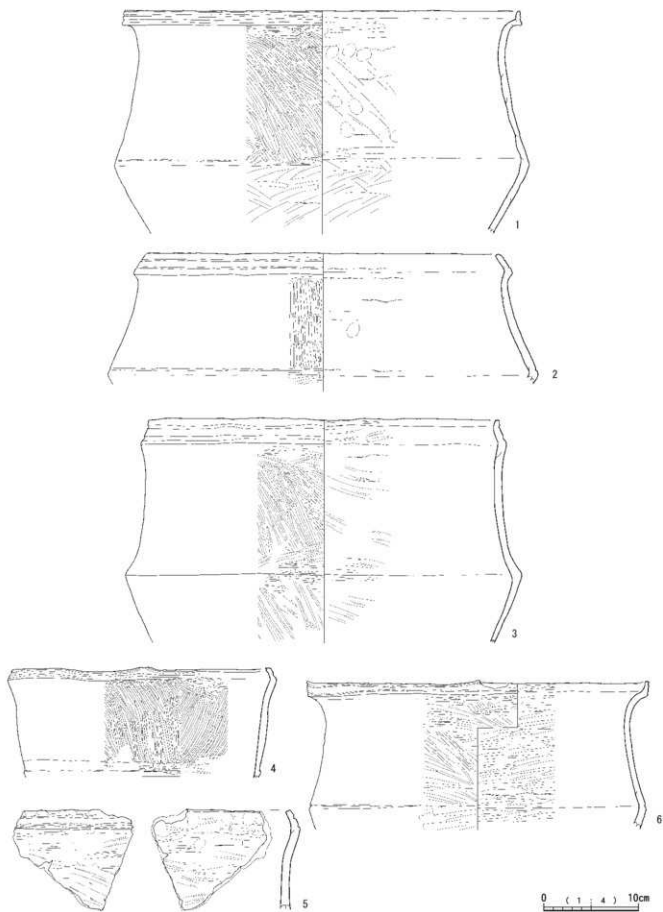
胴部が丸みを帯び、口縁部へ内湾しながら立ち上がるいわゆる砲弾形を呈する深鉢で、器形が特殊であるため無文土器のB類とは別に分類した。河川は上加世田式の代表的な土器の例として砲弾形の土器を取り上げているもの、「器形としては数が少なく、きわめてまれ」と記している(河川 1973: 第2表文献番号5)。

ア. 深鉢A 1類 (第20図～第23図)

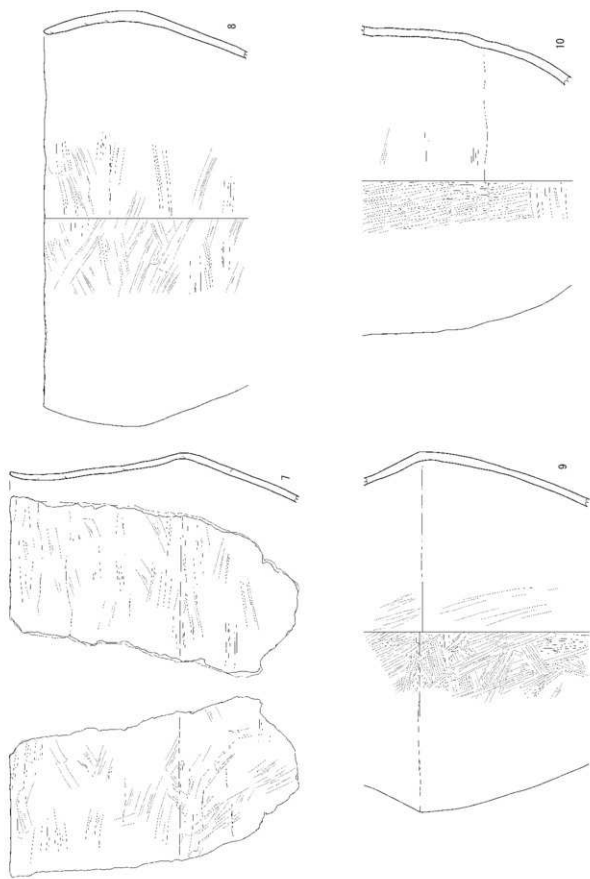
第20図11は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至り、最大径直上に胴を巡る段を作る。胴部上半はわずかに内傾しつつ立ち上がり、口縁部直下で「く」字状に屈曲して張り出したのち内湾して口縁部に至る。口縁部文様帯には沈線を2条施す。底部はわずかに上げ底である。内外面ともにナゲ後ミガキにより器面調整され、外

面の胴部最大径付近に煤痕、内面底部付近にコゲ痕が残存する。12は胴部最大径で「く」字状に強く屈曲し、胴部上半は内傾して立ち上がり頸部でわずかに外反し、口縁部は内傾する。口縁部文様帯には3条の沈線を巡らせる。胴部最大径は器高の半分よりやや上に位置し、口径よりも大きく張り出す。外面はナゲ後ミガキ、内面はナゲにより器面調整され、内面には貝殻条痕が残存する。外面胴部下半に煤痕が残存する。13は胴部が「く」字状に張り出し、内傾しつつ胴部上半に至る。頸部で屈曲して外反し、口縁部は内湾する。強く張り出した口縁部は断面が三角形を呈し、文様帯として沈線が3条巡る。外面はミガキ、内面はナゲにより器面調整され、内面には部分的に貝殻条痕が残存する。14は胴部下半からやや丸みを帯びて胴部最大径に至り、「く」字状に屈曲し、胴部上半は外側に反るように立ち上がる。胴部最大径が口径よりも大きく張り出す。口縁部は内湾し、口縁部文様帯に凹線を2条巡らす。外面の胴部上半はミガキ後ナゲ、胴部下半は粗いナゲで器面調整され、胴部下半には貝殻条痕が残存する。内面はナゲで器面調整される。

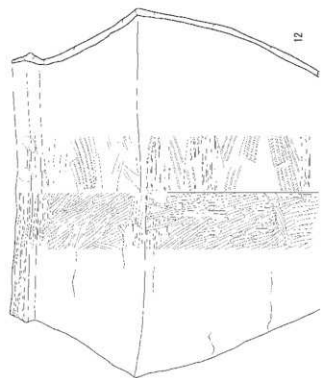
第21図15は胴部最大径が「く」字状に張り出し、内傾しながら頸部まで至る。頸部で強く屈曲し外反したのち、やや内傾して口縁部に至る。口縁部文様帯には2条の沈線が巡る。外面はミガキ後丁寧なナゲ、内面はケズリ及びナゲにより器面調整され、外面胴部下半にコゲ痕が残存する。16は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至り、最大径直上に胴を巡る段を作る。胴部上半は内傾して立ち上がり、頸部で外反したのち口縁部は直行する。口縁部内面に明瞭な段が見られ、口縁部文様帯には沈線を2条巡らす。内外面ともにナゲ及びミガキにより器面調整され、外面胴部下半に煤痕が残存する。17は屈曲した胴部からわずかに内傾しながら立ち上がり、口縁部直下で大きく張り出したのち、やや外反して口縁部に至る。口縁部文様帯には2条の沈線を巡らす。内外面ともにミガキ後ナゲ及びミガキにより器面調整される。口縁部は外反気味であるが、沈線が比較的丁寧であること、口縁部下の屈曲が強く胴部最大径の屈曲が強いことなどからA 1類に分類した。18は丸く張った胴部最大径から内傾しつつ立ち上がり、頸部で強く屈曲して張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には深い凹線を1条、その上部に細い沈線を1条巡らせる。山形突起をもち、突起の下に縦方向の細長い凹点を施す。破片のため、全体の突起の数は不明である。外面はミガキ、内面はナゲにより器面調整され、外面胴部下半に煤痕が残存する。19は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至り、最大径直上に胴を巡る段を作る。胴部上半は外向きに屈曲して口縁部直下まで立ち上がり、口縁部は内湾する。口縁部文様帯には3条の沈線を巡らす。外面上部はミガキ後ナゲ、外面下部はケズリに近い粗いナ



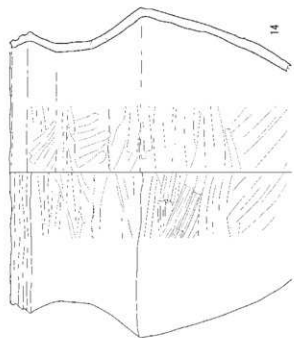
第 18 圖 遺構内出土土器① (縄文深鉢)



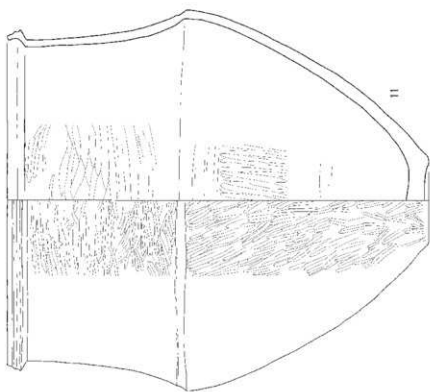
第19圖 遺構内出土鏡②(銅文深鉢)



12



14



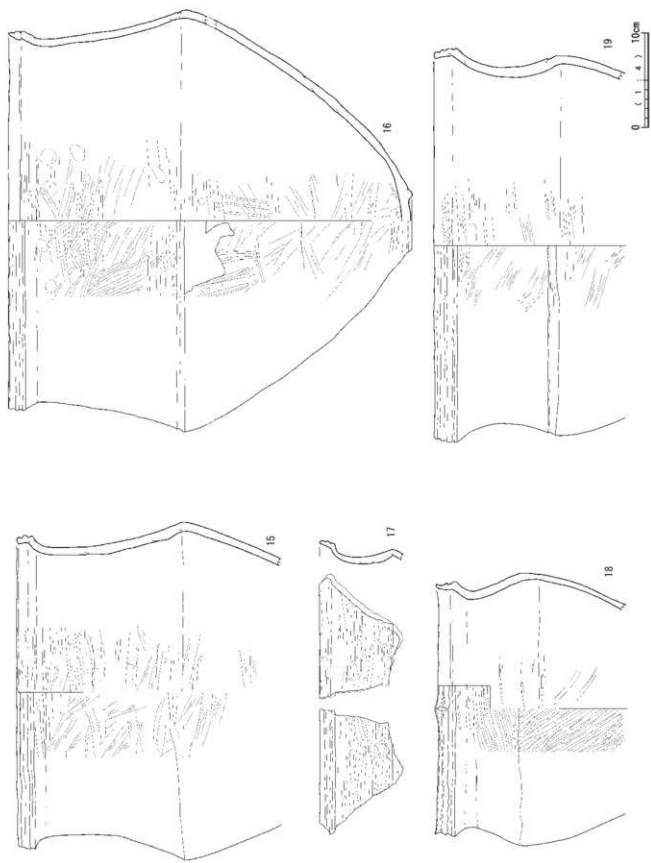
11



13



第20圖 包舍館出土器① (縄文深鉢)



第21圖 包舍館出土器② (銅文深鉢)

で、内面はミガキ及びナデにより器面調整される。

第22図20は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至り、最大径直上に胴を巡る段を作る。胴部上半は外向きに屈曲して口縁部直下まで立ち上がり、口縁部は内湾する。口縁部文様帯に沈線を巡らせるが、短い沈線が重なり合うやや粗雑な施文である。内外面ともにナデにより器面調整され、内面には部分的に貝殻条痕が残存する。内面にコグ痕が残存する。21は胴部下半からやや直線的に立ち上がって胴部最大径に至り、口縁部直下まで緩く屈曲したのち、内湾して口縁部に至る。口縁部文様帯には沈線を1条巡らせる。胴部最大径が器形の半分より高い位置にあり、口径よりやや大きい。外面はミガキ、内面はミガキ及びナデにより器面調整されるが、全体的に調整が荒く器面に凹凸が目立つ。22は平底の底部からわずかに丸みを帯びて胴部最大径に至る。胴部上半は外向きに屈曲して口縁部直下まで立ち上がり、口縁部は内湾する。口縁部文様帯には凹線を施すが、凹線が重なり合う粗雑な施文である。内外面ともにやや粗いミガキ及びナデにより器面調整され、外面の胴部最大径よりやや下に煤痕、内面にコグ痕が残存する。23は胴部最大径からやや内傾して立ち上がり、口縁部直下で外反して張り出したのち、内湾して口縁部に至る。口縁部文様帯には沈線を2条巡らす。外面はミガキ、内面はナデにより器面調整される。24は胴部最大径からわずかに内傾しつつ立ち上がり、口縁部直下で緩やかに外反したのち内湾して口縁部に至る。口縁部文様帯には沈線を3条巡らす。胴部最大径付近に沈線もしくは段が巡ると考えられる。外面はナデ後ミガキ、内面はナデにより器面調整され、器壁が薄く均一に作られている。

第23図25は胴部上半が緩やかに外反して立ち上がり、内湾して口縁部に至る。他の深鉢に比べ口縁部文様帯が狭く、細い沈線を2条巡らす。外面はミガキ、内面の口縁部付近はミガキ、胴部はナデにより器面調整される。26は底部からやや丸みを帯びて胴部最大径に至り、胴部上半へわずかに内傾しつつ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部文様帯は作らず、外反した口唇部に沈線を2条巡らす。胴部最大径は口径より大きく、直上に胴を巡る段を作る。胴部外面上半はミガキ、外下半はケズリ及びナデ、内面はミガキ及びケズリ、ナデにより器面調整される。27は底部から丸みを帯びて胴部最大径に至り、胴部上半へ内傾しつつ立ち上がりそのまま口縁部へ至る。口縁部文様帯を作らず、口縁部に深い凹線を1条巡らす。胴部最大径の直上には沈線を1条巡らす。底部はややいびつな平底である。外面の胴部上半はミガキ、胴部下半はケズリ後ミガキ及びナデ・工具ナデ、内面はミガキ及びナデ・ケズリ・工具ナデにより器面調整される。内面にコグ痕が残存する。

イ. 深鉢A2類 (第24図～第27図39～41)

第24図28はやや丸みを帯びた胴部下半から胴部最大径に至り、胴部上半は緩やかに内傾しながら立ち上がり口縁部直下で屈曲してやや外反する。口縁部は内反し、断面三角形状に厚みを持つ。口縁部文様帯には2条の沈線を巡らす。胴部外面上半はミガキ、外面下半はミガキ及びナデ、内面はミガキ及び工具ナデ、ナデで器面調整され、内面には一部条痕が残る。外面胴部最大径付近に煤痕が残存する。29は丸みを帯びた胴部からやや内傾しつつ立ち上がり、口縁部直下で屈曲して外へ張り出す。口縁部はやや丸みを持って内湾し、口縁部文様帯には3条の沈線を巡らす。外面はミガキ後ナデ、内面はナデにより器面調整され、外面胴部下半には貝殻条痕が残存する。また、内面にコグ痕が残存する。30はやや張った胴部からわずかに内傾して立ち上がり、口縁部直下で外へ張り出す。口縁部はわずかに内湾し、口縁部文様帯には2条の沈線を施す。口縁部直下に補修孔が1つ確認できる。外面はミガキ、内面はミガキ及びナデにより器面調整される。内面にコグ痕が残存する。31は胴部から内傾しつつ立ち上がり、口縁部直下で外へ張り出す。口縁部文様帯には2条の沈線を巡らす。外面はミガキ、内面はナデ及びミガキにより器面調整される。色調は暗い灰色を呈し、30と類似する。

第25図32は胴部から直線的に立ち上がり、頸部で短く外反したのち口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がり、外面は広い文様帯をもち、2条の沈線を巡らす。外面はミガキ後ナデ、内面はナデにより器面調整され、外面の一部に煤痕が残存する。33は胴部から内傾して直線的に立ち上がり、頸部で外反したのち口縁部は直行する。口縁部文様帯には3条の沈線を巡らせるが、部分的に4条になる。外面はやや粗いミガキ、内面はナデにより器面調整される。胴部にはわずかに煤痕が残存する。34は丸みを帯びた胴部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下で外に張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯は幅広く、非常に浅い2条の沈線を巡らす。外面上半はナデ及びミガキ、外面下半はケズリ、内面はナデにより器面調整される。外面胴部最大径付近に煤痕が残存する。35は丸みを帯びた胴部から内傾して立ち上がり、頸部で屈曲してわずかに外反する。口縁部は内湾するが、口縁部直下の張り出しがほぼ無く、口縁部文様帯の作出が弱い。文様帯に2条の浅い沈線を施す。外面上半はミガキ及びナデ、外面下半はケズリ、内面はナデにより器面調整される。36は胴部最大径で屈曲し、胴部上半に向けて内傾しつつ頸部で緩やかに外反したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には3条の沈線を巡らし、内面の口縁部と頸部の境目付近には凹線が巡る。胴部最大径の直上には、沈線を意識したと考えられる横位のミガキが部分的に見られる。底部は平底である。外面は粗いナデ、内面はミガキ及びナデにより器面調整され、外

面の胴部最大径付近に煤痕が残存する。

第26図37は底部から直線的に胴部最大径まで至り、「く」字状に張り出して屈曲する。頭部まで直行したのち口縁部文様帯直下で屈曲して外反し、直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には2条の沈線を施す。底部は平底である。外面はナデ後ミガキ、内面はミガキ及びナデにより器面調整され、内面底部付近に凹を描くようにコゲ痕が残存する。38は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至る。胴部上半は外向きに屈曲して口縁部直下まで立ち上がり、口縁部は内湾する。口縁部文様帯には3条の太い凹線を巡らす。凹線が重なり合う粗雑な施文である。内外面ともにナデ後ミガキにより器面調整され、底部はわずかに上げ底である。外面の胴部最大径付近に煤痕、内面にコゲ痕が残存する。

第27図39は「く」字状に張った胴部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下でわずかに外反したのち内湾して口縁部に至る。口縁部文様帯には粗雑な沈線を3条巡らす。外面胴部上半はミガキ及びナデ、胴部下半はミガキ及びケズリに近い粗いナデ、内面はミガキ及びナデにより器面調整され、外面胴部最大径付近に煤痕、内面にコゲ痕が残存する。39の胴部最大径の張りの強さはA1類に類似するが、胴部上半がほぼ垂直に立ち上がること、口縁部の内傾がA1類より弱いことからA2類とした。40はわずかに張る胴部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下で緩く張り出す。口縁部は内湾して広い口縁部文様帯を作り、粗雑な3条の凹線を巡らす。内外面ともにナデにより器面調整される。41は胴部下半からわずかに丸みを帯びて胴部最大径に至る。最大径部分直上はやや段をもち、わずかに外反しながら立ち上がりそのまま口縁部まで至る。文様帯は器面調整によりわずかに作り出され、粗雑で細い2条の沈線を巡らす。外面はナデ及びケズリ、内面はナデにより器面調整される。

ウ、深鉢A3類(第27図42)

A3類に該当する深鉢は1点のみであった。

第27図42は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至り、わずかに内傾しながら立ち上がる。頭部で外反しそのまま大きく開いて口縁部へ至る。幅の広い文様帯をもち、3条の沈線を巡らす。内外面ともにナデにより器面調整され、外面胴部下半に煤痕、内面下部に濃いコゲ痕が残存する。

エ、深鉢B1類(第28図、第29図47)

第28図43は胴部最大径が大きく張り出し、明確な襷をもつて「く」字状に屈曲する。頭部で屈曲して外反し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部には有文深鉢の文様帯と同様に区画を有するが、沈線などの文様は施されない。外面は粗いミガキ、内面は粗いミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整され、胴部最大径よりやや上に煤痕が残存する。胴部最大径が口径より大きく、深鉢B

1類では唯一口縁部に文様帯と同様の区画を有する。44は丸みを帯びた胴部からやや内傾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。胴部最大径の直上には粗雑で浅い沈線が巡る。外面はミガキ及びナデ、内面はミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。胴部最大径と口径がほぼ同じであり、外面胴部下半に煤痕が残存する。45は丸みを帯びた胴部から内湾しつつ立ち上がったのち、短く外反して口縁部に至る。外面はナデ後ミガキ及びケズリ・ナデ、内面はミガキ及びナデにより器面調整される。胴部最大径が口径より大きい。46はやや丸みを帯びた胴部下半から胴部最大径に至り、「く」字状に屈曲して胴部上半に向けて内傾しつつ立ち上がりながら口縁部に向かって外反する。胴部最大径は口径よりやや小さい。底部は円盤状の平底である。外面はミガキ及び胴部下半は粗いナデ、内面はケズリ状の粗いナデにより器面調整され、外面胴部下半に煤痕、内面にコゲ痕が残存する。胴部最大径が口径とほぼ同じである。

第29図47は「く」字状に張った胴部からわずかに内傾しつつ立ち上がり、頭部で屈曲して外反しそのまま口縁部へ至る。外面上半はミガキ、外面下半はミガキ後ナデ、内面はナデにより器面調整され、外面胴部最大径付近に煤痕、内面下部にコゲ痕が残存する。

オ、深鉢B2類(第29図48、第30図49～51)

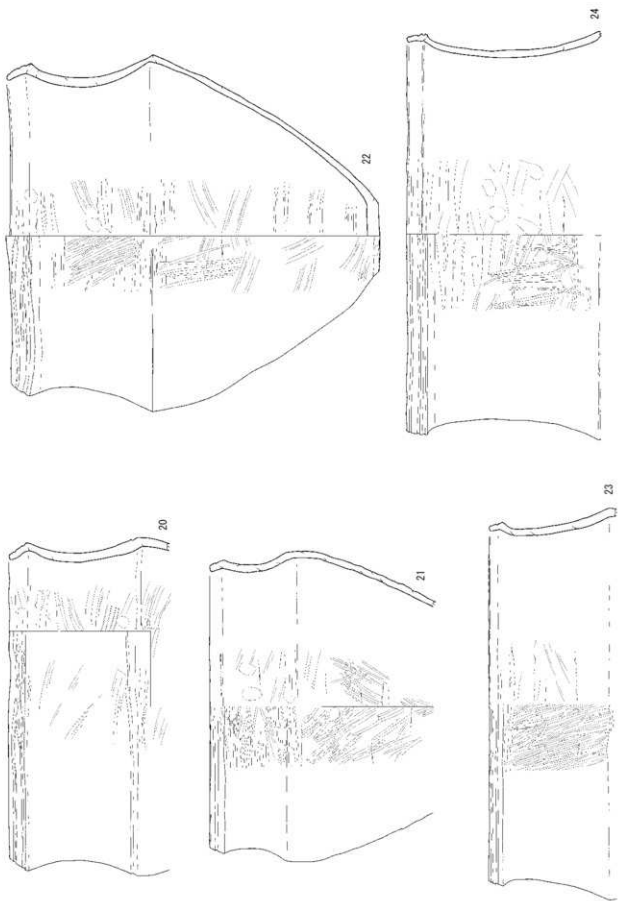
第29図48は胴部が丸みを帯び、胴部最大径から緩く外反しながら立ち上がり口縁部は内湾する。口縁部に文様帯と同様の区画を有するが、沈線などの文様は施されない。補修孔と考えられる穿孔が1か所みられる。外面は粗いナデ後ミガキ、内面はミガキ及びナデにより器面調整される。内面下部にコゲ痕がみられる。

第30図49は胴部最大径から胴部上半に向けてやや内傾し、頭部で外反したのち口縁部はわずかに内湾する。口縁部に文様帯と同様の区画を有するが、沈線などの文様は施されない。外面はミガキ及びナデ、内面はナデにより器面調整される。50は底部付近からやや丸みを帯びて胴部最大径に至る。「く」字状に屈曲したのち垂直に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁端部がわずかに外反し、口唇部に平坦面を持つ。底部は平底である。外面はナデ、内面はナデと一部工具ナデ・ミガキにより器面調整され、外面胴部最大径よりやや下に煤痕、内面底部付近にコゲ痕が残存する。51はやや張った胴部最大径からほぼ垂直に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はわずかに内傾し、器壁を均一に薄く仕上げている。内外面ともにナデにより器面調整され、外面の胴部最大径付近に煤痕、内面下部にコゲ痕が残存する。

カ、深鉢B3類(第30図52)

B3類に該当する深鉢は1点のみであった。

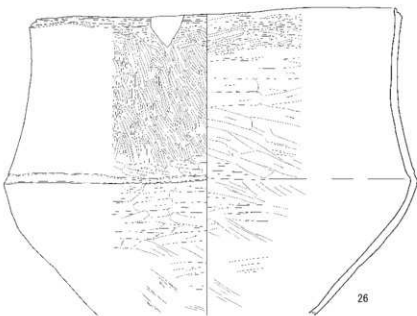
第30図52は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至るが、最大径付近の張りはほとんど無い。胴部上半に



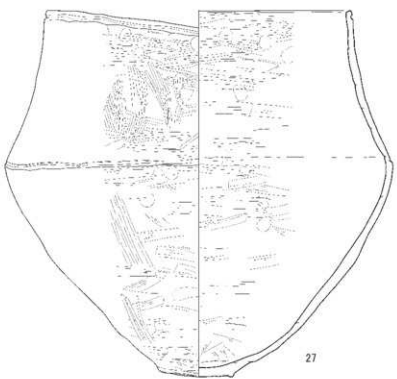
第 22 圖 包舍簡出土器③ (銅文深鉢)



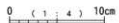
25



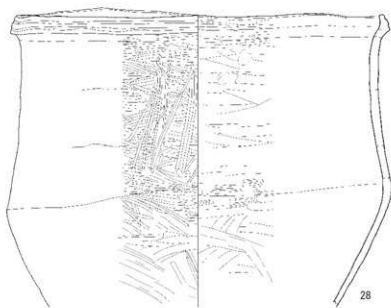
26



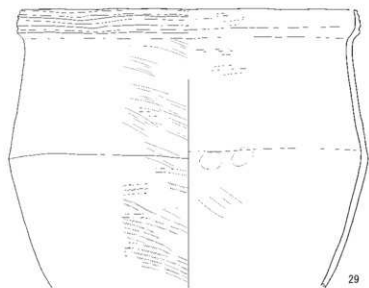
27



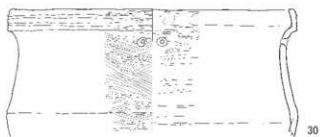
第 23 圖 包含層出土土器④ (絹文深鉢)



28



29



30



31

第 24 圖 包含層出土器⑤ (緞文深鉢)

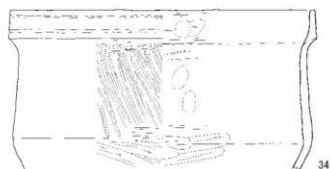
0 (1 : 4) 10cm



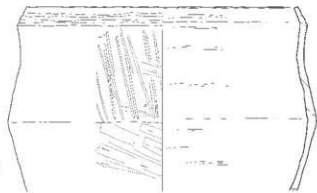
32



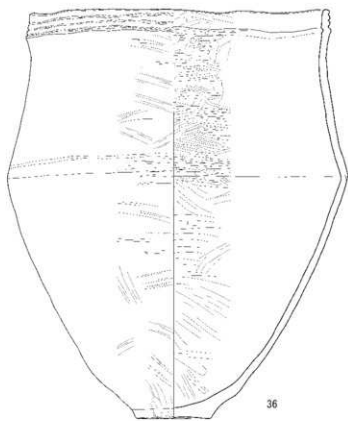
33



34



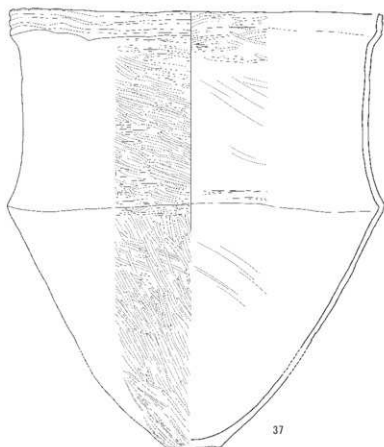
35



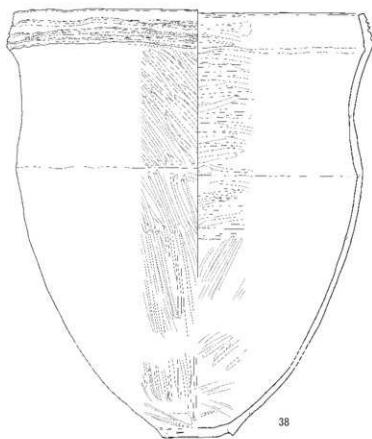
36

0 (1 4) 10cm

第25圖 包含層出土土器⑥(縄文深鉢)



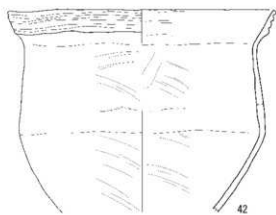
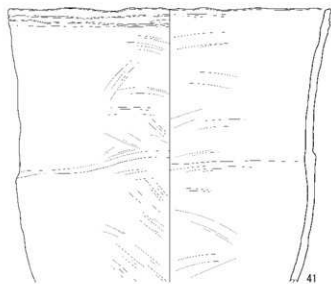
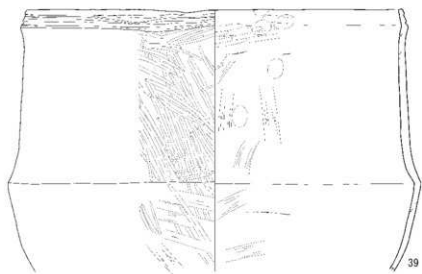
37



38

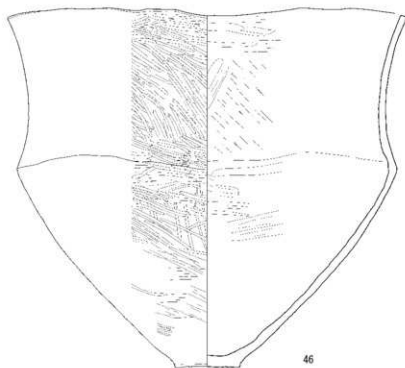
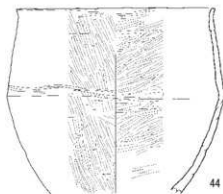
0 (1 : 4) 10cm

第 26 圖 包含層出土土器⑦ (縄文深鉢)



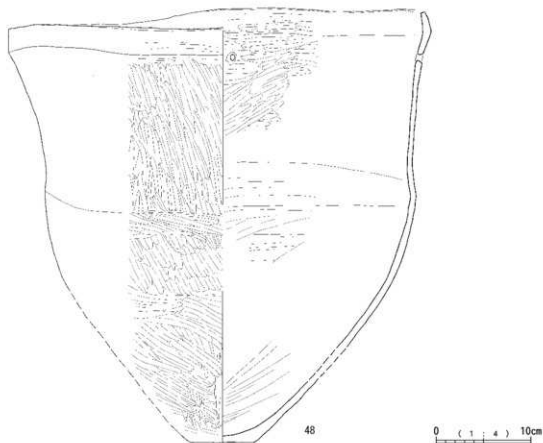
0 (1 : 4) 10cm

第 27 圖 包含層出土土器⑧ (緋文深鉢)



0 (1 : 4) 10cm

第 28 圖 包含層出土器⑤ (縄文深鉢)



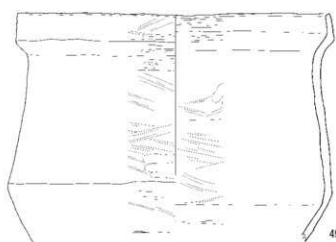
第29図 包含層出土土器⑩(縄文深鉢)

向けてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下で屈曲して外反しそのまま大きく開いて口縁部へ至る。口縁部は厚く作られ、文様帯と同様の区画を有するが、沈線などの文様は施されない。外面はミガキ及び粗いナデ・ケズリ、内面はミガキ及びナデにより器面調整され、外面の胴部最大径付近に煤痕が残存する。

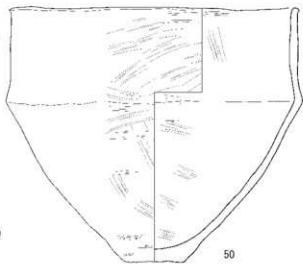
キ. 深鉢C類(第31図)

第31図53は砲弾形を呈する器形で、胴部の中央付近の器壁がやや薄くなる。外面の胴部上半はナデ、外面胴

部下半はミガキ及び粗いナデ、内面はナデにより器面調整される。外面胴部上半には、撚り糸を押圧したような痕や幅広い流線がみられる。土器製作過程で偶然ついたものか、何らかの文様として意図的に描いたものかは不明である。外面胴部下半に煤痕が残存する。54は胴部下部から丸みを帯びて口縁部まで至る砲弾形の器形である。外面に輪積み痕が観察できる。内外面ともにやや粗いナデ及び工具ナデで器面調整し、外面の胴部下部に煤痕、内面下部にコゲ痕が残存する。55も砲弾形の器形だが、



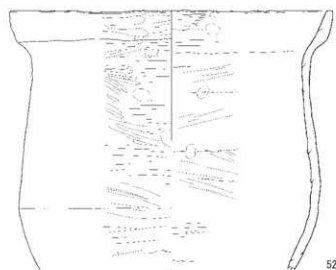
49



50



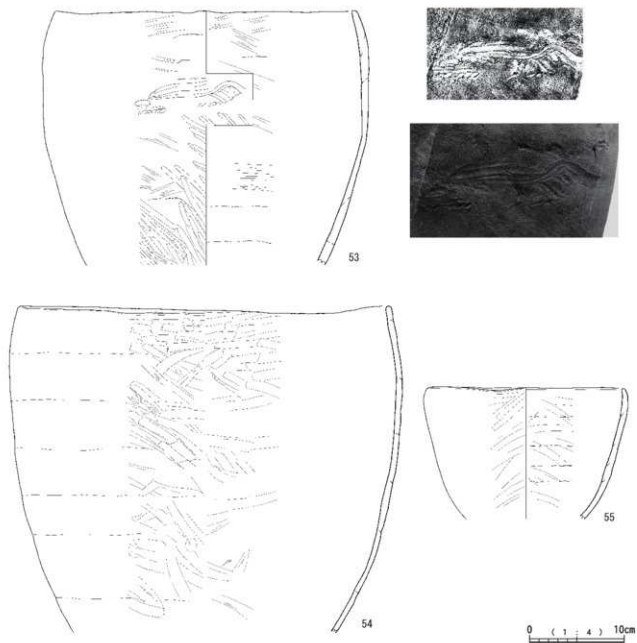
51



52



第30圖 包含層出土土器①(緋文深鉢)



第31図 包含層出土土器⑫(縄文深鉢)

53や54に比べ小型で胴部はやや直線的である。内面には輪積み痕が観察できる。内外面ともにミガキ後ナデにより器面調整され、外面の胴部下半に煤痕が残存する。

② 小型深鉢(第32図)

器高が口径と同じか大きいいわゆる深鉢の形態だが、小型のものを小型深鉢とした。有文のものをA類、無文のものをB類とし、深鉢の分類基準を基本としてそれぞれ1類と2類に分類した。

A 1類

口縁部が内湾し、文様帯に沈線を施すもの。胴の張り

が強いものと弱いものがある。胴部最大径が器高の半分の位置か、半分よりも上に位置する。

A 2類

口縁部が直行または外反気味になり、胴部の張りが弱くなるもの。口縁部まで直線的に立ち上がる。胴部最大径が器高の半分よりも下に位置する。

B 1類

口縁部が外反し、やや胴部が張るもの。

B 2類

口縁部が直行し、やや胴部が張るもの。

ア. 小型深鉢A 1類 (第32図56～58)

第32図56は胴部最大径が「く」字状に屈曲し、頸部で強く屈曲しながら立ち上がり、口縁部は丸みを持って内湾する。口縁部文様帯には沈線を巡らすが、非常に粗雑である。沈線の施文には先端が二股に分かれた工具を使用していると思われる。外面はミガキ及びナデ、内面はナデ及びミガキ後ナデにより器面調整される。57は丸く張った胴部から内傾しつつ立ち上がり、口縁部直下で強く屈曲して外へ張り出す。口縁部は丸みを帯びて内湾し、口縁部文様帯には3条の沈線を巡らす。内外面ともにミガキ及びナデにより器面調整される。外面の胴部最大径付近に煤痕が残存する。58は胴部最大径が器高の半分より上に位置し、胴部最大径の屈曲は大きくはないが稜をもつ。頸部で屈曲して外反し、直行して口縁部へ至る。口縁部文様帯には沈線を1条巡らす。器壁が非常に薄く、均一に作られている。外面はナデ及びナデ後ミガキ、内面はナデにより器面調整され、外面の胴部下半に煤痕が残存する。

イ. 小型深鉢A 2類 (第32図59～61)

第32図59はやや張った胴部最大径からほぼ垂直に立ち上がり、頸部で屈曲してわずかに外反したのち、直行して口縁部に至る。口縁部文様帯が広く、幅の太い回線を2条巡らす。外面はミガキ、内面はナデにより器面調整される。外面の胴部最大径付近に煤痕が残存する。60はやや張った胴部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下でわずかに外反してそのまま口縁部へ至る。口縁部では粘土を2段階に分けて積み、接合痕をあえて残して沈線のように見立て、口縁部文様帯を巡らせていると考えられる。外面はミガキ後ナデ、内面はミガキ後ナデ及び工具ナデにより器面調整される。61は胴部最大径が稜を持って屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がって口縁部直下で外反する。内外面ともにミガキにより器面調整され、外面に煤痕が残存する。61は口縁部が残っていないが、胴部最大径の屈曲が胴部の下に位置すること、胴部が直線的に立ち上がることから60に近い器形である可能性が高い。また、器面調整が非常に丁寧に精緻な作りであり、有文のA類である可能性が高いことから、A 2類とした。

ウ. 小型深鉢B 1類 (第32図62・63)

第32図62は胴部下半から丸みを帯びて口縁部最大径に至る。やや内傾しつつ立ち上がり、頸部で屈曲して外反しそのまま口縁部へ至る。外面はナデ、内面上半はナデ及び工具ナデ、内面下半はケズリにより器面調整される。63は底部付近からやや丸みを帯びて胴部最大径に至り、「く」字状に屈曲する。頸部で屈曲してわずかに外反し、そのまま口縁部へ至る。底部は円盤形に張り出す上げ底である。外面はナデ後ミガキ、内面上半はミガキ及びナデ、内面下半はナデ後ミガキにより器面調整される。外面胴部下半に煤痕が残存する。

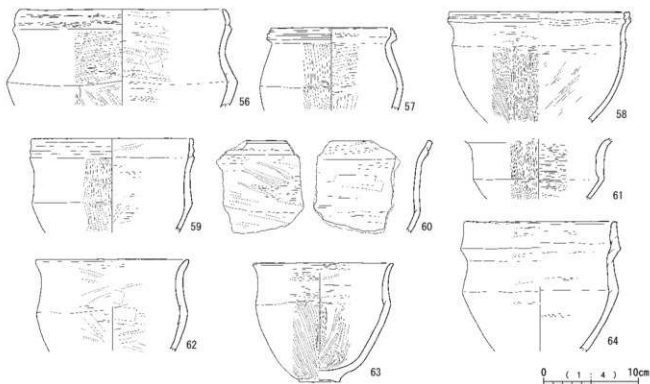
エ. 小型深鉢B 2類 (第32図64)

第32図64は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至る。胴部最大径は「く」字状に屈曲し、頸部で外反したのち直行して口縁部へ至る。胴部上半の器壁が厚く、口縁部に文様帯と同様の区画を有するが、沈線などの文様は施されない。内外面ともにナデにより器面調整される。外面の胴部最大径付近にわずかに煤痕が残存する。胴部最大径の張りの強さはB 1類に類似するが、直行する口縁部や口縁部の幅広い区画が目立ち、B 1類とは異なり器壁が極端に厚く調整がやや粗雑になっていることから、B 1類と区別してB 2類とした。

③ 中鉢 (第33図)

浅鉢と深鉢の中間形式を中鉢とした。口径:器高が5:4程度で浅鉢よりも器高が高いが、口縁部文様帯の幅の狭さや文様、ミガキを主に用いた丁寧な器面調整は浅鉢に類似する。いずれの中鉢も施文の種類や口縁部形態、胴が異なる器形が共通している。

第33図65は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に至り、最大径は強く張り出し、直上に段を作る。頸部で強く屈曲して外反したのち、口縁部は内湾して狭い文様帯を作る。文様帯下部に沈線を1条巡らせ、口縁部に凹点を施す。残存状況から、凹点の数は4つと考えられる。内外面ともにナデ後ミガキによって器面調整され、外面胴部最大径付近に煤痕が残存する。丸く焼きまじり、精緻な作りである。66は底部付近から丸みを帯びて胴部最大径に至り、張り出すように「く」字状に屈曲して胴部上半に向け内傾する。頸部で強く屈曲し、口縁部は直行して狭い口縁部文様帯を作る。文様帯には沈線を1条巡らせ、口唇部には4か所に凹点を施す。底部は丸底である。外面胴部上半はナデ、外面胴部下半と内面はミガキ及びナデにより器面調整される。外面胴部最大径付近に煤痕が残存する。67は丸みを帯びた胴部下半から胴部最大径で「く」の字状に屈曲し、胴部上半は内傾しつつ頸部で強く外反する。外面胴部最大径は器高の半分よりやや上に位置し、口径と同程度である。口縁部は直行しながら立ち上がり、狭い文様帯を作り沈線を1条巡らせる。口縁部4か所に凹点を施す。底部は円盤状の平底である。胴部上半はナデ、外面胴部下半はミガキ後ナデ、内面はミガキとナデで器面調整され、外面胴部最大径付近に煤痕、内面にコゲ痕が残存する。68は底部付近から丸みを帯びて立ち上がり、胴部最大径で「く」字状に屈曲する。頸部で屈曲して大きく外側に張り出したのち、幅が狭く厚めの口縁部を作る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、胴部最大径直上に浅い沈線を1条巡らす。外面はミガキ後ナデ、内面は工具ナデ及びナデにより器面調整される。68と同一個体と考えられる平底の底部が確認できたが、接合できなかったため図化していない。69は胴部下半から丸みを帯びて胴部最大径に



第32図 包含層出土土器①(縄文小型深鉢)

至り、「く」字状に屈曲して内傾しながら胴部上半に至る。頸部で外反し、口縁部は短く直行して狭い文様帯を作る。文様帯には沈線を1条巡らせ、口唇部に小さい山形突起を作る。残存状況から、山形突起の数は2つであると考えられる。底部は丸底に近いが、わずかに平坦面を持つ。内外面ともにミガキ及びナデにより器面調整され、外面胴部最大径付近に煤痕、内面にコゲ痕が残存する。

70は径が復元できない破片だが、口縁部文様帯の施文や胴部下半の屈曲度合いから、中鉢に該当する可能性が高いと判断した。「く」字状に屈曲した胴部からやや内傾しながら立ち上がり、口縁部直下で大きく張り出したのち外反して口縁部に至る。口縁部文様帯には粗雑な沈線を1条巡らせ、口縁端部に凹点を施すが、全体の凹点の数は不明である。内外面ともにミガキ後ナデにより器面調整される。71は小型だが器形から中鉢に分類した。丸底の底部から丸みを帯びて胴部最大径に至り、「く」字状に屈曲して胴部上半に向け内傾する。最大径部分の上部には胴を巡る段を作る。頸部で強く屈曲し、口縁部はやや内反気味に立ち上がる。狭い口縁部文様帯を作り沈線を1条巡らす。内外面ともにミガキにより器面調整される。河口の記録によると、71と66は1次調査のAトレンチ住居跡の上から出土している(第7図参照)。レベルの記録がないため推測の域を出ないが、2点の土器はほぼ同レベルで共伴していた可能性もある。

④ 浅鉢(第34図、第35図91~93)

器高が口径の半分程度、または半分以下と考えられるものを浅鉢とした。ミガキを主に用いた丁寧な器面調整を行う。器形や施文から、以下の通りに分類した。

1類

口縁部文様帯をもち、基本的に1条の沈線と凹点を施すもの。肩部が強く張り、頸部から口縁部にかけて短く立ち上がるものが多い。肩部直上に段を入れるものもある。

2類

2-1類: 頸部から口縁部にかけての張り出しが大きく伸びるもの。

2-2類: 頸部から口縁部にかけての張り出しが縮小し、口縁部の作出が顕著でなくなるもの。

3類

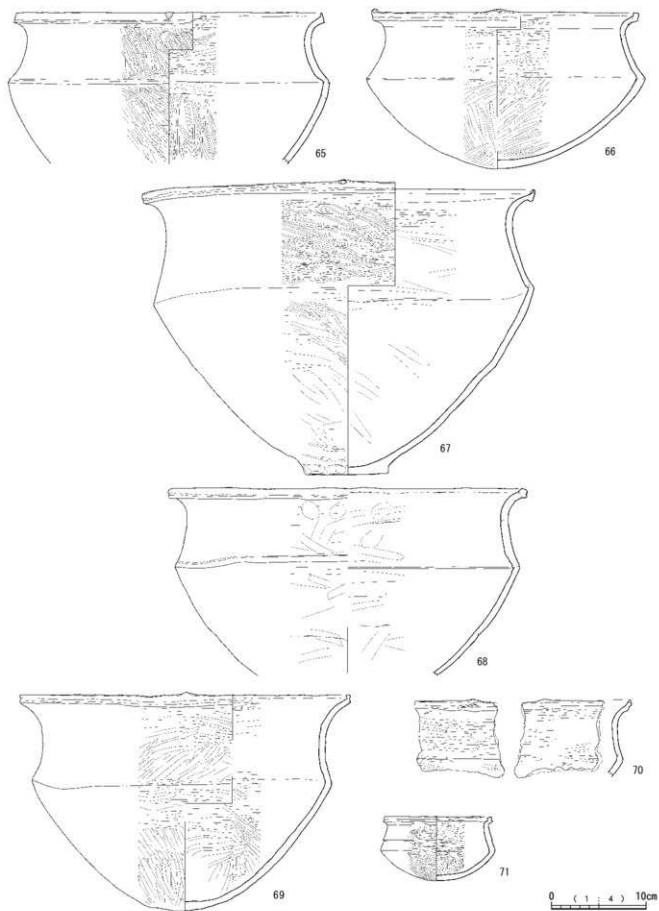
口縁部が大きく外反して端部が玉縁状になり、口縁部に沈線や凹点などの文様が施されなくなるもの。

その他の浅鉢

器形の共通性がなく、上記の分類に当てはまらない浅鉢。

ア. 浅鉢1類(第34図72~84)

第34図72は底部付近でややすばまったのち、丸みを帯びて肩部に至り「く」字状に強く屈曲する。頸部で屈曲して外側に張り出したのち、内湾して口縁部へ至る。



第 33 圖 包含層出土土器④ (縄文中鉢)

口唇部に刻目を入れて二又の山形口縁のように作り、口縁部文様帯には山形の形に合わせるようにして1条の沈線を巡らせる。口唇部の刻目と対応して肩部にも刻目を施すが、残存状況により刻目が全体で何か所施されるかは不明である。外面と内面上半は粗いミガキ、内面下半は貝殻条痕を顕著に残して部分的にミガキで器面調整される。73は底部付近からやや丸みを帯びて肩部に至り、「く」字状に強く屈曲する。頸部で屈曲して外側に張り出したのち、内湾して口縁部に至る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、口縁部文様帯及び肩部には4分の1ごとの間隔で刻目を施す。肩部の直上には胴部を巡る段を作り。底部は丸みを帯びた平底であり、内外面ともにミガキにより器面調整される。74は「く」字状に張った肩部から屈曲して立ち上がり、頸部で外側に張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には沈線を1条巡らせ、文様帯の上端と下端、肩部の3か所に凹点を施し、これらの凹点と沈線には赤色顔料が残存する。残存状況により凹点が全体で何か所施されるかは不明である。また、肩部直上には沈線を意識したと考えられる横位のミガキが部分的に見られる。内外面ともにミガキにより器面調整され、固く焼きしまり精緻な作りである。75は胴部下半から丸みを帯びて肩部に至り、「く」字状に強く屈曲する。頸部で屈曲し外側に張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、文様帯の上端と下端、肩部の3か所に凹点を施し、凹点内にはわずかに赤色顔料が残存する。残存状況により凹点が全体で何か所施されるかは不明である。内外面ともにミガキにより器面調整される。76は胴部下半から丸みを帯びて肩部に至る。頸部で屈曲して外側に張り出し、直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、文様帯上端から口唇部にかけて刻目を施す。内外面ともにミガキにより器面調整され、固く焼きしまり精緻な作りである。沈線と刻目、肩部付近にわずかに赤色顔料が残存する。77は肩部が丸く張り、頸部で屈曲して外側に張り出したのちやや外反して口縁部に至る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、文様帯上端から口唇部・肩部の2か所に凹点を施す。外面はミガキ、内面はミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。口縁部の歪みや凹点の施し方から、他の浅鉢に比べやや粗雑な印象を受ける。78は肩部が「く」字状に強く張り、頸部で強く屈曲して外側に張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁端部が厚く丸みを帯びる。口縁部文様帯には沈線を1条巡らせ、文様帯上端から口唇部、文様帯下端の2か所に凹点を施し、沈線と凹点に赤色顔料が残存する。内外面ともにミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。79はやや丸みを帯びて肩部に至り、頸部で屈曲して外側に張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、文様

帯上端から口唇部・文様帯下端・肩部の3か所に凹点を施し、沈線と凹点には赤色顔料が残存する。内外面ともにミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。

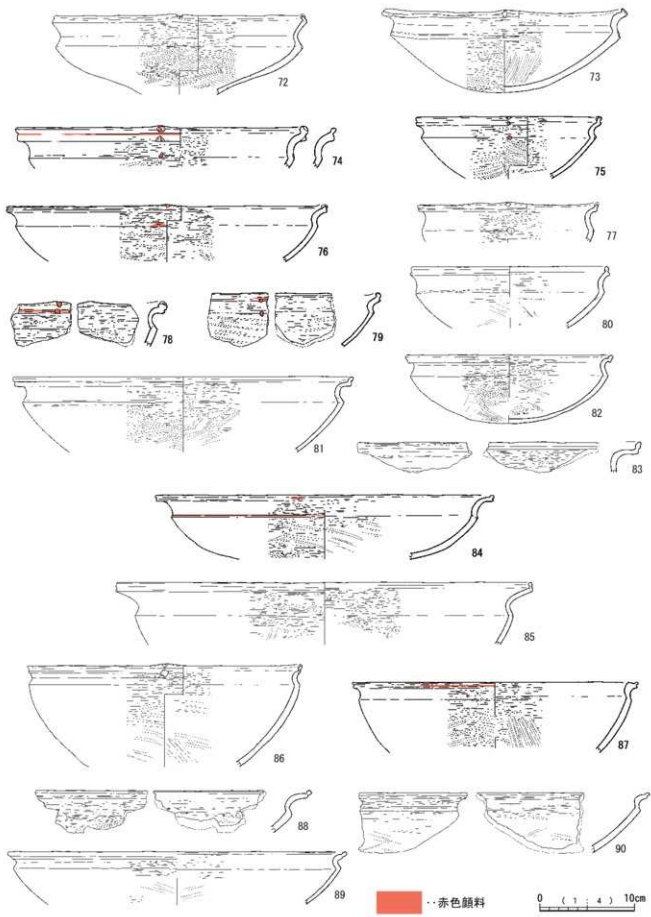
80は丸みを帯びて肩部に至り、頸部で屈曲して外側へ張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には幅広い凹線を1条巡らす。肩部直上には、胴を巡る沈線を意識したと思われるミガキや強い指ナデのような調整が部分的に見られる。内外面ともにミガキ後ナデにより器面調整される。81は胴部下半から丸みを帯びて肩部に至り、「く」字状に強く屈曲する。頸部で強く屈曲し大きく外側に張り出したのち、外反して口縁部に至る。口縁部には粘土を2段階に分けて積み、接合痕を残して段のように作り、口縁部を巡らせている。また、肩部の直上には胴を巡る段を作り、直下には非常に細い沈線を部分的に施す。外面はミガキ、内面はミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。82は底部付近から丸みを帯びて肩部に至り、「く」字状に屈曲する。頸部で屈曲して外側に張り出したのち、ほぼ直行して口縁部へ至る。口縁部には文様帯と同様の区画が作られるものの、横位のナデによりわずかに中央部が凹んでいるのみで文様は見られない。内外面ともにミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。83は頸部で強く屈曲して外側へ大きく張り出し、直行して口縁部に至る。口唇部に浅く刻目を施し、口縁部文様帯には2条の沈線を巡らせるが、2条のうち上の沈線は刻目直下で意図的に途切れさせている。内外面ともにミガキ及びミガキ後ナデで器面調整され、固く焼きしまり精緻な作りである。84は底部付近から丸みを帯びて平たく立ち上がり、頸部で屈曲して外側に張り出したのち、わずかに立ち上がる短い口縁部を作る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせる。肩部直上は沈線を意識したと考えられるやや強めのミガキ調整が見られ、赤色顔料がわずかに残存する。外面はミガキ、内面はミガキ後ナデにより器面調整される。

イ. 浅鉢2-1類 (第34図85)

第34図85は胴部下半から丸みを帯びて立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頸部で強く屈曲し外側に大きく張り出して伸びたのち、直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らす。外面はミガキ後丁寧なナデ、内面はミガキにより器面調整される。

ウ. 浅鉢2-2類 (第34図86・87)

第34図86は胴部から丸みを帯びて立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頸部で屈曲して外側に張り出したのち、直行して口縁部に至る。口縁部が薄く、端部は玉状に近い。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、文様帯上端から口唇部・文様帯下端の2か所にやや粗雑な凹点を施す。残存状況により凹点が全体で何か所施されるかは不明である。内外面ともにミガキ及びミガキ後丁寧なナデによって器面調整される。固く焼きしまつて



第34圖 包含層出土土器⑮ (縄文浅鉢)

精緻な作りである。87は胴部下半から丸みを帯びて立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頭部で屈曲して外側に大きく張り出したのち、立ち上がりはほぼ作らず口縁部となる。内面の器壁が口縁部の高さと同程度で屈曲して平坦面を形成しており、わずかに赤色顔料が残存する。口唇部には沈線を1条巡らせ、沈線内に赤色顔料が残存する。内外面ともにミガキにより器面調整される。

エ. 浅鉢3類 (第34図88～90)

第34図88は肩部が「く」字状に屈曲し、頭部で大きく屈曲して外側に張り出して口縁部に至る。口縁端部は玉状で、外面には粘土の接合痕がそのまま残る。外面はミガキ及びナデ、内面はミガキ後ナデにより器面調整され、固く焼きしまって精緻な作りである。89は胴部下半から丸みを帯びて平たく立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頭部で強く屈曲して外側へ張り出し、そのまま口縁部へ至る。口縁端部は玉状で、内外面ともにミガキにより粘土の接合痕を消していると考えられる。内外面ともにミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。外面の肩部付近に部分的に煤痕が残存する。90は胴部下半から丸みを帯びて平たく立ち上がり、肩部で「く」字状に強く屈曲する。頭部で屈曲して大きく外側に張り出したのち、そのまま口縁部に至る。口縁端部は玉状でわずかに立ち上がり、粘土の接合痕に沿って施されるミガキが沈線のように口縁部を巡ると考えられる。肩部直上には、胴を巡ると考えられる沈線が見られる。内外面ともにミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整され、固く焼きしまり精緻な作りである。

オ. その他の浅鉢 (第35図91～93)

リボン状の突起がついている浅鉢を2点掲載する。第35図91は丸みを帯びた胴部から頭部に至り、「く」字状に強く屈曲して大きく外反し、そのまま口縁部に至る。口縁部はわずかに立ち上がるが、端部を玉状にする作りに近い。口縁部には1条の沈線を巡らせる。また、頭部にはリボン状の突起を付けており、突起のみ欠けた痕跡も残る。残存状況から全体のリボン状突起の数は不明である。内外面ともにミガキにより器面調整される。92は浅鉢の破片で、口縁部には丸みを帯びたリボン状の突起を付ける。小片のため、傾きは不明である。内外面ともにミガキにより器面調整される。91と92はリボン状突起が共通しており、ほぼ同時期である可能性が高い。

第35図93は肩部が「く」字状に強く屈曲し、頭部でも内面に明確な稜をもって強く屈曲したのち、直線的に大きく外反してそのまま口縁部に至る。口縁端部が玉状に近い形だが、口縁部から頭部の屈曲部付近まで、粘土を貼り付けることによって器壁を肥厚させている。文様は見られず、口縁部の肥厚帯の中央部が調整によりわずかに凹んでいる。内外面ともにミガキ後ナデにより器面調整される。頭部から直線的に立ち上がる器形は91に

類似するが、口縁部の幅広い肥厚という他の浅鉢に見られない特徴がある。

⑤ 中型・小型浅鉢 (第35図94～99)

浅鉢の中でも口径15cm前後の中型のものを中型浅鉢・口径10cm程度の小型のものを小型浅鉢とした。中型浅鉢は、浅鉢の分類基準に則って1類と2類に分類した。

ア. 中型浅鉢1類 (第35図94・95)

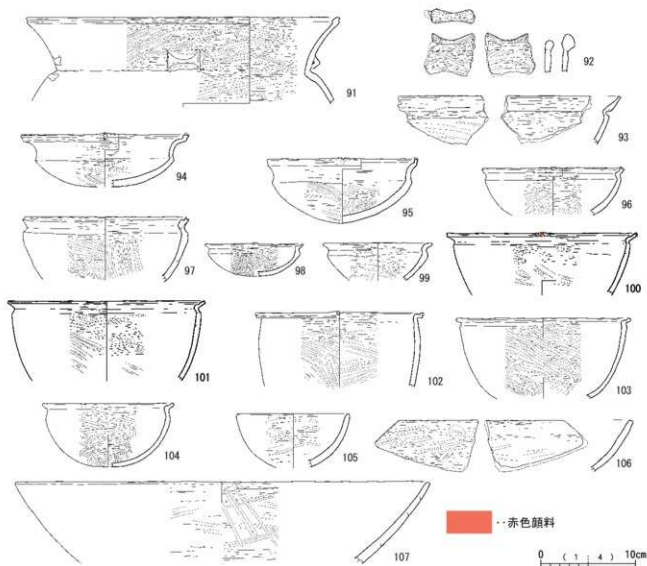
第35図94は底部付近から丸みを帯びて平たく立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頭部で屈曲して外側に張り出したのち、直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、その上から凹点を施す。残存状況から全体の凹点の数は不明である。底部は丸底と考えられる。内外面ともにミガキ後ナデにより器面調整される。95は底部付近から丸みを帯びて立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頭部で屈曲して外側に弱く張り出したのち、直行して口縁部に至る。口縁部は文様帯のように区画を作るが、文様は施さず、横位のナデ調整により中央がやや凹む。口唇部に刻目を入れて二又の山形突起のように作るが、残存状況から全体の刻目の数は不明である。内外面ともにミガキ後ナデにより器面調整される。

イ. 中型浅鉢2類 (第35図96・97)

第35図96は胴部下半から丸みを帯びて立ち上がり、肩部で緩く屈曲する。頭部で屈曲したのち、そのまま口縁部へ至る。頭部の内面は明確な稜を持って段を作り、口縁部はわずかに立ち上がるが端部は玉状に近い。口縁端部に凹点を施すが、残存状況から全体の凹点の数は不明である。内外面ともにミガキにより器面調整される。97は胴部下半からやや丸みを帯びて立ち上がり、肩部で「く」字状に強く屈曲する。頭部でも強く屈曲し、短く張り出してそのまま口縁部に至る。頭部内面は強く張り出すが、部分的に指でおよせられ張り出しがなくなるところもある。口唇部に沈線を1条巡らせており、形が浅鉢2～2類の87に類似する。器壁に凹点が多く、やや粗雑な印象を受ける。外面は粗いミガキ及びミガキ後ナデ、内面はミガキ及び一部ケズリにより器面調整される。

ウ. 小型浅鉢 (第35図98・99)

第35図98は底部付近から丸みを帯びて立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頭部で強く屈曲して外側は張り出し、そのまま口縁部へ至る。頭部の内面は明確な稜をもって段を作る。口縁部に欠けが多く判然としないが、口縁端部に小さい凹点を施すと考えられる。内外面ともにミガキにより器面調整される。99は胴部下半から直線的に立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頭部で屈曲して外側に張り出し、そのまま口縁部に至る。口縁端部がすぼまり稜をもつ。胎土や器壁の凹凸などが中型浅鉢の97に類似する。外面は粗いミガキ及びナデ、内面はミガキにより器面調整される。



第35図 包含層出土土器⑯(縄文浅鉢・マリ形・皿形土器)

⑯ マリ形土器・椀形土器 (第35図100～105)

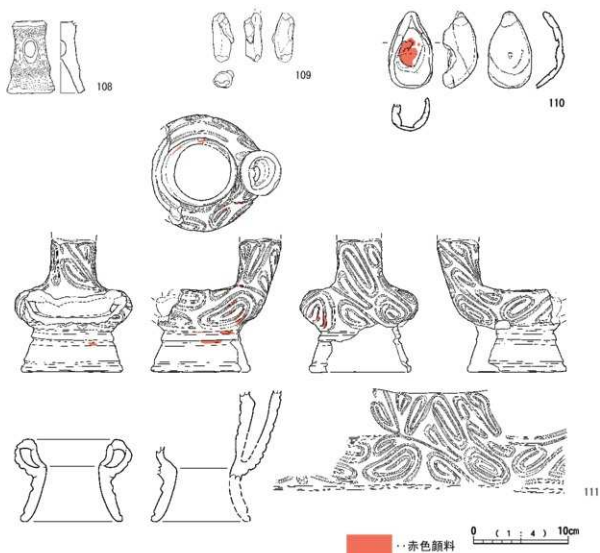
小型の土器群で、器形によりそれぞれマリ形と椀形に分類した。

ア. マリ形土器

肩部が無い、もしくは肩部がわずかに作られるが頸部が極端に短いもので、胴部が丸みを帯びる小型の精製土器である。河口により「マリ形土器」と報告されており(河口 1972: 第2表文献番号4)、その名称を踏襲する。

第35図100は胴部下半からやや丸みを帯びて立ち上がり、肩部で稜をもって屈曲する。頸部で屈曲して大きく外側に張り出し、そのまま口縁部に至る。口唇部はミガキに近いナデ調整で中央部がわずかに凹み、その上から凹点を施す。残存状況から全体の凹点の数は不明であり、凹点内にわずかに赤色顔料が残存する。内外面ともにミ

ガキ後ナデにより器面調整される。101は胴部下半から丸みを帯びて立ち上がり、肩部で稜をもって屈曲する。頸部で屈曲して大きく外側に張り出し、そのまま口縁部に至る。胴部の内面が丸みを帯びて大きく張り出す。口唇部はミガキに近いナデ調整で中央部がわずかに凹み、その上から凹点を施す。残存状況から全体の凹点の数は不明で、凹点内にわずかに赤色顔料が残存する。100より胴部の丸みが強いが、ほぼ同じ器形である。内外面ともにミガキ後丁寧なナデにより器面調整される。102は胴部から丸みを帯びて立ち上がったのち、ほぼ直角に屈曲してわずかに立ち上がり口縁部に至る。口縁部には1条の沈線を巡らせ、口縁端部に小さい凹点を施す。内外面ともにミガキ後ナデにより器面調整される。103は底部付近から丸みをもって立ち上がり、肩部で稜をもって



第36図 包含層出土土器①(縄文その他の土器)・表探土器

屈曲する。頸部はほとんど無く、短く屈曲して外側に張り出したのち口縁部に至る。口縁端部は丸みを帯びる。内外面ともにミガキ後ナデにより器面調整される。104は底部付近から丸みをもって立ち上がり、肩部をほぼ作らずに屈曲して外側に張り出し、そのまま口縁部へ至る。口縁端部は丸みを帯びる。内外面ともにミガキにより器面調整され、他のマリ形土器に比べ小型である。

イ. 椀形土器 (第35図105)

マリ形土器と同様に丸い胴部を持つが口縁部に段を持たず直行するもので、区別して椀形とした。確認できたのは1点のみであった。

第35図105は底部付近から丸みを帯びて立ち上がる小型の土器で、底部が欠けているが丸底を呈すると考えられる。内外面ともにミガキ及びナデにより器面調整さ

れる。

⑦ 皿形土器 (第35図106・107)

丸みを帯びて平たく立ち上がり、口縁部が大きく開く土器である。河口により「皿形土器」と報告されており(河口1972:第2表文献番号4)、その名称を踏襲する。

第35図106, 107はいずれも胴部下半から大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。106は残存状況により径が復元できなかったが、107と同様に大型の皿形土器であると考えられる。外面はミガキ、内面はミガキ後丁寧なナデにより器面調整される。107は大型の皿形土器である。外面はナデ、内面はミガキ後丁寧なナデにより器面調整され、内面は器壁が滑らかで光沢を持つ。

⑧ その他の土器 (第36図108)

第36図108は高杯形土器の脚部と考えられる。底部

から約1.5cm上部、胴部との結節部の2か所を調整により部分的に肥厚させ、「く」字状の細い沈線を巡らす。中央部には楕円形の透かし孔を開ける。透かし孔の直下まで中空に仕上げ、底部端部はやや上がり。内面はナデ、外面はミガキで丁寧に器面調整される。垂水市所在の終原貝塚で類似品が出土しており（垂水市教委2006）、御領式に平行するものであると考えられる¹¹⁾。

⑨ 土製品（第36図109～110）

第36図109は葉巻状の土製品である。丸みを帯びた紐状の粘土に細い粘土紐を貼り付けたもので、貼り付けられた粘土紐は指で押さえつけられ凹んでいる。指頭押圧が単なる添付作業の工程で付けられたものか、凹点などの文様を意識して施されたのかは不明である。上端は、粘土がおよそ半分ほどの厚さになったところで欠損している。下端は部分的に表面が欠けているが、斜位の面取りを行い片側にすぼまる形となる。粘土紐を貼り付けていない面は部分的に平坦面を形成する。全体の形状や用途は不明である。110は片口の小鉢のような形をしているが、用途が不明な土製品である。1本の粘土紐をらせん状に積み上げ、片側をすぼめて注ぎ口のように成形している。内面の底付近は器面調整されず積み痕がそのまま残り、外面はナデで器面調整されているものの、積み痕は残る。また、外面底部の中央部には少量の粘土塊が付着したような突起が確認できるが、製作過程のなかで偶然付着したものか意図的なものかは不明である。また、内面底部付近が赤化しており、赤色顔料が塗布された可能性がある。口縁部が残存している部分の器高はおおよそ4cmである。

⑩ 表採土器（第36図111）

第36図111は「双口土器」として報告された土器である。下部に1条、上部に2条の沈線を巡らせた脚台をもつ。その脚台の上に、ドーナツ状で中空の土台ややラップ状に開く垂直な筒を作る。ドーナツ状の土台と筒の内側の空洞が繋がっているかは不明である。脚台以外の外面及び中空の筒には、渦巻き状の沈線を器面全体に敷き詰めるように施す。内面及び沈線内にわずかに赤色顔料が残存する。器壁はミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。河口は、垂直な中空の筒が二つ付く双口の形と、筒の先端にラップ状の疑似口縁をもつように復元していたが、今回は残存部の実測を行った。本来の全体の形状は破損のため不明である。

河口は、上加世田遺跡の「双口土器」と同じ形態のものとして「千葉県千葉市加曾利貝塚出土の双口異形土器」を挙げており（河口1990；第2表文献番号）、この双口異形土器をもとに111を復元している¹¹⁾。

⑪ 調査年次不明土器（第37図）

注記が不十分で調査年度や出土地点が特定できなかったが、残存状況の良いものを選別して実測した。器種ご

とに詳述する。

① 深鉢A2類（第37図112・113）

第37図112は胴部下半から丸みを帯びて立ち上がり、胴部最大径で「く」字状に屈曲する。胴部上半へ内傾しつつ立ち上がり、頸部で屈曲して外側に張り出したのち直行して口縁部に至る。幅広い口縁部文様帯を持ち、細い沈線を4条巡らす。内外面ともにミガキ及びナデにより器面調整される。内面下部にわずかにコゲ痕が残存する。113は胴部最大径から胴部上半まで丸みを帯びて立ち上がり、口縁部直下で屈曲して外側に張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯には3条の細い沈線を巡らせるが、施文は粗雑である。胴部最大径の屈曲は丸みを帯びているが、口径よりも大きく張り出す。内外面ともにナデ及びケズリに近い工具ナデにより器面調整される。外面の胴部最大径付近に煤痕、内面下部にわずかにコゲ痕が残存する。

② 深鉢A3類（第37図114）

第37図114は胴部最大径から屈曲してやや内傾しながら立ち上がり、頸部で屈曲して外側に張り出したのち、そのまま大きく開いて口縁部へ至る。口縁部文様帯には3条の沈線を巡らすのが、施文は粗雑である。外面はミガキ及びナデ、内面はナデにより器面調整され、外面の胴部最大径付近に煤痕が、内面にコゲ痕が残存する。

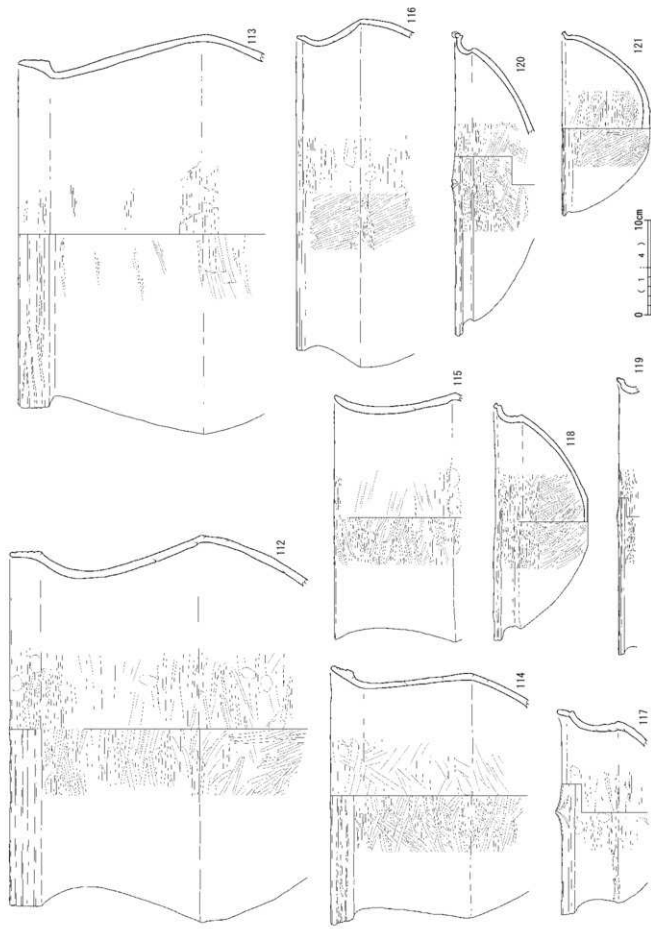
③ 深鉢B1類（第37図115）

第37図115は「く」字状に張った胴部から内傾して立ち上がり、頸部で緩く屈曲して外反しそのまま口縁部へ至る。外面はミガキ、内面はミガキ及びナデにより器面調整される。内面にコゲ痕が残存する。

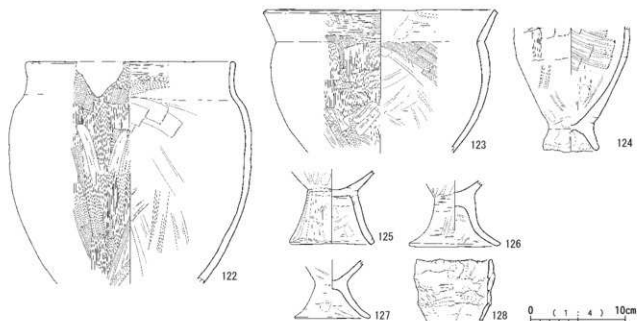
④ 中鉢（第37図116・117）

第37図116は口縁部文様帯の狭さや器形等から中鉢の可能性が高いと判断した。胴部下半から丸みを帯びて立ち上がり、胴部最大径で「く」字状に屈曲する。胴部上半へ強く内傾して立ち上がり、頸部で屈曲して外側に張り出したのち直行して口縁部に至る。口縁部文様帯が狭く、1条の沈線を巡らす。外面はナデ後ミガキ及びナデ、内面はケズリに近いナデ、ミガキ後ナデ等により器面調整される。117は中型の中鉢と考えられる。胴部下半から丸みを帯びて立ち上がり、胴部最大径で「く」字状に屈曲する。胴部上半へ直行して立ち上がり、頸部で屈曲して外側へ張り出したのち、直行して口縁部に至る。口縁部に山形突起を作るが、残存状況から全体の山形突起の数は不明である。口縁部文様帯の下部に沈線を1条巡らせ、山形突起の下には突起の形に添って細い沈線を施す。胴部最大径直上にためのケズリを巡らせており、A1類や中鉢によく見られるような沈線もしくは段を意識していると考えられる。外面はミガキ及びナデ、内面はミガキ後ナデにより器面調整される。

⑤ 浅鉢1類（第37図118～120）



第37圖 包舍陶出土器⑧ (縄文調査次不明)



第38図 包含層出土土器⑨(弥生~古墳)

第37図118は底部付近から丸みを帯びて平たく立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頸部で屈曲して外側へ張り出したのち、短く立ち上がる口縁部に至る。口縁部文様帯には1条の沈線を巡らせ、肩部直上には段を巡らす。底部は平底である。内外面ともにミガキにより器面調整される。119は口縁部のみ残存しているが、浅鉢の可能性が高い。狭い口縁部文様帯に1条の沈線を巡らせ、口縁部に小さい山形突起を作る。山形突起の全体の数は不明である。内外面ともにミガキ及びナデにより器面調整される。120は底部付近から丸みを帯びて平たく立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。頸部で大きく外側へ張り出したのち、短く立ち上がる口縁部に至る。口縁部文様帯の下部に沈線を1条巡らせ、文様帯上端から口唇部、肩部の2か所に凹点を施す。外面はミガキ、内面はミガキ及びミガキ後ナデにより器面調整される。

⑥ マリ形土器 (第37図121)

第37図121は底部付近から丸みを帯びて立ち上がり、肩部で緩く屈曲する。頸部で屈曲して短く張り出し、そのまま口縁部に至る。幅の狭い口唇部に細い沈線を1条巡らす。底部は平底で、内外面ともにミガキで丁寧に器面調整される。

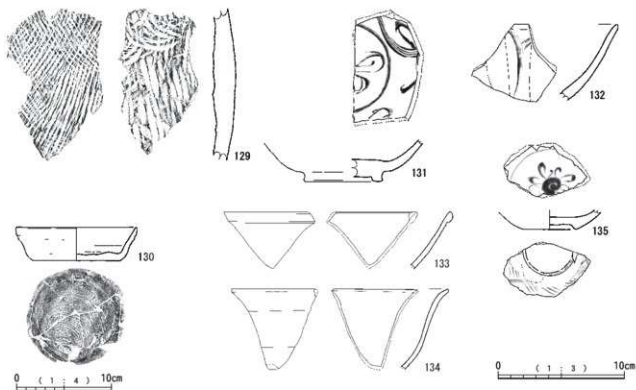
2 弥生時代~古墳時代 (第38図)

当該期の1~3次調査の土器は、遺物収納ケース58箱分が保管されている。黒髪式系統の土器や入来式などの弥生時代中期後半~後期初頭の土器、成川式土器の中

津野式~東原式段階などが見られた。ただし注記がなく詳細が不明な土器片が多い。今回は、調査年次や出土地点等が判明するもので、残存状況が良好なものを抽出し実測した。

第38図122・123は甕である。122は胴部下半から砲弾形に立ち上がり、頸部の内面で稜をもって屈曲し、直行して口縁部へ至る。外面は縦方向のハケ目後強いナデ、内面は横方向のハケ目及び強い指ナデ、工具ナデにより器面調整される。外面の胴部上半に煤痕、内面下部にコゲ痕が残存する。123は胴部下半から丸みを帯びて立ち上がり、頸部で「く」字状に反外して口縁部へ至る。口唇部は平坦面を持ち、中央が調整により凹む。外面口縁部付近はハケ目後ナデ、胴部はハケ目、胴部下部はハケ目後強い指ナデ、内面はナデ及び斜位のハケ目後ナデにより器面調整される。なお、外面のハケ目は縦方向、内面は斜位である。124は小型の甕である。脚部から胴部へ砲弾形に立ち上がるが、口縁部は欠損している。脚部と胴部の境には強い指ナデがみられ、脚部の端部はいびつな作りである。内外面ともにナデ及び工具ナデにより器面調整される。

125は台付甕の脚部で、胴部の底付近までが残存する。外面は縦方向のケズリ後ナデ、内面はナデにより器面調整される。126は高杯の脚部で、下部で屈曲して垂直に立ち上がり、胴部の底部付近まで残存する。内外面ともに丁寧なナデにより器面調整される。外面の胴部と脚部の接合部付近には工具ナデがみられる。127は台付鉢の脚部と考えられ、内外面ともにナデにより器面調整され



第39図 包含層出土須恵器・土師器・陶磁器（古代以降）

る。128は手捏ね土器で、粘土紐を輪積みして成形している。内外面ともにナデにより器面調整されるが、積み痕や器壁の凹凸が明瞭に残る粗雑な作りである。

また、甕棺の口縁部と考えられる破片が2点確認できたが、注記がほとんどなく出土地点等の情報が一切不明であることから、今回は実測を行わなかった。

3 古代以降（第39図）

当該時期の1～3次調査の土器は、遺物収納ケース11箱分が保管されている。土師器、須恵器、瓦質土器、中世～近世の陶磁器（青磁・白磁・染付）などが含まれる。出土地点等が判明するものの中から6点抽出し、実測した。

南さつま市金峰町所在の中岳山麓窯跡群の須恵器片が1点確認できたため、図化した。第39図129は胴部片で、外面は縦位及び斜位の平行タキ、内面は同心円状のタキと縦位の平行タキが残る。

土師器は小片がほとんどであったが、出土地点が判明しかつ完形に復元された中世の土師器1点を図化した。第39図130は土師器の坏で、口径12.6cm、底径9.2cm、器高3.5cmを測る。底部の切り離しは糸切りである。

中世の陶磁器では、青磁2点と白磁2点、染付1点を図化した。第39図131は太宰府編年の龍泉窯系柄Ⅰ-2a類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるもので

ある。内面に片影蓮花文を施す。132は太宰府編年の龍泉窯系青磁Ⅱ-b類（E期：13世紀前後～前半）に比定されるものである。外面に鑄蓮弁文を施す。133は口縁部が玉縁の白磁で、太宰府編年の柄Ⅳ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。134は口縁部周辺の軸を掻き取る口先の白磁で、太宰府編年の柄Ⅴ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。第39図135は小野分類の染付ⅢC群（15世紀後半～16世紀中頃）に比定されるもので、外面に草花文、内面に花文を施す。底部は基筈底である。

近世の陶磁器は、少量の小片のみであったため実測は行わなかった。

第2節 石器

今回の再整理によって遺構から出土していることが確認できた石器は、軽石加工品（136）のみであった。また、包含層における出土状況は、写真記録はある程度残っていたものの注記や図面記録が少なく、一部の事例（第12、13及び17図）を除き状況の詳細な復元等が困難だった。よって、本報告では、分布図は作成せず、調査年次並びに層位情報は第15～18表にまとめ、単純に器種毎に特徴等の概要を述べるに留めることとした。

1 遺構内出土遺物

軽石加工品 (第40図 136)

前章で述べたとおり、1次調査で検出した堅穴住居跡床面から出土した。完形品で、横断面は楕円形、長軸の一端を丸く整形し(以下、上端)、反対側は略平坦に整形している。上端側には、正面に浅い略円形の凹み(径約1.5cm、深さ約2mm)を彫り、その下位には、断面V字の刻線が途切れつつも横位に一周する。横位の刻線は、さらに下部の両側面に数条刻まれている(一周するかは不詳)。また、右側面中央にも、浅い凹み(縦横約1.5cm、深さ約5mm)が1か所彫られている。肉眼観察だが、被熱等の痕跡は確認されない。

2 包含層出土遺物

(1) 石鏃 (第41図 137~147)

未製品を含め、11点図化した。137は、微細な剥離で整形しており、先端並びに脚端を特に鋭く仕上げているほか、両側縁の角度を先端近くで変化させるなど、丁寧な作りである。右脚端を欠損する。138は、2次調査で浅鉢(73)の下から出土した(第13図)。先端部には、左端は正面から、右端は背面から施された折断状の加工がみられる。139と140は、石材は異なるが左右対称の形状である。先端部は、両側縁から更なる微細剥離を加えてさらに鋭く仕上げる。141は、脚部外端を折断して全形を仕上げているのが特徴である。142は、剥片鏃である。右半身は左半身と比べ剥離加工を細かく施しているため、全形が非対称形を呈している。143も、142と類似した形状に仕上げている。裏面に主要剥離面を観察できるが、142よりは全体的に丁寧な加工が施される。144は、挟りを大きく深く入れているのが特徴である。脚端は丸みを持たせている。

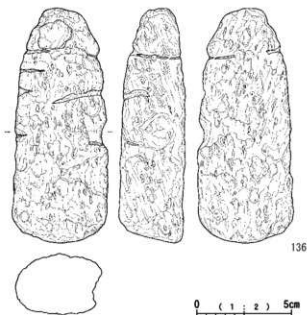
145~147は未製品である。145は挟り部の加工が先行している。146は、脚部の加工が139と類似する。左側縁が数か所で大きく折れており、廃棄原因の可能性がある。147は、側縁等への微細剥離があまり施されていない。

(2) 石鏃 (第41図 148~150)

3点図化した。148は、素材の厚みを生かした丁寧な剥離加工で整形している。先端を欠損するが、端部付近等に横方向の擦痕などはみられない。149は、縦長剥片の基部側に刃部を作出する。先端は折れている可能性があるが、わずかに摩耗している。擦痕は観察されないが横方向の微細な剥離がある。また、左側縁端に微細な剥離が集中している箇所がある。150は、薄い剥片の側縁部に、短い刃部を作出している。剥片鏃またはその未製品の可能性もある。

(3) 掻器 (第41図 151, 152)

2点図化した。151は、方柱状の剥片を用い、基部側に急角度の刃部を形成している。刃部には、一部に微細な剥離も観察される。152は、厚みのある剥片に、求心



第40図 遺構内出土石器

的な剥離を施して整形している。下縁に観察される微細な階段状剥離を使用部と想定したが、石鏃の未製品の可能性もある。

(4) 楔形石器 (第41図 153)

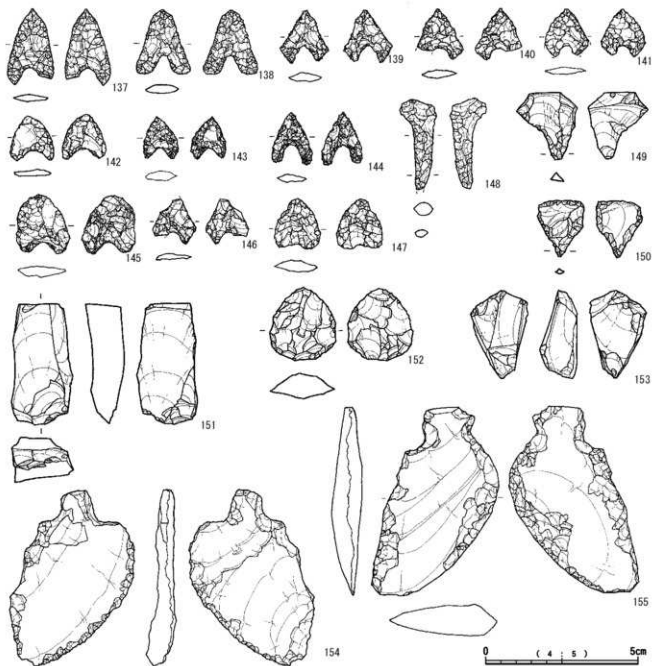
153は、多面体状を呈した肉厚の剥片を用いて、断面V字状になっている下端部を刃部としている。

(5) 石匙 (第41図 154~第42図 157)

4点図化した。詳細な検討を行っていないが、6次調査まで含めて縦型が多く、さらに先端が左右どちらかに大きく振れた、ややいびつな非対称形に仕上げる傾向がある。

154は、やや湾曲する横長剥片を用いて、下端を大きく左側側に振った形状を呈する。つまみ部は突起状に作出するだけで全体に比して小さい。刃部は、右側縁及び端部の左端に微細な剥離加工のみで仕上げられる。155は、横長剥片の両側縁に微細な剥離加工で刃部を作出するが、右側縁のみ切先の摩耗を観察できる。また、右側縁のみ、表裏両面の稜上にわずかな摩滅痕を確認できる。156は、縦長剥片を用い、左右側縁の形状が異なる非対称形に整形する。つまみ部は、基部の両側縁から浅く抉って作出する。刃部は右側縁にごく簡素な調整を施して形成している。155と同様にわずかに摩耗している。下縁には、刃毀れを若干観察できる。157は、刃部先端とつまみ部の右端を欠損する。つまみ部が大きく刃部が小さいのが特徴だが、左右非対称に整形する。刃部加工は左側面にのみ施される。

(6) 2次加工剥片 (第42図 158~161)



第41図 包含層出土石器①

4点図化した。石匙と同じく詳細な検討は経ていないが、6次調査まで含めて小型のものが目立つ傾向にあるようである。

158は、左側縁に素材剥片の基部を薄くするような加工がみられる。159は、厚みのある小片の下縁部に急角度の剥離を加えている。160は、上端が破断面である。両側縁にはスクレイパーエッジ状の断面鈍角の剥離面が形成されている。161は、厚みのある小片に全縁から深い剥離を施しているが、主要剥離面が残る。石匙の未製

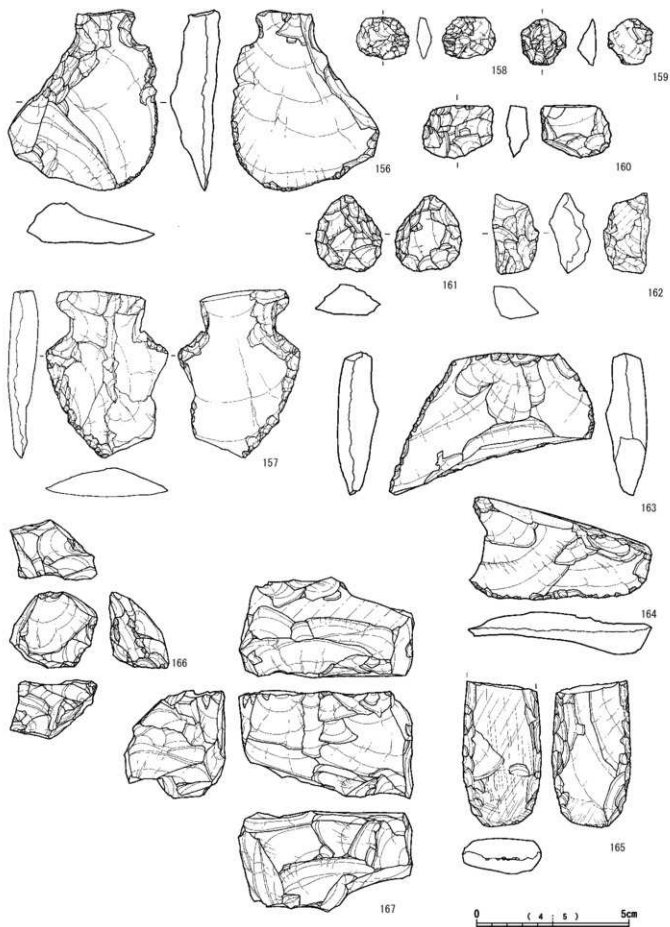
品の可能性もある。

(7) 使用痕剥片(第42図162~164)

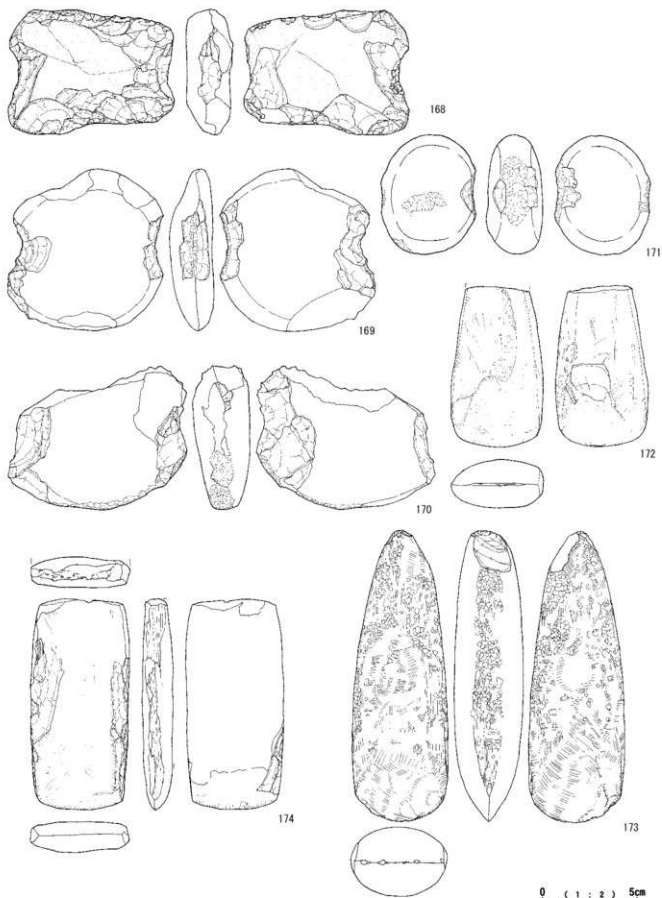
3点図化した。162は、厚みのある小片の側縁に、鈍角の剥離が観察される。163は、折れた縦長剥片の両側縁に、微細な剥離が観察される。164は、自然面を残す縦長剥片の側縁に、微細な剥離が観察される。

(8) ノミ状石器(第42図165)

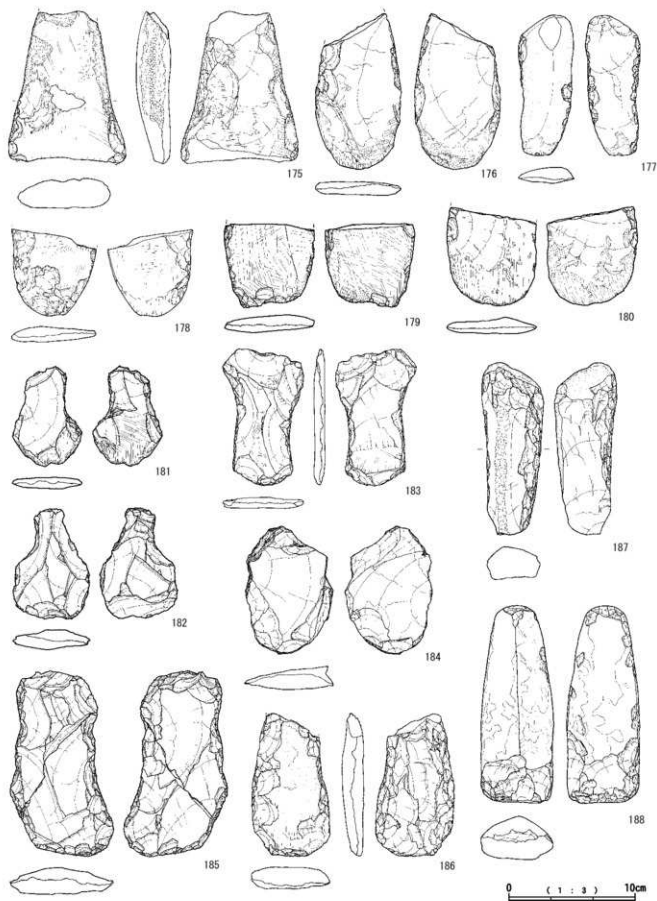
165は、刃部のみ丁寧に研磨して仕上げる。浅い調整剥離が施された側縁は、稜上に若干の摩擦痕を確認でき



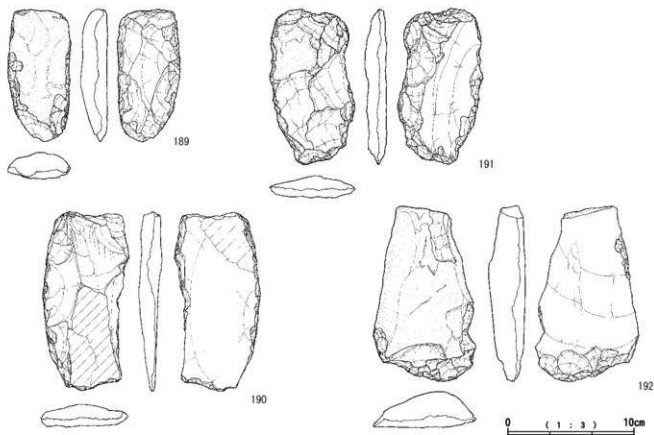
第 42 图 包含层出土石器②



第43图 包含层出土石器③



第 44 图 包含层出土石器④



第45図 包含層出土石器⑤

る。小型の刃部磨製石斧の可能性もあるが、身部を略柱状に整え片刃に仕上げていることから、ノミ状石器と想定した。

(9) 石核 (第42図 166, 167)

2点図化した。小型の素材用の石核と考えられる。ただし、この石核を用いた製品は比較的少ない。

166は、打面と作業面は鋭角である。同一の作業面に対し、打面を右側面、次に背面側もしくは正面へと3回転している。各打面はさほど調整をしていない。左側面は破断面となっている。167は、主な作業面は正面だが、打面も作業面としていた可能性がある。また、底面側にも剥離面がある。右側面は風化の度合いが異なっており、自然面だった可能性がある。

(10) 石錘 (第43図 168 ~ 171)

168は、板状礫の全周に浅い剥離加工を施して整形している。左縁の抉りは素材の原形を利用した可能性がある。また、両端にわずかながら敲打痕も観察される。169は、左縁の抉りは一部不明瞭だが、右縁の抉りは敲打によって作出している。170は、上半を欠損する。両端の抉りは浅い剥離加工で作られている。下縁には敲打部もあり、平坦な面が形成されている。171は、全体形

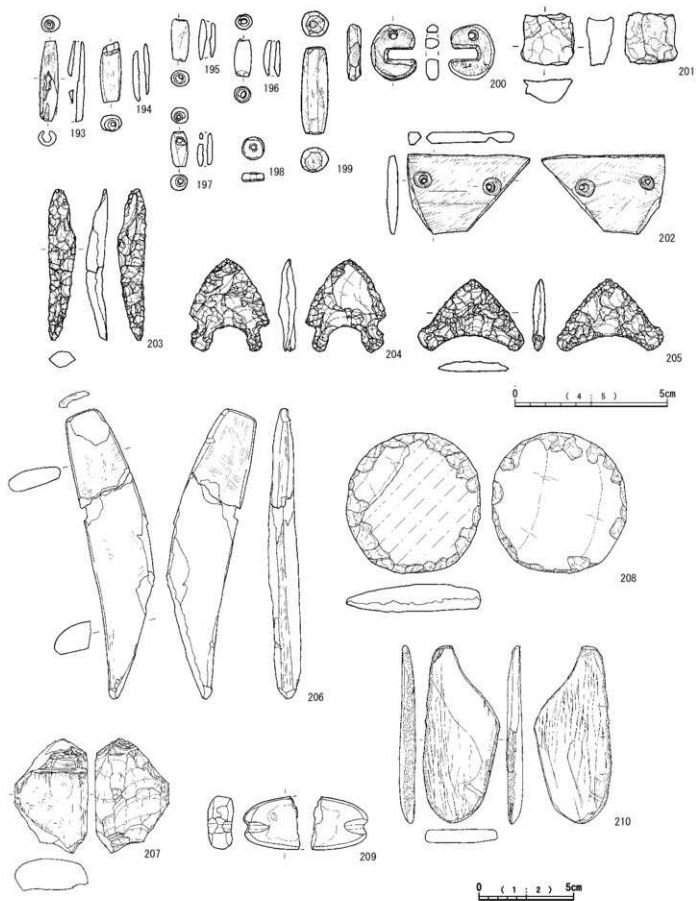
状から石錘と想定したが、抉り部の加工がほとんど敲打であること、上半の外周に叩き痕のような線状痕が観察されることから、叩石である可能性もある。

(11) 磨製石斧 (第43図 172 ~ 174)

3点図化した。172は、剥離や敲打で成形したのちに、全面を研磨して仕上げる。刃部も研磨しているが、刃先にわずかな平坦面を残す。173は、ほぼ完形品である。基部のみ、成形時の剥離が残っている。刃部にはわずかに微細剥離がみられる。174は、風化が著しく、本来はもう少し厚みがあった可能性が高い。刃部はやや片刃に仕上げている。正面の両側縁にある剥離は、側面の研磨後に行われている。

(12) 打製石斧 (第44図 175 ~ 第45図 192)

石器等の可能性もあるものを含め、18点図化した。175は、母岩から剥離した厚みのある剥片に浅い剥離と敲打を加えて整形している。表裏面に研磨痕はみられるが摩滅痕は認められない。176は、薄い横長剥片の側縁に刃部を研磨して作出する。周縁の調整はごくわずかである。刃部には摩滅痕が発達している。177は、母岩から剥離した縦長剥片をほぼそのまま使い、側縁にごく簡単な調整剥離を施し、刃部のみ研磨している。178は、



第 46 图 包含層出土石器⑥

簡単な調整剥離で整形している。正面、裏面とも刃部には摩滅痕が発達している。179は、板状の素材を研磨して仕上げる。刃部には摩滅痕とリタッチがあり、リタッチには摩滅痕が見られない。180も、板状の素材を研磨して仕上げている。刃部には顕著な摩滅痕がある。181は、刃部はよく摩滅して丸く潰れ、表裏両面に線状痕が残る。再加工品の可能性がある。182は、基部を非対称に整形している。刃部にリタッチがある。摩滅痕は確認できない。181と同じく小形で、再加工品の可能性がある。183は基部片だがかなり薄く、節理面から剥脱している可能性がある。下縁には微細な剥離がみられる。184は、身部片だが剥落が激しい。裏面下端の稜上にわずかに摩滅痕が観察される。185は、再加工品と考えられるが、刃部に残る摩滅痕はごくわずかである。186は、自然面を残す身部片で、刃部には表裏面とも摩滅痕が明瞭にみられる。

187～192は、礮器等の可能性もあるものである。187は製作中に破損したと考えられ、棒状素材の周縁に剥離加工や敲打を行っている。188は、上下縁に形成された敲打部と剥離面からは敲石と考えられるが、両側縁には入念な研磨加工も観察されることから、石斧製作途中で用途を変更した可能性がある。189は、未製品と考えられる。190は、下縁から左側縁下部にかけて端部の摩滅痕が観察される。191は、裏面の下縁にわずかな摩滅痕があるほか、稜上もわずかに摩耗している。再利用品の可能性もある。192は、下縁を作業部位とする。礮器の可能性もある。

⑬ 玉類 (第46図193～201)

石材は、199を除きすべてクロム白雲母である。また、管玉や勾玉の端部には、装着に伴う擦過によると考えられる抉れや平滑面が観察されるものが多い。以下、器種ごとに述べる。

管玉は6点図化した。193は、勾玉(200)と同様の不透明な濃い緑色を呈する。胴部中央には、2か所の小孔とそれらをつなぐ切目加工が貫通加工のずれた結合点に施されている。胴部は、わずかに研磨面及び研磨痕を観察できる。上端は、紐襷れによると考えられるV字状のわずかな切目が1か所ある。下端は大部分破損しているが、斜位の平坦面が2か所残っている。194は、不透明な緑色を呈する。上端は斜めに欠損しているが磨面があり、下端には紐襷れによる切込みがある。胴部は断面楕円形に整形され、わずかに研磨面を観察できる。研磨痕は観察されず、表面は他の管玉よりも光沢がなくやや粗くみえる。なお、胴部には、横～斜位に巡る条線が数本観察される。195は、完形品で193と同様の色調を呈する。上端はやや欠損しているが平坦面がみられ、下端には玉擦れ痕がある。研磨面や研磨痕は、ほとんど観察できない。196は、完形品で色調は濃緑色と白色がマー

ブル状に混交する。全形は、他よりも樽形の傾向が強い。上下端ともに玉擦れ痕を観察できる。胴部に研磨面はみえるが、研磨痕は観察できない。197は、完形品で色調はやや濃淡のある不透明な緑色を呈する。胴部の孔は、周辺が研磨されていることから貫通加工中のアクセシビリティにより開いたものと考えられる。上端には管玉との、下端は白玉との玉擦れ痕を観察できる。胴部に研磨面はみえるが、研磨痕は観察できない。

199は、蛇紋岩で管玉の未製品である。胴部には7～8面の不均等な研磨面を観察できる。また、上端に穿孔を開始した凹みが残っており、工程解明の好資料である。他の管玉より重いが、石材の違いのほか、穿孔していないためと考えられる。

198は白玉である。完形品で、色調は比較的濃淡の変化が少ない濃緑色を呈する。上下面に研磨痕も観察できない。側面には研磨痕がわずかに認められる。また、側面の上下端に細かな研磨面が数面あるが、製作時のものか、装着による玉擦れの結果なのかは判別できない。

200は勾玉である。平面形が特徴的な完形品で、色調は濃淡の変化がほぼない不透明な濃い緑色を呈する。全体はほぼ均質に研磨を施し、外側の縁は丸みを持たせる一方で内側の縁は角張らせている。穿孔部に紐襷れ等の痕跡は観察されないが、裏面側には白玉などの玉擦れ痕と考えられる環状の平坦面(幅約2mm)がわずかに観察される。

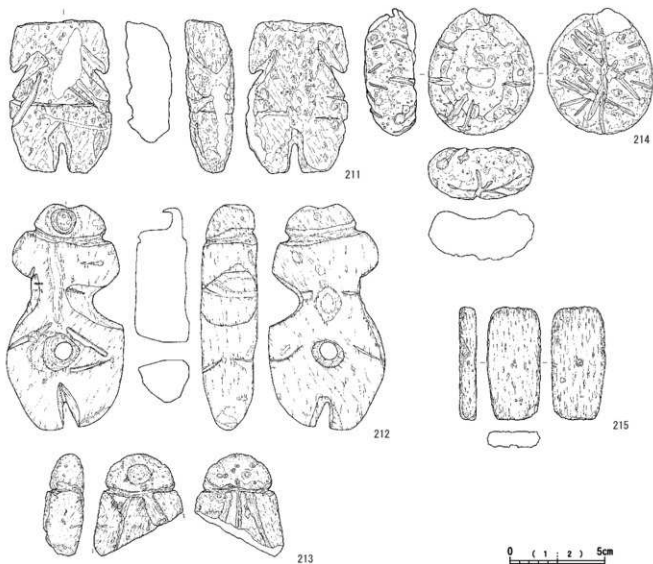
また、原石と考えられる小礫も出土した。201は、クロム白雲母の小礫である。上下端は破断していると考えられる。裏面の稜上には、わずかに研磨痕が観察される。

⑭ 異形石器 (第46図202～210)

202は、右縁が上半こ破損しているが下半には鈍い刃状の研磨整形が残っている。他の縁はすべて丁寧に研磨されている。2か所の穿孔は、曲面の穿孔孔により開けられている。全形は不明ながらも、瑛状耳飾の再加工品と想定されるが、再加工された時期は不明である。

203は、断面形状が上半部の不整な菱形から下半部に向かうにつれて三角形(頂部は正面)へ変化する。裏面左上端の微細剥離は、背後の事故的な剥離の後に施されている。204は、裏面に主要剥離面を残す点が剥片鐵と共通する。下縁に作出された突起部は、大きさは異なるが、基部を挟んで先太りさせる形状は一致する。205は、入念な剥離加工が目立つ。左下端に突起部を作り出す整形や剥離加工、使用石材などが、6次調査で出土した「蛇」状の異形石器と類似する。

206、207は、どちらも破片のため確証はないが石刃の可能性が考えられる。206は、下縁が節理面で破断している。線刻等はみられず、表面は面取り加工を含め丁寧に研磨されている。なお、2層出土という点だが、各所に擦過痕がついている。207は、206と同質の頁岩



第47図 包含層出土石器⑦

を素材とする。左側縁は裏面に粗い平滑面があるため断面が三角形状を呈するが、右側縁は断面が隅丸方形または略円形を呈する。正面上端に横位に刻まれた2条の断面V字の刻線は、右側縁にかかる辺りで終わっている。

208は、安山岩の板状礫を素材として周縁に剥離加工を施し円形に仕上げている。周縁の断面は、全体的には刃状だが、右側縁のみわずかな平坦面がある。

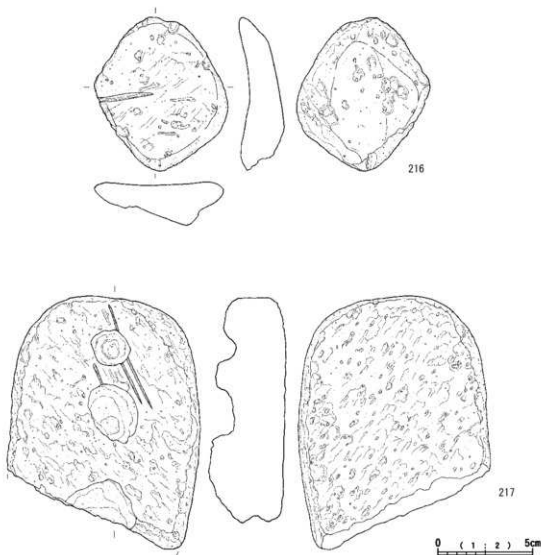
209は、淡紅色を呈する凝灰岩製で、周縁のみ研磨して断面を略長方形に整える。紡錘形の端部には切り込み加工を施している。全形は不詳である。

210は、線刻礫である。頁岩の板状礫の正面並びに裏面に、ごく細い条線が縦位に多数刻まれている。条線は、直線を基調とし太さや長さは不揃いであるが、間隔などは概ね揃っている。横方向の条線は、端部の数か所で観

察されるが短い。また、側縁には細かい敲打痕状の加工が施され、上端と下端は摩耗して光沢を帯びている。右側縁は欠損と考えられるが、下部には敲打状加工、上部は摩滅痕があり欠損後も利用されていたことがわかる。

(15) 軽石製品 (第47図211～第48図217)

211～213は、岩偶である。211は、正面並びに右側面の一部を欠損するが、完形品である。主に正面に断面V字状の沈線で抽象的な文様を描く一方、裏面には腰部に同種の沈線が2条巡る程度である。また、表面のみ色調が全体的に薄く赤みを帯びている。顔料が付着している可能性がある。212も、211と類似する形状と施文であるが、頭部の作出や腰部の穿孔が大きく異なる造形である。両腕部がないが、右腕部には破断面を確認できるものの、左腕部は浅くレンズ状に彫りこぼめてあり、腕部が存在



第48図 包含層出土石器⑧

しない理由は判然としない。213はセミ型と称される岩偶の一部と考えられる。沈線の特徴が前2者と異なる。

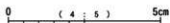
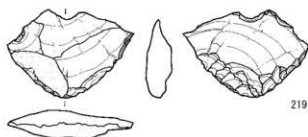
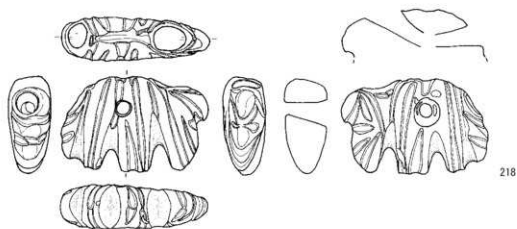
214は、正面中央部を浅く彫りくぼめ、その外縁に放射状に短沈線を刻んでいる。裏面にも、上下方向に刻まれた沈線を中心に放射状に短沈線が刻まれている。215は、板状に整形している。風化が著しいが正面と裏面では平滑度合いが異なる（正面がより平滑）。全体に沈線等は確認できない。216は、正面に砥石のように浅く湾曲する平坦面が形成されている。他の面も整形されている可能性がある。217は、正面を伏せた状態で出土した。下半を欠損するが、厚みのある小判形に整形し、大ききの違う孔を縦位に3か所開けている。上位2か所の孔周

辺にはやや鋭利な工具による線刻もある。

⑩ その他の石器類（第49図）

ここでは、表採品など出土地点を解明できなかったもののうち2点を図化した。

218は、獣形勾玉として報告された資料である。今回の再整理で、ヒスイ製であることが判明した。表面は、下面から施された3か所の深い切込み部以外、線刻の内面まで平滑で光沢を帯びる（研磨痕は観察できない）。全身の線刻は、左右対称を基本とするようだが徹底していない。体部中央及び両側面の孔は、同じ工具によると考えられ、すべて連結している。しかし、側面の2孔は外から中心に向けて軸がずれた状態で穿たれ、体部中央



第49図 表採玉製品・調査次不明石器

の孔は裏面側からのみの穿孔で貫通している。また、側面の2孔には、外下端に紐擦れ痕のような細かい刻みも確認できるが、体部中央の孔にはそのような痕跡は観察されない。

219は、2次加工剥片で、他にこの白いチャートを用いた石器はみられないため、掲載した。

【註】

(1) 本天道輝氏のご教示による。

【引用参考文献】※第2表掲載の文献を除く

- 大坪志子 2015『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』雄山閣
 小野正敏 1982「15, 16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府の文化財第49集
 垂水市教育委員会 2006『柘原貝塚Ⅱ』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

第 3 表 靖土器観察表(2)

器物番号 器物名	器種	本器色 分類	部位	器底 クワッド 層	器高 (cm)	文様・模様		胎土				色調	内面	注記	備考		
						外周	内面	石灰 長石	角礫石	砂質	内層					胎質	胎質
24	深鉢	深灰	口~胴部	2次	C-1 4下	-	-	-	○	○	○	○	○	○	底面C<L.4下 底面C<L.4 底面C<L.3上 底面C.面.3 底面C.面.3	底質	
				1次	C-1 4上												
				2次	C-1 3上												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												
29	深鉢	深灰	口~胴部	2次	C-1 3下	35.8	-	底線 3片半輪文字・貝輪縁	○	○	○	○	○	○	○	底面C<L.3下	底質
				1次	C-4 3下												
				2次	C-4 3下												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												
31	深鉢	深灰	口~胴部	2次	C-1 5	37.3	-	底線 3片半輪文字	○	○	○	○	○	○	○	底面C<L.3下	底質
				1次	C-4 5												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												
32	深鉢	深灰	口~胴部	2次	A-2 4	33.3	-	底線 3片半輪文字	○	○	○	○	○	○	○	底面C<L.3下	底質
				1次	A-2 4												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												
35	深鉢	深灰	口~胴部	2次	C-6 2	32.3	-	底線 3片半輪文字・ケズリ 文字	○	○	○	○	○	○	○	底面C<L.6.2	底質
				1次	C-6 2												
				2次	C-6 2												
				2次	C-6 2												
				2次	C-6 2												
36	深鉢	深灰	底部	2次	A-3 9	31.7 8.0	43.3	底線 3片半・黒い十字 雲形輪文字	○	○	○	○	○	○	○	底面C<L.9.11.7	底質
				1次	A-3 9												
				2次	A-3 9												
				2次	C-4 3												
				2次	C-4 3												
37	深鉢	深灰	底部	2次	C-3 4	46.2	底線 十字縁3片半	○	○	○	○	○	○	○	○	底面C<L.3下	底質
				1次	C-3 4												
				2次	C-3 4												
				2次	C-3 4												
				2次	C-3 4												
38	深鉢	深灰	底部	1次	A-2 5	37.9 7.6	45.2	底線 十字縁3片半・十字 字縁3片半	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.5.3 上方4片	底質
				2次	A-2 5												
				2次	C-6 3												
				2次	C-6 3												
				2次	C-6 3												
39	深鉢	深灰	口~胴部	1次	A-3 4	38.8	-	底線 3片半・十字・黒い十字	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.5.3 底面C.面.3	底質
				2次	A-3 4												
				2次	A-3 4												
				2次	A-3 4												
				2次	A-3 4												
40	深鉢	深灰	口~胴部	1次	A-3 4	33.6	-	底線 十字	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.4.0 底面C.面.4.0	底質
				2次	A-3 4												
				2次	A-3 4												
				2次	A-3 4												
				2次	A-3 4												
41	深鉢	深灰	口~胴部	1次	A-3 4	34.6	-	底線 ケズリ・十字	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.4 底面C.面.4	底質
				2次	A-3 4												
				2次	A-4 4												
				2次	A-1 4												
				2次	A-1 4												
42	深鉢	深灰	口~胴部	3次	-	36.3	-	底線 十字	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.4 底面C.面.4	底質
				2次	-												
				2次	-												
				2次	-												
				2次	-												
43	深鉢	深灰	口~胴部	2次	A	42.0	-	底線3片半・3片半輪文字 十字	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.1.7.6	底質
				1次	A												
				2次	A												
				2次	A												
				2次	A												
44	深鉢	深灰	口~胴部	1次	A-2 5	37.0	-	底線 3片半・十字	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.2.5 底面C.面.2.5	底質
				2次	A-2 5												
				2次	A-2 5												
				2次	A-2 5												
				2次	A-2 5												
45	深鉢	深灰	口~胴部	1次	A-2 5	30.3	-	十字縁3片半・ケズリ・十字・指文字 十字・3片半	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.11.9 上方4片	底質
				2次	A-2 5												
				2次	A-2 5												
				2次	A-2 5												
				2次	A-2 5												
46	深鉢	深灰	底部	1次	A-2 5	32.1	46.1	底線 3片半・黒い十字	○	○	○	○	○	○	○	底面C.面.3 底面C.面.3	底質
				2次	A-2 5												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												
49	深鉢	深灰	底部	2次	C-3 4	45.9 7.0	45.6	底線3片半輪文字	○	○	○	○	○	○	○	底面C 底面C 底面C	底質
				1次	C-3 4												
				2次	C-3 4												
				2次	C-3 4												
				2次	C-3 4												
50	深鉢	深灰	口~胴部	2次	C-2 2下	32.3	-	底線 十字・黒い十字	○	○	○	○	○	○	○	底面C<L.2下 底面C<L.2下	底質
				1次	C-2 2上												
				2次	C-2 3												
				2次	C-3 3												
				2次	C-3 3												

第 0 表 絹文器観察表(3)

器名 番号	器種	本器名 分類	部位	図説 ウツド	寸法 (cm)	用途	文様・模様		胎土					胎土 内層	胎土 外層	備考					
							用途	内層	石瓦	赤石	黒石	胎土	胎土				胎土	胎土			
30	51	深鉢	口~縁部	2.2	C-4	3.下										記述 KC 182A-C-IV-3.下	備考 コウ属, 深底 小径(13~5.5mm)				
				2.2	C-4	-															
				3.2	C-4	3.上															
				?	C-4	3.上	18.6		ナ字												
				2.2	C-2	3															
31	52	深鉢	口~縁部	1.2	A-2	3												備考 深底 小径(13~5.5mm)			
				2.2	B-1	3	24.0		ミガキ, 龍いナ字, ケズリ, 指ナ字 龍い指ナ字												
				2.2	B-1	3															
				2.2	C-6	7	31.6		深底, ナ字, ミガキ, 龍いナ字												
				2.2	C-7	7															
32	54	深鉢	口~縁部	2.2	C-4	3	19.4											備考 コウ属, 深底 小径(13~4mm)			
				2.2	C-4	3															
				2.2	C-4	3															
				2.2	C-4	3	16.1		龍いナ字, 工舞ナ字, 指ナ字 ミガキ, ナ字												
				2.2	C-4	3.上	12.4		深底, ミガキ, ナ字												
33	55	深鉢	口~縁部	2.2	C-4	3.上												備考 深底 小径(13~5.5mm)			
				2.2	C-3	3	19.0		深底, ナ字, ナ字龍ミガキ ナ字												
				2.2	C-7	2.下	16.0		深底, ミガキ ナ字												
				2.2	C-7	1.下			ミガキ, ナ字, 工舞ナ字 ミガキ, ナ字												
				2.2	C-7	3	16.2		深底, ミガキ, ナ字												
34	56	深鉢	口~縁部	2.2	C-5	3	4.9	4.2										備考 深底 小径(13~5.5mm)			
				2.2	C-6	3															
				2.2	C-6	3	15.3		ナ字												
				1.2	A-3	4															
				1.2	A-3	4	12.1		深底, 凹底, ナ字龍ミガキ ナ字龍ミガキ, 指ナ字												
35	57	中鉢	口~縁部	1.2	A-3	4												備考 深底 小径(13~5.5mm)			
				1.2	A-3	4															
				1.2	A-3	4															
				1.2	A-3	4	12.1		深底, 凹底, ナ字龍ミガキ ナ字龍ミガキ, 指ナ字												
				1.2	A-3	4															
36	58	中鉢	口~縁部	1.2	A-3	4	18.9											備考 深底 小径(13~5.5mm)			
				1.2	A-3	4															
				2.2	C-2	2.下	15.8	11.7		深底, 凹底, ミガキ, ナ字 ナ字, 工舞ナ字, 指ナ字											
				2.2	C-2	2.上	15.8	11.7		深底, 凹底, ミガキ, ナ字 ナ字, 工舞ナ字, 指ナ字											
				2.2	C-2	3	16.0		深底, ミガキ, ナ字 ミガキ, ナ字												
37	59	中鉢	口~縁部	1.2	A-1	5	33.0											備考 深底 小径(13~5.5mm)			
				1.2	A-1	5															
				2.2	B-1	3															
				2.2	B-1	3															
				2.2	B-1	3	11.6		深底, ミガキ ミガキ												
38	60	中鉢	口~縁部	1.2	A-5	4	27.2											備考 深底 小径(13~5.5mm)			
				1.2	A-5	4															
				2.2	C-4	3	26.0		深底, 凹底, ミガキ ミガキ												
				2.2	C-4	3	20.1		深底, 凹底, ミガキ 深底, 凹底, ミガキ												
				2.2	C-4	3	18.6		深底, 凹底, ミガキ 深底, 凹底, ミガキ												
39	61	深鉢	口~縁部	1.2	A-5	4	23.4											備考 深底 小径(13~5.5mm)			
				1.2	A-5	4															
				1.2	A-5	4	19.0		深底, 凹底, ミガキ 深底, 凹底, ミガキ												
				1.2	A-5	4	14.5		深底, 凹底, ミガキ 深底, 凹底, ミガキ												
				1.2	A-5	4	19.0		深底, 凹底, ミガキ 深底, 凹底, ミガキ												

第15表 縄文時代石器類発表表①

標記番号	地層番号	器種	原料 (河口産否)	形状	断面 形状	区	層	寸法 (cm)		重量 (g)	石材	備考	注記	カード注記	図説本文録 (第2巻本文録号)	
								長さ	幅							
40	136	石棒	石棒	1次	A	IV	5	12.50	6.00	3.30	53.68	任意形状出土	注記なし	上野野田A・IV・5	文録1	
	137	石錐	石錐	2次	C	IV	3	2.90	1.90	0.30	0.72	安山岩	注記なし	KC UEK 2-C・IV・3	文録1	
	138	石錐	石錐	2次	C	IV	3下	2.15	1.80	0.30	0.87	チャート	注記なし	上野野田C・IV・3下 任意形状出土		
	139	石錐	石錐	3次	F	III	2	1.90	1.60	0.30	0.52	黒曜石	注記なし	上野野田F・III・2 S 44. 8. 14		
	140	石錐	石錐	2次	B	IV	3	1.70	1.50	0.30	0.49	チャート	注記なし	KC UEK 2-B・IV・3	文録1	
	141	石錐	石錐	2次	C	III	3	1.60	1.40	0.20	0.55	チャート	注記なし	上野野田C・III・3 任意形状より注記不明		
	142	石錐	石錐	3次	F	III	2	1.50	1.50	0.20	0.40	黒曜	注記なし	上野野田F・III・2 S 44. 8. 17	文録1	
	143	石錐	石錐	3次	F	I	3	1.40	1.15	0.30	0.39	チャート	注記なし	上野野田F・I・3 S 44. 8. 16		
	144	石錐	石錐	3次	X	-	2	1.75	1.35	0.20	0.35	黒曜石	注記なし	上野野田X・2 S 44. 8. 14		
	145	石錐	石錐	3次	F	V	2	1.95	1.30	0.35	1.00	黒曜石	注記なし	上野野田F・V・2 S 44. 8. 14		
	146	石錐	石錐	2次	C	-	-	1.50	1.40	0.20	0.35	黒曜石	注記なし	KC UEK 2-C	文録1	
	147	石錐	石錐	1次	A	III	4	1.70	1.50	0.40	0.88	安山岩	注記なし	A・III・4 11. 4	文録1	
	148	石錐	石錐	3次	F	I	2	13.00	1.20	0.45	1.07	安山岩	注記なし	上野野田F・I・2 44. 8. 17	文録1	
	149	石錐	石錐	3次	F	III?	IV?	2	2.20	1.92	0.62	1.70	黒曜石	注記なし	上野野田F・III・2 S 44. 8. 13 上野野田F・IV・2 44. 8. 13	
	150	石錐	石錐	3次	X	-	2	1.83	1.47	0.30	0.80	チャート	注記なし	上野野田X・2 S 44. 8. 14		
	151	石錐	石錐	2次	C	-	-	3.96	1.96	1.42	13.00	安山岩	注記なし	UEK 3-F・2 F・特・No.2 上野野田 44. 8		
152	石錐	石錐	2次	C	III	3	2.37	2.12	0.85	4.10	黒曜	注記なし	UEK C・III・3 543. 12. 31			
153	棒状石錐	石錐	2次	-	-	-	2.87	1.83	1.19	5.81	安山岩	UEK 2				
154	石錐	石錐	3次	F	I	3	5.80	4.10	1.00	13.60	チャート	注記なし	上野野田F・I・3 44. 8. 16			
155	石錐	石錐	2次	C	IV	2	6.20	4.20	1.10	19.74	安山岩	注記なし	上野野田C・IV・2	文録1		
156	石錐	石錐	2次	C	III	2下	5.93	4.87	1.68	31.20	黒曜	注記なし	上野野田C・III・2下 S 43. 12. 30-31			
157	石錐	石錐	1次	A	I	4	5.60	4.00	1.00	19.79	黒曜	注記なし	上野野田A・I・4 S 43. 11	文録1		
158	二次加工新片	石錐	1次	A	III	4	1.40	1.70	0.50	1.22	チャート	任意形状より注記不明	A・III・4 11. 4	文録1		
159	二次加工新片	石錐	1次	A	III	5	1.50	1.45	0.80	1.30	黒曜石	注記なし	UEK 1-A・III・5			
160	二次加工新片	石錐	2次	C	III	2	1.71	2.30	0.80	3.70	安山岩	注記なし	UEK 2-C・III・2			
161	二次加工新片	石錐	3次	F	III	2	2.49	2.18	1.15	5.20	安山岩	注記なし	上野野田F・III・2 44. 8. 14 A特 No. 8			
162	棒状石錐片	石錐	3次	F	I	2	2.65	1.50	1.05	3.16	チャート	注記なし	上野野田F・I・2 S 44. 8. 19			
163	棒状石錐片	石錐	2次	D	I	3	4.68	5.63	1.30	35.10	黒曜	注記なし	上野野田D・I・3 →10番裏カケ S 43. 12. 31			
164	棒状石錐片	石錐	2次	C	III	3	3.37	5.90	1.39	15.50	黒曜	注記なし	UEK 2-C・III・2			
165	ノミ状石錐	石錐	2次	C	III	2	4.90	2.57	1.16	19.00	黒曜	注記なし	UEK 1-A・III・5			
166	石錐	石錐	1次	A	III	5	2.50	2.79	1.92	11.40	赤色チャート	注記なし				
167	石錐	石錐	2次	C	III	2	3.53	5.78	3.30	65.40	黒曜	注記なし	UEK 2-B・III・2			

第16表 縄文時代石器調査表2

標識番号	品名	原料 (河川産物)	形状	用途 (推定)	区	層	寸法 (cm)			重量	石材	備考	注記	カード注記	調査文献 (参考文献番号)	
							長さ	幅	厚さ	g						
168	石鏃	石鏃	2次	トレンチ 2次	C	I	2	8.80	6.00	2.00	205.00		上方野古C-1・2 S 43, 12, 20		文献1	
169	石鏃	石鏃	3次	X	I	3	8.60	2.20	2.35	161.76			上方野古X-1・3 等1 S 44, 8, 17			
170	石鏃	石鏃	3次	X	I	3	9.50	(1.60)	3.05	226.00			上方野古X-1・3 等1 S 44, 8, 17			
43	171	石鏃 (磨)	3次	F	III	3	6.45	5.00	3.00	122.78			注記なし			
172	石鏃 (磨)	多岐式磨製石鏃	1次	A	IV	4	9.60	4.90	2.60	175.16			上方野古A-III・4 S 43, 10, 10		文献1	
173	石鏃 (磨)	丸山式磨製石鏃	1次	B	IV	2	15.45	5.10	3.65	416.00			上方野古B-IV・2 S 43, 10, 10		文献1	
174	石鏃 (磨)	多岐式磨製石鏃	1次	A	I	5	11.20	5.30	(1.70)	143.92			注記なし		文献1	
175	鏃頭	打製鏃頭	2次	C	V	3上	(11.90)	9.30	2.30	396.00			上方野古C-V・3上 12, 31 (F, S 43)		文献1	
176	石鏃 (打)	打鏃 (舌状)	2次	C	I	2下	(12.40)	6.80	1.10	103.20			上方野古C-1・2 F S 43, 12, 20		文献1	
177	鏃頭	半磨製石鏃	1次	A	V	4	11.20	9.40	1.30	78.14			上方野古A-V・4 上方野古C-1・2 F S 43, 12, 20		文献1	
178	石鏃 (打)	打鏃 (舌状)	2次	C	II	2	(6.90)	6.70	1.30	70.59			上方野古C-II・2 S 43, 12, 20		文献1	
179	磨平鏃頭	磨平鏃頭	2次	C	V	3	(6.50)	7.04	1.35	67.60			上方野古C-V・3 S 43, 12, 20		文献1	
180	磨平鏃頭	磨平鏃頭	2次	C	II	2	(7.80)	7.02	1.25	82.60			上方野古C-II・2 S 43, 12, 20		文献1	
44	181	打製石鏃	2次	C	VI	3上	7.88	5.41	0.88	36.20			注記なし			
182	打製石鏃	打製石鏃	3次	F	III	3	8.68	6.00	1.53	65.40			注記なし			
183	石鏃 (打)	打鏃 (舟形)	2次	C	I	3上	10.80	6.40	0.90	71.58			C-1・3上 S 43, 12, 29 V		文献1	
184	打鏃	打鏃 (舟形)	1次	A	II	5	10.30	6.90	1.90	111.21			上方野古A-II・5 上方野古C-V・3 S 43, 12, 20		文献1	
185	打製石鏃	打製石鏃	2次	C	V	3	14.70	8.10	2.10	228.10			上方野古C-V・3 上方野古A-III・3 上方野古C-1・2 F S 43, 12, 20		文献1	
186	石鏃 (打)	打製鏃頭	1次	A	IV	5	(11.30)	6.20	1.70	157.79			上方野古A-IV・2下 S 43, 12, 27		文献1	
187	石鏃	石鏃	2次	C	V	2下	13.70	4.90	2.65	246.00			上方野古C-V・2 F S 43, 11, 3		文献1	
188	打鏃	打製鏃頭	2次	C	VI	2下	15.70	5.70	3.45	371.00			上方野古C-VI・2 S 43, 11, 3		文献1	
189	石鏃	打製鏃頭	1次	A	II	4	10.50	4.90	2.10	134.39			注記なし		文献1	
45	190	石鏃 (打)	打鏃 (舟形)	2次	A	I	2	14.20	6.70	1.80	174.05			上方野古A-I・4 3回 S 43, 10, 15		文献1
191	石鏃 (打)	打鏃 (舟形)	1次	A	V	4	12.30	6.70	1.80	137.86			上方野古A-V・4 S 43, 11, 3		文献1	
192	鏃頭	打製鏃頭	1次	A	II	5	13.80	8.10	2.90	347.00			上方野古A-II・5 F 2 S 43, 11, 9		文献1	
193	磨玉	磨玉	2次	C	III	2磨下	3.20	0.85	0.70	1.71			上方野古C-III・2 磨下 S 43, 12, 31		文献1	
194	磨玉	磨玉	2次	C	II	2	1.90	0.70	0.55	0.93			注記なし		文献1	
195	磨玉	磨玉	2次	C	IV	3	1.45	0.70	0.60	0.64			上方野古C-IV・3 S 43, 12, 31		文献1	
196	磨玉	磨玉	2次	C	I	3	1.25	0.60	0.50	0.53			上方野古C-I・3 S 43, 12, 30		文献1	

第17表 縄文時代石器類表3③

標本番号	器種番号	器種 (河口標本付)	図説 部分	トレンチ	区	法線 (cm)			重量 (g)	石材	備考	注記	カード注記	印刷本文 (原本文献番号)
						長さ	幅	厚さ						
197	磐玉	磐玉	2次 C	I	2層	1.15	0.55	0.50	0.44	クロム白磁石		注記なし	上方等分C・1・2層 44. 8. 17. 3	文献1
198	臼玉		3次 F	II	3	0.80	0.55	0.30	0.30	クロム白磁石		注記なし	上方等分F・3 14. 8. 17. 3	
199	磐玉未製品		3次 X	-	2	2.50	0.90	0.80	3.35	磁石		注記なし	上方等分X・2 溝石, 磐玉 44. 8. 17. 3	
200	臼玉		3次 F	V	2	1.80	1.50	0.45	1.63	クロム白磁石		注記なし	上方等分F・V・2 44. 8. 14. 37	
201	磨石?		3次 F	I	2	1.65	1.65	0.90	3.75	クロム白磁石		注記なし	上方等分F・I・2 44. 8. 15 14. 8. 15	
202	磨石磨		3次 F	II	2	2.70	4.10	0.40	5.81	磁石		注記なし	上方等分F・II・2 14. 8. 15	
203	磨石磨	未研磨?	1次 A	II	5	5.00	0.90	0.50	1.88	磨石		注記なし	A・III・5 part 10. 29	文献1
204	磨石磨	研磨	2次 C	I	2. 7	3.10	2.70	0.60	3.57	チャート	以上出土, 調査記録より注記不明	注記なし	C・1・2下 10. 27	文献1
205	磨石磨		1次 A	I	4	2.30	3.50	0.35	2.21	磨石		注記なし	上方等分A・I・4 No.19 日輪 10. 27	
206	石刀		3次 F	I	2	(15.40)	2.80	1.80	83.66	黄岩		F・I・2	上方等分F・I・2 44. 8. 12	
207	石刀	石刀	3次 X	I	2	(15.40)	2.80	1.80	83.66	黄岩		X・I・2	上方等分X・I・2 44. 8. 12	文献1
208	石刀	石刀	2次 A	II	2層下	(8.10)	3.90	1.70	52.19	黄岩		注記なし	上方等分A・II・2層下 5. 44. 1. 1	文献1
208	円形石磨		2次 C	II	3	7.05	7.10	1.50	102.71	火山岩		注記なし	上方等分C・II・3 5. 44. 1. 1	文献1
209	石製品		2次 C	II	2下	(2.90)	2.80	1.40	15.68	湖底岩		注記なし	上方等分C・II・2下 5. 43. 12. 31	
210	線刻棒		2次 C	II	3	9.50	4.10	0.75	38.73	黄岩	調査記録より注記不明	注記なし	C・III・3 44. 1. 1	
211	磨石	磨石	3次 F	II	2	8.20	5.40	2.40	28.85	磨石		注記なし	上方等分F・II・2 磨石 14. 8. 15	文献10
212	磨石	磨石	2次 C	II	3	12.10	6.20	2.90	45.39	磨石		注記なし	上方等分C・II・3 43. 12. 31	文献10
47	213	磨石	2次 C	II	2	(5.45)	(4.75)	2.10	12.19	磨石		注記なし	上方等分C・II・2 43. 12. 30	
214	石皿	磨石	2次 C	II	2	6.80	5.60	2.80	24.09	磨石	調査記録より注記不明	注記なし	C・II・2 43. 12. 30	文献1
215	磨石		2次 C	II	3上	5.95	2.65	0.90	4.75	磨石		注記なし	上方等分C・II・3上 14. 8. 15	
216	磨石製品		3次 F	IV	7	8.20	7.00	2.30	24.26	磨石		注記なし	上方等分F・IV・7 43. 12. 31	
217	磨石製品		1次 A	II	6	(13.50)	10.25	4.10	210.00	磨石		注記なし	上方等分A・II・6 43. 12. 31	
218	磨石製品	磨石製品	2次 -	-	数珠	3.10	4.90	1.40	32.30	ヒスイ		注記なし	MC 583 1・4・3・6	文献10
219	二次加工断片		不明	-	-	2.90	4.06	0.92	8.00	チャート		注記なし		

第四章 自然科学分析

本遺跡出土遺物に付着した赤色物質について、双眼実体顕微鏡による観察及びエネルギー分散型蛍光X線分析装置による成分分析を行った。

第1節 試料

土器表面に塗布または付着していた赤色粒子
土器 5点, 土製品 1点 計6点

第2節 観察・分析方法

1 形状観察

双眼実体顕微鏡（ニコン製 SMZ1000）での8～80倍観察

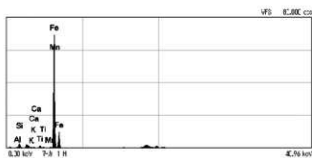
2 成分分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000, X線管球ターゲット：ロジウム, X線照射径 100 μm）を使用し, X線管電圧：15/50kV, 電流：自動設定で分析を行った。

第3節 結果

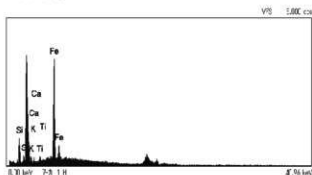
試料の蛍光X線分析スペクトルチャート（成分分析）

(1) 試料 74



スペクトルチャート

(2) 試料 111



スペクトルチャート

と FPM 定量結果, 双眼実体顕微鏡による形状観察結果の1例である。今回は紙面の都合上, 掲載番号 74・111・66・110 のみ結果を掲載する。

第4節 考察

蛍光X線分析の結果, いずれの試料も赤色部分から鉄 (Fe) の成分が高く検出されたため, 鉄を主成分とする広義のベンガラ (赤色顔料) である可能性が高い。74・78・79・111 は塗布した赤色顔料が凹み中や器壁に残存したと思われる。

66 は内面底部に黒斑と考えられる部分が認められ, その周囲のみが赤化している。110 は胎土中と赤色部分の分析を行い, 赤色部分から鉄 (Fe) が検出されたが胎土中からも鉄 (Fe) が大きく検出されている。表面の顕微鏡観察では土器表面に赤色部分が被さるようにも見えるため, ベンガラを塗布した可能性もある。66 と 110 の2点は, 赤色顔料を塗布したものの, 製作途中または使用中での胎土自体の発色 (赤色化) を区別するのは難しい。

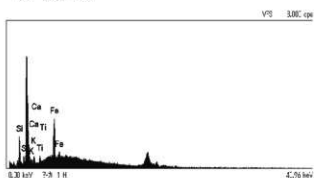
元素	ライン	質量濃度 [%]	3σ [%]	強度 [cps/MA]
13 Al アルミニウム	K	11.19	1.16	4.62
14 Si けい素	K	27.78	1.07	24.77
19 K カリウム	K	1.10	0.22	3.58
20 Ca カルシウム	K	1.02	0.21	4.21
22 Ti タタン	K	1.17	0.10	20.30
25 Mn マンガン	K	0.32	0.07	7.99
26 Fe 鉄	K	57.41	1.11	1523.90

FPM定量結果

元素	ライン	質量濃度 [%]	3σ [%]	強度 [cps/MA]
14 Si けい素	K	54.53	2.58	10.82
16 S 硫黄	K	5.33	1.34	2.56
19 K カリウム	K	7.55	2.05	2.99
20 Ca カルシウム	K	4.48	1.71	1.99
22 Ti タタン	K	2.37	0.60	4.02
26 Fe 鉄	K	25.73	1.45	92.40

FPM定量結果

(3) 試料 66



スペクトルチャート

元素	ライン	質量濃度 [%]	3 σ [%]	強度 [cps/mA]
14 Si けい素	K	58.82	2.86	13.58
16 S 硫黄	K	6.90	1.40	3.30
19 K カリウム	K	10.47	2.16	3.94
20 Ca カルシウム	K	10.50	2.32	4.16
22 Ti タタン	K	3.37	0.90	4.58
26 Fe 鉄	K	9.93	0.82	32.77

FPM定量結果

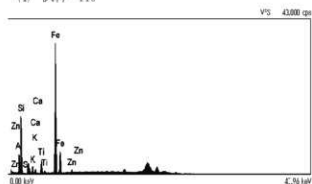


形状観察結果 (全体)



形状観察結果 (拡大)

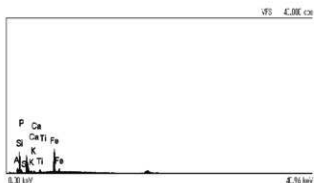
(4) 試料 110



スペクトルチャート (胎土中)

元素	ライン	質量濃度 [%]	3 σ [%]	強度 [cps/mA]
13 Al アルミニウム	K	23.95	0.66	55.00
14 Si けい素	K	58.02	0.66	182.40
16 S 硫黄	K	0.14	0.05	1.21
19 K カリウム	K	3.29	0.16	25.14
20 Ca カルシウム	K	1.52	0.11	14.15
22 Ti タタン	K	2.23	0.09	81.75
26 Fe 鉄	K	10.70	0.17	941.51
30 Zn 亜鉛	K	0.14	0.03	16.54

FPM定量結果 (胎土中)



スペクトルチャート (赤色部分)

元素	ライン	質量濃度 [%]	3 σ [%]	強度 [cps/mA]
13 Al アルミニウム	K	18.90	1.35	9.37
14 Si けい素	K	57.13	1.54	40.21
15 P リン	K	8.93	1.00	6.81
16 S 硫黄	K	0.33	0.43	0.53
19 K カリウム	K	4.55	0.63	6.56
20 Ca カルシウム	K	2.70	0.53	4.64
22 Ti タタン	K	1.69	0.20	11.20
26 Fe 鉄	K	5.78	0.24	98.11

FPM定量結果 (赤色部分)

第V章 1～3次調査の総括

第1節 遺構について

1～3次調査で検出された遺構についてまとめる。

1次調査で検出された遺構のなかで図示できたものは、3層のビット6基、5層の住居跡1軒・集石（小礫集積地）1基・ビット1基である。3層ビットについては平面図の記録しかなく詳細が不明だが、2次調査記録の中で「A. III SpIt 10.29」というメモと石器（第46図203）のスケッチが確認できた。AトレンチⅢ区の5層にはビットがなく、1次調査当時にビット出土遺物の記録もないことから正確な出土状況は復元できなかった。

Aトレンチから検出された「住居跡」は、中央に灰や炭化物が出土していること、大型の土器破片が多く出土していることなどから、住居跡の可能性は高いと考えられる。この住居跡からは、深鉢A1類と深鉢B1類、深鉢C類が出土していることから、これらの深鉢は伴関係にある可能性が高いといえる。次項で詳述するが、この土器群はいわゆる上加世田式の古い段階に相当すると考えられ、住居跡もこの時期のものである可能性が高い。縄文時代後期後半の住居跡として非常に貴重な例となる。ただし、実測図で見ると住居跡は深さが浅く、本来の掘り込み面より5層より上層である可能性がある点は注意が必要である。そのため、II章で先述したように、住居跡検出面の上層にあたる4層で出土した完形の土器3点（第7図参照）やその他の住居跡上層から出土した土器は、住居跡の埋土中の遺物である可能性も考えられる。住居跡の東側に隣接する集石（小礫集積地）は、検出面や断面図などの記録が無く、住居跡に付随するものかは不明である。

2次調査では配石遺構1基と、各トレンチからビットが検出されている。Aトレンチ3層の配石遺構では石組み内に青磁が出土し、調査者によって平安時代から鎌倉時代初めかと予想されているが、青磁の詳細が不明である。ビット、柱穴については2層及び3層からの出土がほとんどだが、遺構内遺物は確認できず、詳細な時期の検討が難しい。

3次調査では記録がほとんど無く、図が復元できたのはビットが1基のみであった。遺構内出土遺物等の記録もなく、時期や性格については不明である。

1～3次までは遺構数が少なく、記録簿も限られていたため詳細な検討ができないものが多かった。次年度の4～6次調査では遺構やそれに関する記録類が多いため、それらも含めた調査範囲全体の遺構配置を把握し、検討する必要がある。

第2節 土器について

1 出土状況

土器のセット関係を把握する上では一括遺物を検討することが望ましいが、1次調査の住居跡出土土器以外に一括性が高い土器が確認できなかった。住居跡出土遺物についても、包含層出土遺物よりは一括性が高いものの、住居跡の本来の掘り込み面が不明なこと、照合できた器種が深鉢のみであったことなどから、器種同士のセット関係を正確に検討することはできなかった。

また、複数の層位から出土した土器片が接合されて復元されている土器が見られること、主に2層～5層を中心とする複数の層から形式が類似する縄文土器が多数出土していることから、層位的な検討も難しいと判断した。

2 各時期の土器について

1～3次調査での本遺跡の主体をなす遺物は、縄文時代後期後半の土器群である。前項で述べた出土状況から、器種ごとの共時性を検討することができなかった。そのため土器は、全体の器形や文様、口縁部形態を参考に形式的な分類を行い、先行研究の事例を参考に相対的な前後関係を検討した。弥生時代以降の土器に関しては現在の分類にあてはめ、保管している土器の様相について述べる。

(1) 縄文時代

深鉢A1類・深鉢B1類としたものは、内湾する口縁部や丁寧な沈線、「く」字状に強く張る胴部最大径、その直上の沈線及び段などが特徴で、いわゆる御領式までは遜らないもののその器形や施文の影響が強く残る土器群である。A類とB類で文様の有無の差はあるが器形は共通しており、いずれも御領式に近い上加世田式（南さつま市教委2015における上加世田式古段階相当）と考えられる。深鉢A2・深鉢B2類としたものは、口縁部が直行するものが多く、深鉢A1・B1類では丁寧ではっきりしていた沈線が粗雑になり、胴部最大径の張りや弱まり頸部が直線的に立ち上がる土器群である。メリハリのある器形が崩れ施文もやや粗雑化することから、深鉢A1・B1類よりも後出する可能性が高く、上加世田式より新しい段階（南さつま市2015における上加世田式新段階相当）であると考えられる。深鉢A3類・深鉢B3類は口縁部が外反して口縁部文様帯が広くなり、胴部最大径から口縁部まで直線的に立ち上がる土器で、深鉢A2類・B2類よりもさらに新しい段階（南さつま市2015における入佐式古段階相当）に該当すると考えられる。深鉢A1・B1類や深鉢A2・B2類に比べ、個

体数は非常に少ない。小型深鉢も深鉢と同様の分類基準で、小型深鉢A1・B1類が深鉢A1・B1類、小型深鉢A2・B2類が深鉢A2類・B2類との器形の共通性が高い。砲弾形の深鉢C類は、一定数の出土がみられるものの上加世田式や入佐式とは一線を画す特殊な器形である。第三章で先述したが、河口は6次調査の報告で砲弾形の土器を報告しており、その特殊な器形や出土数の少なさを指摘している（河口1973：第2表文献番号5）。この前年の報告では上加世田式～井手下式の編年を行っているが、編年表に砲弾形の土器は含まれておらず、本文中でも言及がない（河口1972：第2表文献番号4）。今回の照合作業により、1次調査の住居内で、深鉢A1類・深鉢B1類と共に深鉢C類に該当する土器（第19図8）が出土していることが判明した（第6図参照）。また、B2類に該当する第30図51は、砲弾形を基準にして胴部中央部分のみを梗を持たせてわずかに張るように成形しており、深鉢C類と深鉢B2類の折衷のような印象を受ける。以上のことから、深鉢C類は少なくとも上加世田式期には器種組成の中のひとつとして普遍的に存在していると考えられる。この砲弾形の土器に関して、均一に薄い器厚や粘土の輪積みなどが晩期初頭並行期の韓国系の土器に類似しており、土器の製作過程に影響した可能性も考えられる。

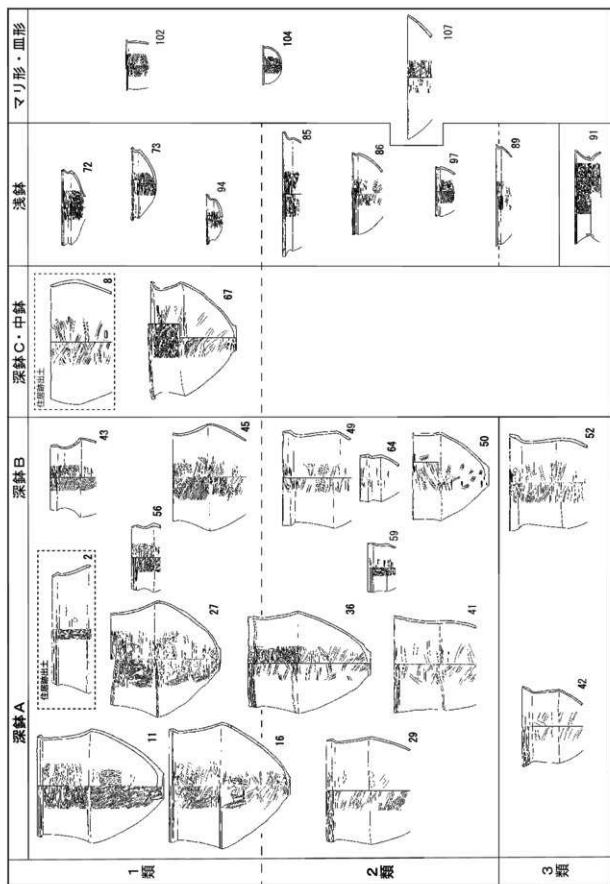
中鉢としたものは深鉢と浅鉢の中間的な器形であるが、ミガキによる丁寧な器面調整や口縁部施文などは浅鉢要素が強い。いずれの中鉢も器形に共通性があり、胴部最大径及び頸部の強い屈曲は深鉢A1・B1類に類似する。ただし、底部形態に差異が見られ、丸底のもの（第33図66・69）、円盤状に張り出すもの（第33図67）のほか、第33図68と同一個体と考えられる平底の底部が確認されている。胴部から口縁部までの器形の共通性が高いことから、個体差の可能性が高いのではないかと考えられる。

浅鉢1類は肩部の強い張り、肩部上の段、内湾または直行する口縁部、口縁部の沈線と凹点などが特徴である。河口は上加世田式～井手下式を編年するにあたって、上加世田式の浅鉢について「口辺は外反し、口縁部は立ちあがって外面に1条の沈線と凹点をめぐらし、4個の山形隆起部には凹点を施している」と記述しており（河口1972：第2表文献番号4）、浅鉢1類の分類基準もほぼ同じである。胴が張る器形は深鉢A1類・深鉢B1類と類似しており、これらと同時期の浅鉢である可能性が高い。浅鉢2類は、頸部から口縁部にかけての張り出しが大きくなる2-1類と縮小する2-2類で細分した。2-1類は入佐式古段階の浅鉢（堂込1997の精製浅鉢A）に類似するが、肩部がわずかに上向きで強く張り、浅鉢1類の器形の特徴を残している。2-2類は上加世田遺跡12次調査報告（南さつま市教委2015：第2表文献番

号14）の系統Iや系統IIの浅鉢に類似しており、1類に見られる凹点を口縁部に残すものもある。これらのことから、浅鉢2類は浅鉢1類の特徴を残しつつ器形が変化している段階（上加世田新段階）である可能性が高い。浅鉢3類は口縁部が玉状になり明確な文様帯が消失することから、浅鉢2類の次の段階であると考えた。その他の浅鉢としたものは、器形での共通性が見られないが、第35図91・92のリボン状突起が付けられるものは入佐式の新段階に相当する浅鉢であると考えられる。第35図93は肩部直上までを肥厚させるという他の浅鉢にない特徴をもつが、口縁部が頸部から直線的に開く器形などから入佐式の浅鉢である可能性が高い¹¹⁾。中型浅鉢は、浅鉢との器形・施文の共通性から1類が浅鉢1類並行、2類が浅鉢2類並行と考えられる。小型浅鉢は2点のみであったため分類を行わなかったが、いわゆる上加世田式の範疇に入る可能性が高い。

マリ形土器・皿形土器について、河口は「マリ、皿形土器では推移がとりにくい。このような器形については制約がなかったようにみえる」と記述しており（河口1972：第2表文献番号4）、明確な分類基準や時期的な変遷について言及していない。今回も器種の中で分類は行わなかった。マリ形土器の中でも、口縁部の凹点が施されるという点では第35図100・101・102がより古い段階のものである可能性が高い。また、新たに椀形土器という器種を設定した。南さつま市教委2015（第2表文献番号15）の報告における浅鉢64など、類似する器形の土器はみられるものの、本報告の椀形土器は口径に対して器高が高く、口縁部が直行するという特徴がある。河口も報告しているように、並行関係が考えられる土器群を判断するのは困難である。

その他の土器として掲載した高杯形土器の脚部については、第三章で述べたように御銅式期である可能性が高い。今回掲載した遺物の中では最も古い段階にあたる。第36図109の土製品は、第47図212の軽石製岩偶の近くで出土しているが（第12図参照）、両者の関係性や土製品そのものの用途は不明である。第36図110は、河口による調査日誌に「F13 南東角出土の土器群の中にさじ状の特殊土器出土 今日珍品である」と記録されているが、それ以外の記述がない。「F13」はFトレンチI区3層のことである。Fトレンチの調査担当者の日誌によると、I区3層について「土器は全般的に多量出土し・・・ほとんどが大石型で・・・大石型の土器も印象として、やゝ器形もイメージが異なっている感じで・・・御領員塚に出ているものにより類似しているようである」と記録されているが、110が出土した「南東角出土の土器群」についての詳細な記録がなく特定できない。「大石型」は大石式のことである。現在の大分県豊後大野市緒方町に所在する大石遺跡を標式遺跡とする土器である。賀



第 50 図 上加世田遺跡縄文後期後半土器分類図

川光夫は縄文時代晩期を3時期に分け、Ⅰ式を大石式、Ⅱ式を黒川式と礫石原式、Ⅲ式を山の寺式および原山式とした(賀川1969)。賀川がまとめた大石式(晩期Ⅰ期)や、別府大学文学部考古学研究室の大石遺跡調査報告(別府大学文学部考古学研究室編1967)を見ると、形式のバリエーションが多く、現在の御領式から黒川式の古段階頃までの土器を包括していると考えられる。日誌の御領貝塚出土の土器に類似するという記述からも、おそらく本報告での深鉢A1・B1類(上加世田式古段階)が出土していたのではないかと考えられる。

以上、1～3次の土器分類について述べた。型式分類図を第50図に示す。1～3次調査の地点では、上加世田式古段階から入佐式新段階まで土器製作が連続と続き、土器の形式が漸移的に変化していると考えられる。そのため、2つの分類の中間形式のような土器がみられる器種や、時期幅が広いもしくは前後する可能性がある器種が存在する。その場合は第50図の分類間の境界線を点線で示してある。

河口は、上加世田式～井手下式の編年の報告(河口1972:第2表文献番号4)から18年後に、3次調査の資料を中心に1次・2次調査資料も加え、晩期土器の詳細な型式分類・編年を行っている(河口1990:第2表文献番号11)。いずれの型式も、精製浅鉢と粗製深鉢のセットで捉えている。河口が上加世田式としたセットは、精製浅鉢は本報告での中鉢や浅鉢1類類似土器、粗製深鉢を本報告での主に深鉢A1・B1類類似土器としている。概ね本報告での最も古い型式(各器種の1類)に当てはまるが、本報告の第35図93(その他の浅鉢)や端部が玉縁状になりかけている浅鉢が、河口の上加世田式に含まれていることに注意が必要である。入佐式としたセットは、精製浅鉢は本報告での浅鉢2類と3類類似土器・リボン状突起のついた浅鉢(第35図91)・マリ形類似土器、粗製深鉢は深鉢3類類似の口縁部が大きく開く土器としている。また、「型式の母外にはつづれる土器」として無文土器を挙げ、本報告の深鉢C類は黒川式にもみられること、無文の小型深鉢(第32図63類似)は上加世田式に共存しながらも御領式にも見られることを述べている。

本遺跡の著名な遺物として「双口土器」が挙げられるが、Ⅱ章で詳述した発見当時の記録から、「双口土器」は表採土器として扱わなければならない。器形としては、河口が復元したように双口の可能性があるが、残存状況から全体の器形を推定するのは難しい。木下尚子による「双口土器と獸形勾玉」の報告では(木下2001)、双口土器について3名の研究者からの所見を記載している。

- ・長野県大町市津遺跡の縄文晩期後半土器に類似の文様があるが、時期や器形に矛盾が生じる。(設楽博己氏)
- ・加曾利貝塚例に類似し、器形については影響を受け

ている可能性が高いが、文様表現は類例を見つけることができない。搬入されたのは難しく、在地もしくは周辺の土器文様を大幅に変容させて創出した可能性もある。(小林青樹氏)

- ・器形は九州では稀、文様も九州のものではない。九州人が見よ見真似で懸命に作ったものではないか。(水ノ江和同氏)

以上の所見のもと、木下は「当該土器を東日本の具体的な地域や型式と対応させることは、困難のようである」と述べている。また、河口や小林が類例として挙げた加曾利貝塚の「双口異形土器」については、千葉市教委による報告では「加曾利B1式の内面文様の発達しない類型の口縁部断面に近しいものようである」と述べ、加曾利B1式に位置づけている(千葉市教委2017)。このほか、茨城県美浦村所在の陸平貝塚で大野雲外氏が収集した双口土器があるが(美浦村教委2006)、上加世田遺跡の「双口土器」とは文様や器形が異なる。以上の先行研究や所見等をまとめると、

- ・器形、文様ともに九州の土器に類例が見られない。
- ・器形は東日本の影響を受けて製作された可能性はあるが、類例は非常に少ない。文様は、縄文後期～晩期の遺物で全国的に見ても類例がないことから、搬入品とも考えづらい。
- ・縄文土器である可能性は高いものの、並行する型式や具体的な時期の検討は困難。

というのが「双口土器」の現段階での評価である。

(2) 弥生～古墳時代

当該期の土器で残存状態が良好なものは、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての成川式土器(中津野式～東原式)が中心であった。口縁部では黒髪式系統の土器や入来式などが確認できており、埋文センター保管の当該期の土器は弥生時代中期～古墳時代前期までの土器片が中心になっていることがわかった。第Ⅲ章で述べた壺椀片に関しては、芝原遺跡(埋文センター2013)や下小路遺跡(河口ほか1976)での出土事例と類似しており、弥生時代中期後半に該当すると考えられる。1層か2層出土のものが多数を占めるが、当該期の土器は注記がなく情報が不明なものも多いため、注意が必要である。

(3) 古代以降

9世紀頃の中岳山麓窯跡産と考えられる須恵器片を1点図示した(第39図129)。中岳山麓窯跡群は、上加世田遺跡から北東におよそ2.5km離れた中岳に位置し、芝原遺跡(埋文センター2012)や渡畑遺跡(埋文センター2011)でも中岳山麓窯跡産の須恵器が多数出土している。特に芝原遺跡の溝8号からは大甕(埋文センター2012:遺物番号244・245など)が良好な状態で出土しており、今回報告した須恵器片と同類のものであると考えられる。また、今回図示した須恵器片以外では、樺万丈窯産

の須恵器片1点、熊本県荒尾市所在の荒尾窯跡群産の須恵器片1点、備前焼の挿鉢破片1点などが確認でき、いずれも中世に属すると考えられる。

土師器は口縁部の小片を中心に保管されていたが、完形に復元されていたものは第39図130だけであった。古代～中世までのものが混在している可能性が高い。

白磁は玉縁の椀Ⅳ類、口売の椀Ⅴ類を1点ずつ図化した。このほかに椀Ⅳ-1b類に比定される底部や広東産白磁の小片等が確認できた。青磁は龍泉窯系椀Ⅰ-2a類、龍泉窯系椀Ⅱ-1b類を1点ずつ図化した。銅緑釉の破片が1点確認できた。

近世の遺物は小片20点程度しか保管されていなかったが、内野山窯産の銅緑釉の破片が1点確認できた。

以上のように、当該期は他の時期に比べて保管数がかない少ないものの、バリエーションが多く、広い時期にわたる土器・陶磁器が少量ずつ保管されていることがわかった。注記がある土器片はほぼ2次調査出土のもので、1層か2層出土のものがほとんどである。河口を含めた調査者らは攪乱層の遺物とみていたようだが、特に中世までの遺物は河口が選別して持ち帰った可能性もある。

第3節 石器について

第3章で述べたように、1～3次調査については、遺構との詳細な関係や包含層における分布状況の詳細などは解決できなかったものの、それでも第12図で示した2次調査における土製品(109)、線刻磁(210)、円盤型石製品(208)及び岩偶(212)の例や、第17図に示した3次調査における岩偶(211)、勾玉(200)、異形石器(202)の例並びに第13図で示した土器集中②における石鏃(138)の例などを明らかにすることができた。

また、石器組成や使用石材については、河口が『鹿児島考古』第7号でまとめた内容や南さつま市教委の報告(市教委2020)をほぼ追記する内容で整理作業が進んでいるが、2次加工剥片、使用痕剥片や礫器など簡易な加工具や磨礫石については、かなりの量が出土していることが判明しつつある。次刊でまとめる全体統括において新たな情報や知見を提示できるか、整理作業とこれまでの報告や分析との比較検討を進めていきたい。

最後に、獣形勾玉について追記する。第3章でも述べたとおり、今回の再整理で石材がヒスイ(特に白色成分が多い部分を使用)であることが特定できたことは大きな成果である。また、複数の有識者から以下の見解を得られたことで、獣形勾玉の「現状」を整理できたことが挙げられる。

○見解が共通した点

- ・縄文時代中～後期の犬の九州における再(又は再々)加工品

- ・形態や文様モチーフの系譜が不明
- ・再加工されるまでの時系列がまったく不明
- ・再加工される前の大珠の形状(特に全形における穿孔の配置)や再加工の方法等が不明

○見解が分かれた点

- ・4か所の孔の穿孔時期(同時か、どちらかが再加工時)
- ・福岡市吉武高木遺跡出土の勾玉に類似のものがあり、できれば九州のどこかで、類例が出土することを願うところである。

【注】

- (1) 藤尾慎一郎氏のご教示による。
- (2) 本田道輝氏のご教示による。

【引用参考文献】※第2表掲載の文献を除く

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 賀川光夫 1969 「九州 晩期の様相と研究史」『新版考古学講座3 先史時代』雄山閣
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 『芝原遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(170)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013 『芝原遺跡4』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(178)
- 河口貞徳・旭慶男・最所大輔 1976 「下小路遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会
- 木下尚子 2001 「双口土器と獣形勾玉」『鹿児島考古』第35号 鹿児島県考古学会
- 清田純一 1998 「縄文後・晩期土器考-中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について-」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 千葉市教育委員会 2017 『史跡 加曾利貝塚 総括報告書』第1分冊
- 堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討-入佐式と黒川式の細分-」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
- 中村直子・藤藤マリアほか 2015 「中岳山麓窯跡群の研究」鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
- 別府大学文学部考古学研究室編 1967 「縄文晩期農耕文化の研究に関する合同調査-大分県大野郡緒方町大字大石遺跡昭和40年度調査概報-」『九州考古学』31九州考古学会
- 美浦村教育委員会 2006 『陸平貝塚-調査研究報告書2・学史関連資料調査の成果-』陸平研究所叢書3
- 水ノ江和同 1997 「北部九州の縄紋後・晩期土器-三万田式から刻目突帯文土器の直前まで-」『縄文時代』8 縄文時代文化研究会

圖 版



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

①遺跡近景 ②・③aトレンチ住居跡 ④aトレンチ3層ピット ⑤・⑥・⑦遺物出土状況



①・②遺跡遠景 ③・④・⑤・⑥・⑦・⑧遺物出土状況



①調査風景 ②Xトレンチ ③Fトレンチ ④Xトレンチ遺物出土状況 ⑤Fトレンチ土層断面
⑥・⑦・⑧遺物出土状況



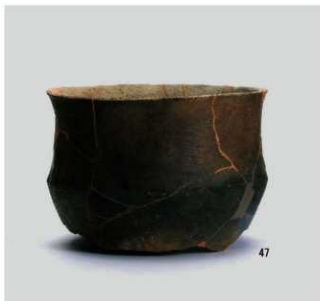
















56



59



57



61



64



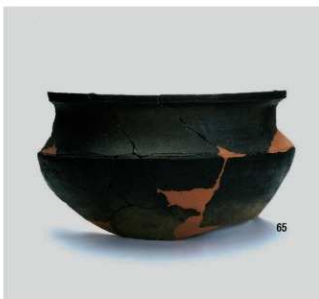
60

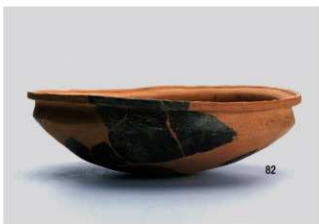


62



63







77



87



83



84



86



88



89



91





103



104



107



108



110 外



109 表



109 側面



110 内







122



123



125



128



124



127



130



133



134



129
外面



129
内面



131
内面



131
外面



135
内面



135
外面





168



169



172



174



173



181



182



187



183



188



185



176



178



180





鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (209)

上加世田遺跡 1

— 県内遺跡発掘調査等事業に伴う河川貞徳コレクション発掘調査報告書 (4) —

発行年月 2021年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5812

印刷 株式会社 国分新生社印刷
〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久620-1
TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979